THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿三年　第五號

第二百三十號

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京高等師範學校教授
文部省視學官兼
乙竹岩造先生著

歐米教育視察報告十二集

全一冊　總クロース
紙數三百餘頁
實費金九十錢
郵税金八錢

本書は先生が歐米留學の傍彼地に初中高等の教育状況にして本邦教育上取つて參考とすべき問題に就いて研究調査の上曩に文部省に報告せられたるものを今般歸朝紀念として恩師、先輩、辱知、親戚に贈らんが爲めに之れを輯集せられ弊店之れが印刷製本の下命を受けたるものにして實に左の十二文を収む、

一、獨國エナ市ニ開設セラレタル教員夏期講習會丼ニ瑞西國ニ於ケル教育巡視報告
二、聾啞救恤ニ關スル萬國會議丼ニ體育ニ關スル萬國會議ノ状況報告
三、白耳義國、和蘭國、丁抹國ノ學事ニ關スル報告
四、獨逸國ニ於ケル學事ノ状況
五、マンハイム市ニ於ケル學級編制ノ状況ニ關スル報告
六、佛國學事ノ状況
七、現時歐洲ニ於ケル性慾ニ對スル教育及飲酒ニ對スル教育ノ状況ニ關スル報告
八、獨英兩國普通教育ノ比較ニ關スル報國
九、男女苦學ニ關スル歐洲ノ状況ニ關スル報告
十、歐洲諸國ニ於ケル手工科教授ノ状況ニ關スル報告
十一、獨逸國ニ於ケル社會教育ノ状況
十二、北米合衆國學事状況報告

先生慧眼を以て視察調査せられたる以上の問題其の何れとして本邦教育上參考の價値多大ならざるなきは敢へて喋々の辯を須ひずして明なる所然り而して先生は本書に依りて釐毫の利を收められざるは勿論弊店も亦敢へて之れによりて些少の收益だも望まず只本書の價値を遺憾なく發揮することなくして已むに忍びざる所あり特に先生に乞ふて其の殘本を實費をもつて江湖有志の士に頒たんとす憾らくは印刷部數の僅少なる從つて十分實費を低減して之を頒つ能はざるを玆に弊店の微衷を表はして敢へて江湖有志の諸君に告ぐ

發行所

東京京橋區南傳馬町二丁目
振替貯金口座二八〇九番
電話本局二一六三番

目黑書店

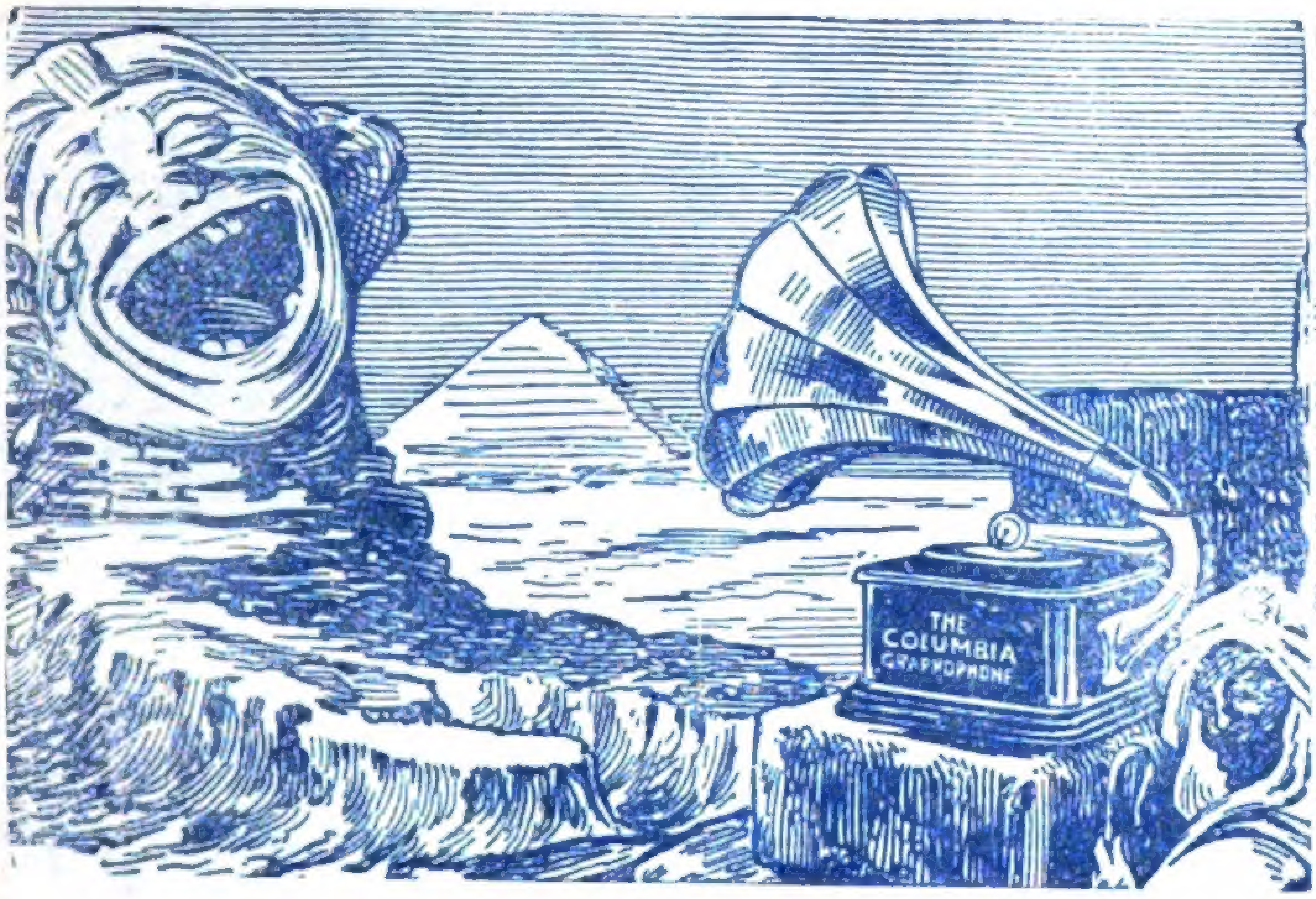


中央公論第二十三年第五號目次

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◉天賞堂特製 大聲寫聲機平圓盤レコード新着

本堂特製東洋一手販賣に係る大聲寫聲機日本譜平圓盤は其成績頗る佳良にして洽く世上の好評を博し曲種の多き既に數千に上り需用倍々増加して着荷の譜盤毎に數日を支へざるの盛況を呈せるもの是れ偏に愛顧諸君の賜にして深く感謝に堪へざるなり今回又左掲の如く大方各位の期待せらるゝ最新特製の日本譜及び再製譜共更に數百種着荷せり本堂は此際江湖に對て特に低價を以て之を頒賣し以て平素の恩眷に酬いんと欲す冀くは多少を問はず速に尊需の榮を給らんことを



⊙長唄之部
三絃 杵屋六左衛門 唄 芳村伊十郎
秋の色種●勧進帳●吾妻八景●執着獅子●元祿踊●鶴亀●黒髮●雀踊屋臺嘶子●芝居嘶子●筑摩川●越後獅子●蜘蛛拍手●舞●芳原雀●操り三番叟●五條橋●喜撰

⊙清元之部
淨瑠璃 清元延壽太夫 三絃 清元梅吉
淺間●保名物狂

⊙謠曲之部
寶生九郎
高砂●隅田川●女郎花●三井寺●草紙洗●羽衣●砧●八島●猩々
觀世清廉
羽衣●松蟲●松風
梅若萬三郎
玉葛●小督局●高砂●弱法師●春榮●嵐山●絃上●三井寺●唐船

⊙軍歌軍樂之部
海軍々樂隊
軍隊行進曲●行進曲

●將校敬禮曲●告別行進曲●雛鶴三番叟●舌出三番叟●六段●決死隊●箏曲落梅●三鞭酒●かウチット舞曲●ランサ方舞曲●越後獅子●汐汲み●かつぼれ
陸軍戸山學校軍樂隊
觀兵式合奏●琴曲六段●安宅●春雨●御所車●清元喜撰●愛國行進曲●老松

⊙琴曲及三曲之部
琴 今井慶松 尺八 荒木竹翁
六段●松風●春の曲●みだれ●吾妻獅子●松竹梅

⊙義太夫之部
淨瑠璃 竹本大隅太夫 三絃 鶴澤清六
壺坂●壺坂萬歲●義經千本櫻●お妻八郎兵衛●一の谷熊谷陣屋
淨瑠璃 竹本南部太夫 三絃 鶴澤鶴太郎
寺子屋
淨瑠璃三絃 竹本小清
熊谷陣屋●朝顔日記

●加賀見山●太功記●合邦ヶ辻●安達原●壺坂寺●寺子屋●布引の瀧●お染久松●千代萩
淨瑠璃 竹本殿太夫 三絃 竹本和佐太夫
●太功記●堀川鳥邊山●廿四孝●阿波の鳴門●源平布引瀧

⊙薩摩琵琶之部
須田綱義
北白川宮殿下臺灣入●吉野落●小督局●廣瀨中佐●小敦盛
吉水經和
九連城●大塔宮義光訣別

⊙筑前琵琶之部
橘和定
北白川宮殿下臺灣入●扇の的●楠公櫻井の驛●義光武勇銘の御旗

⊙詩吟の部
深澤恒造
●決然去國●孤軍奮鬪●草木●一穗寒燈

⊙唱歌之部
唱歌 納所文子
ヒアノ 納所辨次郎

兎と笛太鼓●花咲翁●虫の樂隊●電車唱歌●夕立●鳩ポッポ●君が代●天長節●大黒●懷出船入船●舌切雀●別れの歌、進め●桃太郎●春の野

⊙芝居臺詞之部
中村芝翫
忠臣藏（判官切腹）
市川左團次
丸橋忠彌（堀端）
熊谷陣屋●平維茂
市川高麗藏
曾我五郎對面●木村長門守
中村雁次郎
紙治（河庄）●熊谷陣屋

⊙講談落語之部
美當一調
決死隊（自一至四）
三遊亭圓遊
成田小僧●櫻風呂
柳家小さん
高砂屋●素見道樂●猿丸太夫
四尾麟
鹽原多助馬別れ●義士寺坂吉右衛門●東台俠客新藏兄弟

●此他河東節●平家琵琶●清樂●木遣●草笛●新内節●影芝居●甚句●大津繪●濱花節●
三河萬歲●端歌俗歌●雜曲等數百種

東洋一手大販賣元

東京市京橋區尾張町貳丁目 電話新橋（特三三三 一五三三）

天賞堂本店



南米アンデス山上の國境紀念碑
(本誌說明參照)



第二十三年
第五號
(第二百三十號)

政局の變勢

(一)

議會期節去て總選擧季節來る、總選擧の結果は單に政黨團體の大小消長に止まるべき乎、現在の政局に何等奇變を生ずることなかるべき乎

之を揣摩し考慮するは、頗ぶる趣味あるものに似たり、試みに讀者と之を俱に共にせんか。

(二)

西園寺侯の內閣が大藏遞信の兩大臣を補缺するがため、別に貴族院より之を拔擢したるを以て、巧妙なる手段と做し、或は之に由て多少內閣に强味を加へたるかに評するものなきに非ず、凡そ物は視方にも由る、隨つて斯く觀察する自から一理なきに非ず、然り、吾人は之を一理ありといふのみ、適切に能

く盡したる評語とは爲す能はず。

姑らく事實をして之を語らしめよ、西園寺侯は阪谷山縣兩大臣の辭職を以て、其の背後の勢力の然らしむる所なるを看取して、少からず苦慮したる上、其の補任をば井上勝之助、都築馨六の兩氏、及び末松謙澄子等に擬したりき、前二氏を起たしめんとしたるは言ふまでもなく井上侯の力に倚らんとしたる也、而して末松子を擧げんとしたるは、素より伊藤公の擁護をして益々厚重ならしめんと欲せしのみ、而して三氏の共に起たざる、必らずしも内閣の前途の好望ならざるを思へるが故のみに止まらず、政局の險易、諸元老等の思惑に考慮したりしのみ。

西園寺侯も茲に至て寧ろ政友會より一人若くは二人を擧げんとしたるも、然かすれば政友會員中に不平者興りて、却つて其の平和を紊る掛念なきに非ず、假令幸ひに之を鎭撫し得るとするも、諸元老及び貴族院の惡感を挑發する恐れあり、求めて自から内閣の壽命を縮むるものなるが故に、更らに轉じて他に求むるに至りしのみ。

思ふに政治上の常識を有するものは、此の際好んで入閣するとなかるべし、西園寺侯の内閣は下は能く政友會の精苦忍耐に依て其の地位を支持し、上は西園寺侯其の人の個人的御親任に由て、幸ひに二ケ年以上の命脈を繼續し、且つ未だ甚だしき秕政なきを得たりしと雖も、之を前内閣に比して聊か遜色なきに非ず、一方には露佛との協商を成立し得たりしと雖も、米清との關係に不良の狀態を現出し、鐵道國有、増稅を斷行して少からず世論の攻擊を蒙むり、信望竟に豫期の如くなるを得ず、況んや一月中旬

の總辭職は、單に議會を招集して半途に内閣を罷むるも、能く後を繼ぐもの莫しといふの理由を以て、姑らく留任を强ひられしに止まれる境遇なるをや、又況んや財政上の難局は、國庫債劵の償還を始め、次年度豫算編成等に存して、何人も前途の樂觀を容さゞるをや。

去れば兩大臣補任の問題は頗ぶる困難なるものなりき、然るに西園寺侯は突如として貴族院團體たる研究會より堀田正養子を拔きて遞信大臣とし、木曜會より千家尊福男を擧げて司法大臣としたり（松田正久氏を專任大藏大臣とす）千家男の入閣は始めより世上に傳説せられたるも、堀田子の補任は稍々意外なりしが如し、然れども子は侯より内議を受くるや、先づ三島彌太郎子等に告げたりと聞く、思ふに彼の慧敏なる清浦子の如き全く之を知らざりしに非ざるべし。

但し兩大臣補任に就て、西園寺侯は、元老に謀らざりし丈けは事實也、然れども之を以て元老に對する絶縁なりといふは如何はし、侯は素より相談せんことを欲すべきも、既に井上氏都築氏及び末松子等を起たしめ得ざりし以上、今更之を相談するも如何はしければ也、之を以て侯の勇斷と稱するは過賞なるべきか、全く已むことを得ざりしのみ。

新大臣の補任は、研究會木曜會に於て決して惡感を以て迎へられざりき、然れども堀田子千家男入閣のため、此の二團體が内閣の味方たるに至るべしとするは、餘りに簡單なる想像なり、木曜會は比較的内閣に好意を有す、研究會は寧ろ之に反するも、然るも亦必らずしも前内閣派に味方するものに非ず、其の宗教法案に於て極力山縣公の内閣に反對したりしに視よ、また辛ふじて鐵道國有案に同意したりし

に視よ、其の多數は素より前內閣派に善意を有すると猶ほ木曜會の現內閣派に於けるが如きも、然かも全然之に隸屬するものに非ず、貴族院團體本來の性質、素より然るのみ、且つ堀田子の近業は、研究會に於ける勢力をしてまた從前の如くなる能はざらしむるものあり、若し西園寺侯にして、兩氏の入閣に依て兩團體を左右し得べしと做せば、少くも失敗也、世論の斯く揣摩する亦素より違算たるを免がれざる也。

遮莫、堀田子千家男は、何の故に前途好望ならざる內閣に入りしか、或る實業家は曰く、是れ唯だ其の履歷に冠するに前大臣の名を以てせんと欲するに止まると、凡そ大臣たるを理想として大臣學を修めたる程の人物ならば、今日西園寺侯の內閣には入らざるべし、獨り子男の之に入れる幾んど常識を以て判ず可らず、實業家の言必らずしも皮肉なる惡謔ならざるに似たり。

西園寺侯の之を拔擢したる、また將た何の爲めぞ、堀田子の遞信に於ける、多年鐵道會議員たりしに視て、全く門外漢には非ざるべきも、而かも適材とは稱す可からず、況んや千家男の司法に於けるをや、此の二者また必らずしも大臣を理想とせじ、隨つて幾んど大臣學を修めたるとあらず、然るに適材を適處に措くにもあらずして、强ひて之を拔擢す、思ふに侯其の欲する人を得る能はず、之を得るも之を擧ぐるを得ず、竟に此の二者を起せし乎、然らば則ち是れ亦已むを得ざるのみ、但だ侯及び侯の參謀は、之に由て必らずしも研究會木曜會を味方とし得ざるも、尙ほ手を兩會に着けて機略を用ゆるの地を作りしと做すならんのみ、吾人は斯く觀察す、否、事實は斯の如きのみ。

（三）

堀田子千家男の入閣は、到底政局の前途を打算する資料と爲す價値あらず、吾人が此の二人者の入閣を評記せるは、唯だ之を以て世上の謬想を排せんとするのみ。

然れども西園寺侯の內閣、殊に原敬氏が其の勢力を扶殖せんと欲する志の小ならざるとは、明かに之を看取せざる能はず、而して將來の政局を視るに於て之を眼外に放置する能はずと做す也。

第一政友會をして衆議院に絶對の多數を制せしむるとは、西園寺侯原氏等の極力豫期する所也、去秋縣會議員の改選に際して、多少の非難を蒙むりながら、尙ほ全國を通じて過半數（縣會議員總數の五割五分）を擧げたるが如き、全く來るべき總選擧の豫備に外ならず、現に內務大臣としての原敬氏が、比較的手腕ありながら己れに便ならず、政友會に利ならずと目を着けたる地方官、殊に前內閣系と稱せらるゝ知事事務官を罷免又は轉黜して、己れの便としたりし所のものを擧げしが如きは、單に自家の勢威を張るに止まらず、全く政友會をして絶對に多數を得せしむるがため、總ての荊蕀榛莽となるべきものを芟除したりし也、思ふに來るべき總選擧に於て、地方の郡町村の多くは、政友會に由るの利なるを理由として、大抵之に傾むくべく、随つて總選擧に假令政權を以て干渉を加へざるまでも、尙ほ政友會のため甚だ便宜あるとは、世の齊しく想像する所たり、西園寺侯等また斯く思惟すべし。

第二貴族院に於て、研究會を左右せんとは原氏等の苦心慘憺したりし所也、會中の伯爵議員先づ動搖したるは果して何のためぞ、政友會の巧妙なる作略の此の間に試みられしとは、苟くも政略を視るもの

の齊しく認むる所なるべし、此の動搖に乘じて第二十四議會には謙抑陰忍して、一切貴族院を衝動すべき擧作に出でず、甚だしきは貴族院に於て比較的惡感を招ける原氏が多く同院に出席せざりし如き、其の態度想ふべきにあらずや、而して今や大臣の補缺に其の人なきを視るや、其の領袖の一人たる堀田子を入閣せしめ、且つ子をして謙遜謹厚、勉めて會中の感情を緩和せしめんと欲するが如き、苦心の迹歷々たり、思ふに木曜會無所屬を味方として茶話會幸倶樂部に當るに方つては、研究會の向背は實に天王山也、西園寺侯原氏が先づ伯爵團體に一石を投じて波紋を生ぜしめ、更に轉じて懷柔手段を執れるが如き、畢竟之がためならずや。

吾人は原氏等の手段の巧拙を問はず、寧ろ其の志の小ならざるを稱揚せざる能はず、政友會多く人なし、而して獨り原氏あり、若し老いて德を積まば、其の竟に大成の秋あるや期して俟つべし、紛々たる政友會の諸子、宜しく多く氏に信倚して可也。

（四）

思ふに總選擧の後は、政友會が絕對に近き多數を制するとは至難ならざるべし、其の當選議員假令過半數に達せずとも、第二十三議會に於てしたりしが如く、又從前の內閣の屢々試みたりしが如くせば、能く若干の無所屬を誘致し得て、彼此合計して以て過半數を制せんと、決して望む可らざるに非ざれば也。

政友會既に斯の如くならば、進步黨、大同倶樂部其の他の黨派は步調を一にして、之に當るべし、即

ち在朝在野劃然として相戰ふ、恰かも關ヶ原の決戰の如きあらん。然れども是れ無意味の政戰のみ、素より主義の上に立て政見を戰はすものに非ざれば也、國民のために相爭ふものに非ざれば也

吾人は此の際に方りて、寧ろ政界更新のため、冷靜に主義政見の異同を吟味して、以て各政黨の分合離散を斷行せんとを主張せざる能はず、少くも之を理想として以て政局の趨勢を茲に導かざる可らず。

（五）

今の世に尙ほ藩閥ありとするか如きは、恐らくば過去の夢を現實の如くに視る陳說のみ、凡そ人事の漸く複雜にして、而して總て專門的智識技術を要するに至るや、單に陸海軍のみに止まらずして、外交財政また然り、山林河海の經營、鐵道電信の施設また然るに於て、政黨々派の力を致すべき區域は漸くに縮少す、况んや藩閥なるもの丶存在を許す餘地あらんや、若し薩長出身の官僚を擧げて藩閥と做さば、其の中に人材の衆多なると蔽ふ可らず、而かも薩長人なるが故に之を忌みて排するの理由あるとなき也。

故に藩閥者と目せらる丶人々も、政黨々派の士も、相混融して單に主義政見の異同によりて相分合するを可とす、世界の大勢は漸く政黨の效果を稀薄ならしめて、人材に重きを措くに至るとは雖も、現在政黨々派の存在して、而くも政界の分野たらしむると况く、而して立法機關の大部分に據る以上、之を度外に措く能はず、假令其の以外に超然とするものと雖も、また之を統率せざるを得ざる以上、宜しく

其の統率さるゝものをして、政見主義によつて分合せしむるを要す、是れ政治界を清くし、所謂立憲政治を進歩せしむる所以に外ならざれば也。

（六）

此の標準よりいふに、吾人は政友會と大同倶樂部との合同若くば少くも提携の當然なるを唱へ、併せて其の統率者の親和し握手するの可なるを思はざる能はず。

大同倶樂部と進歩黨との交情が近時著るしく融和したりしとは蔽ふ可らず、隨つて之を提げて政友會に當らんと欲する計圖の生ずるや必然なるも、是れ單に政友會と戰ふて取て代らんと欲するがためのみ、吳越にして同舟するのみ、主義政見の同じきがためにはあらず、否、主義政見に於ては、全く氷炭相容れざる也。

勿論進歩黨は第二十三議會に於て積極主義を執るとを標榜したりしと雖も、二十四議會に至ては、增税案に反對したりき、豫算案にも反對したりき、此の點に於ては大同倶樂部と全く別途を取らざるを得ざりしならずや。

明治政府創設以來、我が政界には明白に二個の思潮あり、一は假令求めて外務と衝突せざるも、尙ほ進んで我が國勢を張り、以て競爭界に覇たらざる可らずとするもの、所謂積極主義、國家主義、若くは國權擴張論者とも稱すべく、他の一は外務との衝突は力めて之を避け、專ら平和を主とすべしとするものにして、所謂消極主義、平和主義、若くば非戰主義と稱すべきもの也、征韓論の主張者は素より前者

なりき、非征韓論の假令全部にあらざるも、其の一部は實に後者なりき、更らに個人的にいへば、山縣公の如き薩長の軍人派は其の前者にして大隈伯等は後者なり、伊藤公井上侯等は當然後者に屬すべき筈なるも、之を實際よりいへば前者に屬せざる可らず、更らに政黨の歴史に徴するに、大隈伯の作れる改進黨は最も明白に國際交渉を避けて以て平和を主とすべきことを其の綱領に掲げ、且つ多年軍備擴張と增稅とに反對し來り、進步黨の今日に至て尙ほ然るを視れば、是れ正さしく消極主義平和主義にして、聊か英國の自由黨に肖似したるものと斷ずるを當然とす。

自由黨は之に反す、其の初めには丸山作樂・古莊嘉門・福地源一郎氏等の國權黨とは逕庭ありしも、竟に積極主義、國權擴張論者として實際の主張に懸隔なきに至れることは蔽ふべからず、自由黨が最も始めに山縣公の內閣と握手し、次で屢々政府と相結托したる、或は政權に近接する策略に出でたりといひ、黃金政略の結果に過ぎずといふも、其の實精神主義に於て相抱合すべき資質ありたれば也。

自由黨傳統の政友會が、自然黨の一部と國權黨の抱合せる大同俱樂部と合同若くは提携するは、是れ豈政見主義に於て當然の結果ならずや。

自由黨が曾て加波山事件、靜岡事件の如きを演出したりしに看よ、政友會大同俱樂部が時に爪牙を發露し、又屢々野性を暴出するを看よ、改進黨の傳統及び其の分派たる進步黨猶興會に、博辯宏辭の士多く、議論を好みて態容を修飾するを悅ぶ士人に富めるを看よ、更らに個人的に觀察するに、政友會の幹部にある大岡育造氏元田肇氏等は國民協會の出にして、寧ろ大同俱樂部に屬すべき人たり、而して大同

倶樂部の横田寅彦氏、駒林廣運氏等は舊自由黨員ならずや、此の二黨の合同するの自然なる何ぞ多言を要せんや。

同時に進歩黨と猶興會とは相合同すべきものたり、其の主義政見素より相異する所なければ也、兩者の個人的逕路と資質とも亦甚だ相酷似すれば也。

（七）

有體にいへば、吾人も亦今の政黨の到底主義政見に由て合同せざるものたるを察し、其の感情と歴史とに拘泥して、重きを之に措きたりき、然れども今や政界更新の理想としては、一切過去を葬むりて、玆に新たなる主張を立てざるを得ず、前後の矛盾撞着の如き素より顧みるに遑あらざるのみ。

吾人は進歩黨猶興會の合同の甚だ容易なるを知るが故に、多く玆に論議するの要あるを思はずと雖も、政友會と大同倶樂部との合同に至ては、今一言を禁ずる能はず。

然る所以は他なし、兩黨派の黨員及び其の統率者が吾人と同じく一切過去を葬むりて其の感情歴史を忘れんと是れ也、否、其の感情歴史の共に相親める當時を主として追想し回憶せんと是れ也。

今の政友會の内に在て、殊に西園寺氏の内閣に在て、世間憎惡の焦點に立ち、最も前内閣派並びに大同倶樂部より疾視せらるゝものは、素より原敬氏なるべく、長谷場純孝氏等之に亞ぐ、而して前内閣派、大同倶樂部側に立て最も政友會及び現内閣側より咒詛せらるゝものは、いふ迄もなく大浦兼武男にして、關清英氏は恐らくは之に次がん、蓋し此の四氏は政治を生命とする政界の鬪士にして、又政治の外幾ん

ど一の樂みを有せず、關氏の聊か書畫を鑑賞し、長谷場氏の僅かに遊獵に通ぜるあるも、大浦男に至ては、政治以外何等の趣味娛樂を有せず、原氏は銀行頭取となり、銅山顧問となるも素より其の好む所能くする所にあらず、而して二氏の智謀機略勇氣執着等殆んど伯仲の間にあり、互ひに暗鬪し陽戰して寸時も相容れず、攻守共に容易に勝敗を分たず、平生の反目實に甚だしと雖も、二氏共に相輕侮するとなく、寧ろ中心竊かに相畏重する所あるや言を俟たざらん、果して然らば其の心機を一轉して超然相握手するに至らんと豈甚だ難からんや。

原氏の背後には岡崎邦輔氏あり、故陸奧宗光伯以來一種の目的を有す、而して原氏の政友會に於ける歷史甚だ短くしと雖も、同じく陸奧伯の幕中より出てし星亨氏は、曾て自由黨を率ひて山縣公と握手したりき、桂内閣の時代に在て、原氏等また政友會を率ひて之と相背馳する所あらざりしに視れば、原氏等が政友會を率ひて大浦氏等の大同倶樂部と合同し提携するにまた何の不思議がある可けんや。

且つ兩派の首領たる西園寺、桂の二侯は、共に甚だしく相疾視するに至らず、其の地位の高くして而して人物の大なる、互ひに相迫るが如きとあらず、殊に平生其の識見伎倆を尊重するに於て、相合同する最も容易なるべし、日露戰役を拾收するに當つて、世の瞶々者流は滔々相率ひて講和に反對し、竟に所謂首都の燒打をも演出するに至りしと雖も、西園寺侯原氏等は、政友會を率ひて俗論に與みせず、素より俗論と鬪ふの勇斷は莫くして巧みに其の間に處せりと雖も、而しも始終桂侯等に同情を表して以て俗論の横溢を恣まならしめざりき、是れ亦二侯兩派の合同又は提携を容易ならしむべき一の史的關係な

りとす。

戰後經營は西園寺內閣の義當さに全力を盡すべき所にして、桂侯等の之を妨ぐるを能はざるものならずや、曾て積極主義を標榜したりし進步黨も、增稅案は四十一年度の豫算に反對して、竟に消極主義の黨たることを事實に證明し、其の方向資質全然猶興會等と同一なることを示したりしに、大同倶樂部は內閣に對する反感よりして、進步黨等と共に內閣不信任案に一致したりしと雖も、而かも戰後の經營を助くるがため、將た其の積極主義よりして、敢て增稅案豫算按に贊成せざるを得ざりしにあらずや。

故に將さに往くべき大道は坦如として而かも明白也、積極黨と消極黨とは截然として相岐るべき也、政黨々派をして感情上の暗鬪を避けて、理性に由る陽戰を爲さしめんには、先づ主義政見を同じくする黨派の合同又は少くも提携を實行すべし、是れ政治を暗黑より明快に導く也、立憲政治をして進步發展せしむる所以也。

(八)

吾人が將さに大なるべき政友會をして、更らに大同倶樂部と合同又は提携せしめんと欲するは他なし、一面我が政治上の對抗を主義政見に由てせしむると同時に、政權を利用して自黨を大ならしめんとするが如き流風を一掃せんことを欲して也、政治上の施設をして恰かも政黨を本位し、自黨を膨脹せしめ、自黨の勢力を張らんとするが如き風儀を根絕せしめんと欲して也。

適切にいへば、曾て從前の內閣が往々にして試みたりしが如く、又今の西園寺侯原氏等の爲すが如く、

又政友會の爲すが如く、地方の町村をも政黨競爭の渦中に入らしむるは、地方の自治團體を健全且つ鞏固ならしむるため、吾人の斷じて反對する所也、總選擧毎に地方の官公吏警察官等をして、政府の意を迎へて一黨に偏せしむるとは、政治上の弊害として吾人の斷じて排斥する所也、大臣を選叙するに適材を適處に置くとを爲さず、黨閥に由り、若くば他の團體操縱のためにするが如きは、吾人の視て以て高尙なる理想的政治と爲す所に反す、選擧の公平を尊重し、投票の自由を實行し、且つ地方自治團體をして黨派の外に超然たらしめて以て其の健全鞏固を保たしめ、内閣大臣には、藩閥黨閥を排して汎く適材を擇び、國家の精粹を擧げて、以て内外の政務を運用せしむるとは、世界の大勢に適應する所以にして、又國家國民の利福也、吾人は此がため政黨の爭ひを今少しく淡泊ならしめ、政治上の對抗をして今少しく公明ならしめんとを希望す、一方に政友會大同倶樂部を合同又は提携しめ、一方には進步黨猶興會をして打て一丸たらしめんとする、亦此の主意に外ならず。

　吾人の理想は斯の如し、政局の大勢は果して之に向ふや否や、姑らく此の議論を掲げて徐ろに實勢の趨く所を視ん。



「自然」の意義に就いて

文學博士　松本文三郎

近來我邦の文藝界には自然主義の名稱が頻りと繰り返され、學者間に於ても盛に之れを批評して居るものがある。余輩は元來文藝界と沒交渉であるから、固より此等の論議の間に嘴を挿まうとは思はぬ。けれども偶〻新聞や雜誌の上に顯はれ來り、此問題に關係ある論說を一讀する時には、余輩は不幸にして常に其主義の茫漠として其意義の捕促し難きに苦まざるを得ない。

勿論世上多くの論文の中には、確實なる意義根底を有するものもあらうと信ずるが、今は唯余輩が狹小なる見聞の範圍內で經驗するところを述ぶるに過ぎない。而して其意義の茫漠たる所以と、並びに其根底の薄弱なる所以とを考ふるに、畢竟所謂「自然」なる文學の意義は確定されぬことに歸する。議論の根本主眼たる文學の意義を確定せずして、徒らに其枝葉末節に就いて之を論議するも、要するに是れは戲論に過ぎない、而して益之を論じて益其要領を得ないのは當然である。作者側の論の中には動もすれば或は此問題を以て單に文藝上に限り、哲學者乃至倫理學者杯の能く解し得る所にあらずといふやうな調子も顯はれ居るやうであるが、是れも大なる誤りである。作者が作物を出して居る間は此等學者の參考に資すべきものであり、又此等學者は其大作よりしては大に學ぶところがなければならぬ筈であるが、苟くも主義として發表せられたる以上は、學理上の問題として學者の冷膽なる批評を受くべきは論を俟たぬ。而して彼寧ろ學者よりして其敎を

要むるべきも、當然のことてある、如何に文藝上の事てあつても、其理論は畢竟するに直接間接哲學上の根本問題と關係しないものはないのてある。て此には此等論議の序論として、古來「自然」なる文學が哲學的の根本思想若しくは世界觀の如何によつて如何に多樣に解釋せられたるかを明かにし、兼ねて其思想の常に撞着し居ることを述べ、一般の此論議に關係するもの丶參考に供しやうと思ふ。勿論此に述ぶる所も、哲學的素養あるものに取つては、何等の珍とするにも足らないことてあるが、併し世の自然主義を唱ふるものは、其自然なるもの丶何れの意義に該當するか、若し又此等以外別に何等かの意義を有せしむるものとせば、其何れの點に於て異なれるかを明かにせば、言僅かにして能く其眞旨を發揮し得べく、而して他人をして徒らに誤解を抱かしむるの恐なく、之を批評するものも亦容易に其正邪の在り所を判斷し得ることが出來双方に取つて便利てあらうと思ふのてある。

吾人々類の眼から見ると自然界は實に至る所曖昧撞着を以て充滿して居る、從つて自然なる文學も亦極めて曖昧てあつて、撞着した元素が至る所發見せられる。今若し人あつて自然界とは何ぞやと問ふならば、吾人は之と同一曖昧なる文字の「世界」のことてあると答ふるより外に方法はなからう。此答案は宛も不知を以て不知に答ふると同じやうてあるが、是れならば何人も異議を挿むものはないと信ずる。が若し一步を進めて更らに一層之よりも詳細は規定を與へんとしたならば、諸種の方面からして忽ちに抗議を申込まる丶に相違ない。若し吾人が一々詳細なる點に迄立入つて之を論じたならば、十人十色萬人萬色の自然があるのてあらうが、今其最も著しいもの丶みに就いて之を考へても、先づザット次のやうな自然の異議を算へることが出來る。

(一)感覺的と超感覺的。常識の解する所によれば、自然とは吾人の感覺知覺て知られ得る對象の全體を稱するのてある。だから眼て見る色、耳て聞く聲、舌て味ふ味等、乃至此等感覺の綜合して出來た知覺對象、即

ち上は日月星辰より下は人獸草木から百般の事物、此等を全體に總稱して自然とする。科學上の研究によつて理論上推究し得らるゝものも、吾人の機關の不完全から感覺知覺し得ないものは、固より自然界の中には算入せぬ、例之へば色はエーテルの振動によつて成るといふが、吾人の現に感じ得る所は其振動の一定數に限られて居つて、それ以上並びにそれ以下は色となつて感ぜられない、其色となつて感ぜられない部分は、常識ては勿論自然の中に算入して居らぬ。然しながら科學者は數の連續が此に杜絶するものとは考へぬ、だから科學者の自然界は常識て考へて居るよりも遙かに範圍が廣い、又望遠鏡や顯微鏡の下て、始めて吾人に感じ得らるゝやうなものも、通常の人は肉眼て感ぜられないのてあるから、矢張り自然とは考へて居らぬ、けれども一度顯微鏡や望遠鏡て之を感じたならば直ちに自然の中に入れることが出來る。だから是れは色や音響等の場合と稍其趣を異にする。此等の場合ては直接實驗が出來ないのてあるから學理を硏究しなければ判らぬ、乃ち科學者は常識の超感覺的自然を考へて居るのてある。けれども又科學者の超感覺的自然を考ふるには何等か一定の科學的基礎を有して居つて、直接には感覺に感ぜらぬにしても間接の推論に據るものてあるから、通常世人の超感覺的といつて神の世界の實在を信ずるとか、魔力の存在を假定するとかいふのとは稍其類を異にして居る。固より後の場合に於ても、主觀的には何等か多少の據る所がないでもないてあらうが、其れは純主觀的て少しも客觀性を帶びて居ない是れが其相違の點てある。更らに吾人の所謂心的作用の複雜なるもの、例之へば推理とか想像とかいふものは、元來吾人の感覺の感じ得る所てはない、心的顯象は總べて吾人の反省(若しくは省察)によらなければ知ることの出來ないものてある。だから感覺を以て直接外官を通じ生し來つた心的變態とすれば彼推理や想像等のものも亦超感覺的といはなければならぬ。若し又或學者のいふが如く反省を內官の作用と稱し、之をも感覺と同樣に見做すとすれば、其推理想像等の作用が

自然の一部てあるのみならず、其内容も亦自然といはなければならぬ。即ち肉慾も自然てあれば理想も自然てある、虚榮心も自然てあれば、道德心も自然てあり、一切の心的顯象は皆自然てある。若し一が非自然てあれば他も亦之と同時に非自然てなければならぬ。

（二）實在的と虛影的。更らに認識論上からして自然を觀察すれば、此にも亦色々な撞着した考へ方がある。常識ては殆んど一樣に自然なるものは我以外、若しくは我をも包含して實在するものを考へる、認識論上に於ても實在論と稱するものは、之と同一の意見を有して居る。處が古來の詩人や又は學者の間には、自然を以て非實在と見做すものも少からぬ。即ち此說によれば所謂自然とは通常世人の考ふるやうにそれ自身の實體を有するものてなく、單に吾人の虛影である、僞象てあり、宛も夢幻の如きものてあるとなす、哲學上所謂夢幻論と稱するものは即ち是れてある、印度學者の如きは其學派の如何を問はず殆んど全く此說を持するのてある。此自然界は吾人々類の迷盲にして眞智を辨ぜざるよりして空中有を生し、宛も幻術師の幻術を弄すると一般てある。だから若し眞智を開悟せば、幻影は之と同時に消滅に歸するといふのが彼等の說てある。彼等は固より自然の存在を否定するのてはない、幻影的存在は事實として之を認めるが唯其實體がないといふ點からして非實在となすのてある。一見すると是れは單に自然界に對する觀察の違ひてあつて、假令ひ實體があつても無くても、其存在を認むる以上は、哲學上に於てこそ研究の價値はあれ、當時の問題には何等關する所はないやうてあるが、唯一言注意して置かなければならないのは、其の觀察の違ひによつて、所謂眞とする所のものが異なるのてある。若し外界に實在するものがあつて、人間が之を寫象するのてあるとすれば、所謂眞とは事實の如何を以て之が標準となさなければならぬ事となる、即ち事實ある通り之を寫し、之を考ふるのが、眞を得たものて、之を異なるもの例之へば想像によつて描き出したものは眞に非ずといはなければならぬ。此說は通常人の考へとしては寧

ろ當然と思はれるのみならず、學者の間にも往々にして事實の眞疑といふ愚昧な文字を用ふるものもあるが、認識論上からいへば何等の價値なきものたることを斷言して置く。此議論を追究して行くと、餘程面白い結果を生ずるのであるが、餘り長くなるから此には此斷言のみを以て止めることゝする。次に彼虛影論なるものによると（其虛影論の哲學上の價値は此に之を論ずる必要がないから、是れも此には省く。）所謂自然が虛であるから、假令ひ之を知り之を寫し出しても、眞とはなさない。寧ろ此虛影を打破し、眞智の境界を寫し出すのでなければ、宇宙の眞を發揮したものとはいはぬ。枯木を見ながら之を御化として描き出だして居る間は、決して眞を得たものと云ふとは出來ない、御化としての描寫が精密なれば精密なる程愈誤つて居る譯である。だから自然といふものゝ觀察の進ひによつて、眞とする所が違ふのである。

（三）客觀的と主觀的。第二の分類と最も密接なる關係を有つて居るが、又稍之と其趣を異にして居る見方がある。今假りに之を客觀的及び主觀的として置く、或は唯心的と實在的といつた方が解かり易いかも知れぬ。前にもいつた通り、常識や實在論の說では自然は吾人の主觀以外に超然として實在するものと考へる、從つて人類の存亡は自然の實在を如何ともすることが出來なく、人類が一切滅し了つても自然は依然として舊の如くに存するものとなす。が併しながら認識論上の唯心論にあつては、自然の思想は全然之と異なつて居る、所謂自然とは吾人々類に對して始めて成立することを得るもので、我自然を生ずるのである、我自然を成立せしむるのである、我なければ自然は一日も其存在を維持し得べきではない。自然は我と共に生じ、我と共に滅する、我以外超然として存すとなす自然は是れ無である、此の如きは認識論上何等の意義あるものではないと。カント以來の唯心論は實に斯の說を唱ふるのである。若し今此第二の唯心的の意義によつて自然を解したならば。自然とは即ち我の意識顯象である。シオペンハワーが我は太陽の何たるを知らず、唯太陽の

寫象を知るのみといつたやうに、我の意識寫象以外更らに何等のもの丶存在をも認め得ない、從つて自然を寫出すといふことは、即ち我が思想を寫出すことてある、事實の有りの儘を描くとは即ち我を有りの儘に描き出すことゝなる、而して心理學上の見解からして之を論ずるも、亦之と同一歸極に歸するのである。

以上は自然の實在に關しての異說の一端を述べたのであつて、此外尙ほ諸種の異說はあるが、目下の問題に對しては直接深い關係をも有つて居ないから、總べて此には割愛して置く。以下尙ほ少しく自然の性質に就いて略述しやうと思ふ。

（四）知的と無知的。先づ知の方面からして之をいふと、此にも二種の反對な意見がある。即ち一方には自然に於て至る所智慧の迹を發見せんとするもので、此にも亦色々の差別はあるが、神と自然とを同一視する萬有神敎を唱ふるもの丶如きにあつては、自然も神と同じく知的たらざるを得ないのである。ヘーゲルの說の如きは其最も著しきものである。彼耶蘇敎哲學者の如きも自然を知的に觀察し、之を以て神の實在の證明ともなさんとしたのである。之に反し自然を以て無知的と觀するものも少くはない、彼唯物論者の如きは其最も極端なる例であるが、印度學者の如き唯心論を唱ふるものにあつても、自然を以て無知的元理の發展し成す所となすに於ては、亦是れ無知的のものといはなければならぬ。但印度學者の所謂無知（即ち無明）といふのは、吾人が通常いふ所の無知ではない、是れは異智にあらざるものをいふので、吾人の意識作用の如きも亦皆此中に入るのである。又プロチンの如きも自然は何等の知る所なし、唯動くのみといつて居るが、即ち其自然を以て無知盲動的のものとなしたるは明かである。

（五）美的と非美的。次に感情の方面に於ても又種々の異說はあるが、其最も主なるものは美學的方面と道德的方面とに於ける異說であらう。先づ美學的方面にありては、自然を以て非常に美なるものと觀ずるものがあり、是れは哲學者の中にもあるが又古來詩人の間に

も少からず行はれた說である。耶蘇敎哲學者の如きは人世の罪惡を唱へたるにも關はらず、自然を以て美なるものとなした。又之と或る點に於ては殆んど全然反對の地位に立てる佛國の自然派ルーソーの如きも自然を以て一切最も美はしきものとなし、人爲によつて悉く墮落すとなした。が此にいふ所の自然なるものは耶蘇敎學者の自然や詩人の自然とは自から其意義と異にして居る。ルーソーの自然とは人爲人工に反するものて吾人の想像にのみ不完全ながら上り得る原始時代、野生的人類社會といふのである、外界自然、即ち通常言ふ宇宙の物質的組織に就いていふのでない。耶蘇敎學者の自然とは外界世界即ち宇宙の組織に就いていふのであつて、主として人間社會を取り除けたものである。即ち其美はしいといふのは、宇宙の秩序法則の井然として一絲亂れざる點をいふのである。古來の詩人の自然美を歌ふものは必らずしも此に限らぬ。彼等は又人生に於於ても幾多の美はしき點を認めて居るのであるけれども此等詩人も一切の點に於て悉く美ならざるなしとは考へなかつたことであらうと信ずる。彼等の多くは空想によつて自然を美化して居るのである。書虛事(そらごと)とは啻に繪畵のみのことではない、一切の美術家は皆此の如くにして其製作を完成するのである。一切の事物が悉く美なりと斷言するものは恐らく古今に涉りて一人もあるべからざることである、何故かといふに一切美ならば美の思想の由つて生ずる所がないのである。醜あるによつて美あるので、醜なければ美も亦ない筈である、一切美なりといふは即ち一物も全醜なるものあらず、如何なる醜なるものも、其中には必らず何等かの點に於て多少の美なる性質を發見することが出來るといふに止まる。であるから彼等は又醜の元素の宇宙に存在することを認めて居るのである。自然を以て美ならずとなすものも亦之と同じてある。彼等は美の元素の存在を認めざるのではない、が唯絕美てはないといに止まり。即ち彼等の論は性質上の差違を有するものではなくして、唯其重きを措く處が異なるのである。即ち一は美の點を多く觀察し、他は醜の

點に重きを措くのである。若し今何等の事物を問はず之を其儘に描き出しさへすれば以て美となすことが出來るといふものがあるとすれば、是れは實に無意義の囈語であると斷言するに憚らない。

（六）道德的と不道德的。道德の根本を以て天地自然にありとなすは支那古來の思想であつて、中庸の天命之を性といひ性に率ふを道といひ、道を修むるを敎といふといふが如きは其著しきものであるが、天に則るといふことは啻に孔孟の學に於てのみでなく、老莊學派にありても均しく唱ふる所である。又墨子が天は何をか欲し何をか惡む、天は義を欲して不義を惡む、乃ち天下の百姓を率ゐて義に從ふ、則ち我天の爲す所をなすなり、何を以て天の義を欲し不義を惡むことを知るかといへば、天下義あれば則ち生じ、義なければ則ち死す、義あれば富み義なければ貧、義あれば治まり義なければ亂る、天は其生を欲して其死を惡み、其富を欲して其貧を惡み、其治を欲して其亂を惡む、是れ我が天の義を欲して不義を惡むを知る所以なりといつたやうなのは、即ち皆自然を以て道德的のものと觀察し、自然の行動は期せずして善に合ふものとなし、人類の行爲も亦皆之を模範とし、之を規矩とし、之に準ずべきことを唱ふるのである。が併し同じ支那に於ても自然を以て道德的惡なるものと觀した學者もないではない、例之へば荀子の如きは即ち其一人である。荀子は今人師法なければ偏險にして正しからず、禮義なければ悖亂して治まらず、古の聖人は人の性惡なるを以て禮義を制し、人の性情を矯飾し、之を正し之を導ひて皆治に出て道に合せしめたといつて居る。是れは丁度前にいつたルーソー杯と正反對の意見て、自然の儘に放任して置けば一切惡となるが、唯人爲人工を俟ちて始めて善に歸するとが出來るとなし、自然を以て不道德的のものと觀じたのである。而して此自然に關する知的、美的、並びに道德的觀察は通常關聯し來るのであつて、自然を知的と見るものは又之を美とし善とし、自然を無知的と見るものは、多く之を以て非美とし不道德的となすのである。眞善美の三者は畢竟相離るべ

からざる關係を有つて居るからである。而して既に之を知的美的道德的となす時には、勢亦有意的のものと見倣さなければならず、盲動的非美的不道德的と觀するものは其結果無意的のものと思惟するのである。意志の作用がなければ道德的に善といひ惡といふも、畢竟何等の意義をなさぬからである。であるから最後に意志の方面に於て又

（七）有意的と無意的、との二種の自然に對する異說が起つて來た。哲學上に所謂器械的見解と意匠的見解と稱するものは、全然とはいへぬが稍此兩極端を代表して居るのである、勿論近代に於ては（道德的觀察に於けるも同じであるが）此等兩極の折衷說なるものも起つて居るが、煩を避けて今は之を略する。器械的見解とは唯物論者や自然科學の研究者の多く唱ふる所で、要は唯因果律を以て唯一の理法となし、一切自然の變化進行は一に此理法上によりて成りし者と見倣し意志の作用抔は秋毫之を認めない。之に反し意匠的見解といふのは、プラトーン學派や耶蘇教哲學者抔の專ら唱ふる所であつて、此說では自然の進行に於て一の究竟的目的を假定し、萬有は總べて之に向つて移り去るとなす、而して其目的に向つて進行する所以のものは、決して偶然ではなく、必らず之をして然らしむるものがある、彼等は或は之を以て神となし、或は理となし、學者によつては其名稱も其性質も一樣ではないが、併し何れにしても技術に於ける技術家の如き關係を有せしむることは殆んど異ならないのである。

以上述べ來つた所は僅かに自然に對する異說の最も著しいものゝみであつて、其他折衷說等をも數へ來つたならば、折衷說も色々あつて迚も一樣ではないのであるから、枚擧に遑あらぬ位である。それで自然の意義は先づ大體此の如きものとして、扨今現時の所謂自然主義なるものに返つて之を觀察するに、前にもいつた通り、此說は甚だ要領を得難いのであるが、若し其說の歸極が自然を有りの儘に寫し出して是れか美を成すといふことにあるとすれば、吾人は之に向つて先づ三種の問題の解釋を要求したいのである。即ち

(一)自然とは何等の意義を有するか、
(二)有りの儘に寫すとは何等の意義を有するか、
(三)自然。何等のものを寫すも美を成し得るか、即ち自然其物は恐く美なることを得るか。

第一の問題は即ち自然派描寫の對象を明かにするのであつて、其解釋の如何によつては其他の派とも大なる違のないことにもなる。第二の問題は即ち認識論若しくは心理學上の研究を要すべく、而して其結果彼等が豫想外の事實を發見するに至るなしとも限らぬ。第三の問題は即ち純正哲學上の研究を要するのであつて其研究の結果は或は彼等の所謂美術なるもの丶、意外にも醜術、少くとも非美術なりやも保せられぬのである。此三種の問題の明了なる解釋が與へられぬは上は一切の論は畢竟戯論に終らざるを得ないのである。

（完）

二ツの要求

高等工業學校長　手島精一

我國も今日は、漸次に農業國から工業國に移らうとする趨勢を增成して來た。此れは何人も直覺的に考へて毫も疑はぬ處であらうが、一寸一例を擧げて見ると、昨年我が高等工業學校の入學生に就て言ふも、其の四割七分までは實に農家の子弟であつて、此れ等の事も矢張り今日多數の農民が滔々として工業界に轉じ來りつ丶ある一表徴とも、言はゞ言はる可きであらう。

國民は生計上の便宜から職を工業に選ばんとし、工業は製造品の需要の益々熾んなるところから、益々工業家業、技師、職工、を呼ぶ事になる。此れが表裏相應じて、工業發展の趨勢を來すのであらう。

申すまでもなく、今日は最早や單純なる家内的手工業の時代ではない。大規模大組織の工場制の下に、同一齊整の貨物を多量に製出することを必要とする時代で

ある。此の必要は一は勞銀の騰貴から機械力を代用せねばならぬ次第に成つたこと、貿易輸出は申すに及ばず一般に商業取引の規模が大きく成つたので、從て見本を以て取引契約をする――從て貨物の齊整を必要とする――との、此の二ッから起つたものである。

我國も歐米諸國の例に漏れず、此の二ッの理由から益々大規模の工業を必要とすることに成つた。從て近來各種の工場は頻々として興つて來た。特に一昨年は戰後經營の目覺ましい現象として、我が工業界は未曾有の一大發展を試みんとしたのである。實に八億萬と云ふ巨額の資本は、此の大發展の爲めに投ぜられんとしたのである。其の後經濟界一般の不景氣に企業界も尠からぬ打撃を受けて、そのうちの幾分かは不成立に終つて仕舞つたが、猶いろ／＼の多數の會社は現に成立し、營業して居る次第である。

さて、此れ等の工場會社が先づ第一に要するものは何て有らうと云ふに、言ふまでもなく各種の機械てある。尤も機械はその工業の種類に因つて、各々價格を異にするが、先づ平均百萬圓の資本中、約四十萬圓を機械の購入、据え付け等に費すものであるから、一昨年以來我が工業界は實に一億五千萬圓以上約二億萬圓程の機械を海外から購入してゐる譯である。昨年の三月から四月に掛けて千幾百萬圓の機械を輸入した。現に毎月三四百萬圓の機械は絶えず輸入してゐる。當年は猶此れ以上の輸入があるだらう。言ふまでもなく機械は工業の原動力である、母である。工業の眞ッ先きに來るものは常に機械だ。此の工業の生命とも云ふべき肝要の機械を、殆ど總て海外より輸入を仰がざるを得ないとは、寔に嘆はしき次第であるが、今日てはどうも事情已むを得ないのである。

と云ふのは、一は職工の熟練が足りないで、未だ精巧の機械を造るまでに進歩してゐないのと、又た一は歐米では技術が著しく進てゐるので、常に安値にして而も良い物を出す。我が工業界の現狀ては悲しいかな未だ到底渠等と競爭することが出來ない、從て資本家も機械製造に資本を卸すことを自然危險視する風があつ

て、從て日本の機械工業は一向に發達しないと云ふ次第である。此の自然の勢を自然の成り行きに放任す可しと云ふならば兎も角、苟くも國家と云ふものが、若し國家經濟の主宰者である以上、而して又機械と云ふものが、若し總ての工業の眞の生命でもあり、母でもありとするならば、私の要求は實に此處に生じて來るのである。

私の要求は國家が何等かの方法を講じて、此の機械製造業の奬勵策を立てよと云ふのである。其の實際の方法はいろ〳〵あらう。私の考ふる處では、政府は年々莫大の機械を購入するのであるから、今後は須らく原則として政府で使用する機械だけは、本邦製の物を用ゐることに仕たいのである。

併し此の場合には、政府は常に比較的高價にして粗惡な機械を用ゐねばならぬことに成るので、從て政府の豫算には直ちに影響を及ぼして來る。則ち從來ならば例へば百萬圓で宜かつた物も、這度は百十萬圓を要することに成る。此れは實行上の有力なる困難の一であらうけれど、併し國家は國家自身の未來の繁榮の爲めには、多少目前の犠牲は忍ばねばならぬことと想ふ。

次に、機械の種類に依ては今日絶對的に日本では出來ない物がある。此れも實行難の一理由ではあらうが、此の場合には國家は相當なる委員を選任し、その委員會の決議に基いて、是非とも外國から購入しなければならぬ物は、購入することにすれば可い。

兎に角、今日の場合國家が此の方面に何等か適當の奬勵策を講ぜねばならぬと云ふのが私の持論である。かう云ふ事が、先づ政府によりて實行されると云ふことに成ると、幼稚なる我が國の機械製造業は、俄然面目を一新することに成つて、その發展進歩の程も、刮目すべきものがあるだらう。從て將來機械の輸入は著しく減退するであらう。

普通の營利的工業會社では、今日算盤球の利害上から容易に粗惡にして高價なる本邦製の機械を購はない。又會社の技師なども、自個の責任上粗惡なる和製機械の使用を建言することを敢てしないと云ふ風である

から、若し政府にして適當の保護策を講じないと、我が國の機械業は將來と雖も容易に發展の機會に際會しないと云ふ恐れがある。

獨逸は三十年前には、專ら英國から機械を購ふたのであるが、保護奬勵の結果、今日では却て英國に向て機械を輸出してゐる。從て東洋諸國に此の獨逸製の機械を見るとは夥しい數である。

私は寧ろ機械製造業の發達如何に依て、其の國工業發達の程度をトするに足りるとまでに考へるものであるから、是非とも政府が早く此の方面に注意して呉れるとを祈るのである。

次に、私のもう一ッの要求は、勞働局の設立である。我が國工業界の進歩は、最早や此の種の專門の局でも課でもを設けて、專門家の手で兎に角眞面目に勞働者の調査をさせ、改善指導の途を講ず可き時代に迫つて來た。私は別にかの社會主義者が、どうのかうのとは云はぬのである。單に勞働者の現況に照らして此の必要を感じてゐるのだ。勞働者、特に女工幼年工に就ては、立法的に救濟保護を要する點も尠くないので、私は現に前年農商務省の勞働法案査定の會議の時は、委員の一人であつて、又此の理由から勞働法案に贊成をした一人である。

同時に今の勞働者は道德的の方面からも、指導改善を計つて遣る必要は充分あるので、近頃も或る勞働團隊二百人程に就て、一々其の現況を調べさせて見たがどうも此の社會の腐敗墮落は、今更らながら愕く。寄席にでも往つて、其の日〳〵の勞苦を慰めやうと云ふのは、餘程良い方の側で、小說でも讀んで見やうと云ふものは、二百人中僅かに一人しか無い。總ての慰藉、總ての道樂は、唯だ酒と女とあるのみだ。

又一般に今日我が國の勞働者は、英米獨などのそれに較べると、屋賃に拂ふ割合が總收入の額に比して少くない。此れ等も矢張り我が國の勞働者が家庭の樂みなどを度外視して、家なンかどうでも宜いと云ふ自墮落な風習から來てゐるとであらう。

どうも我國では貧窮に迫られ、喰ふに途の無いと云

ふ處から已むを得ず勞働者となり、職工となる者ばかりで有つて、勞働者は今日常に原則として貧民である。此れては可かん。英國のやうに熟練職工の多數は、皆立派な中流の紳士として、立派に生活をして居ると云ふ風にならねば到底駄目だ。

兎に角、私は今日勞働者に對する眞面目な調査を必要とする時代に迫つてゐるとを感じて居る者の一人である。例へば今日の警察制度のやうに、一方調査に從事すると同時に、又一方は、指導の任にも當ると云ふ具合に遣れば、至極結構てあらうと想ふ。又今日の視學制度のやうな風に、熱心なる專門の人達が、全國各處の工場に就て親しく調査指導の任に當るとにするならば、此れも寔に結構な事てあらう。

兎に角、私の第二の要求は、此の勞働局又は課の設立てあるのてす。(文責在記者)

明治暗殺史の詩趣

戸川秋骨

刺客及びその行動たる暗殺の如く頗る戲曲的にしてまたロオマンチックなるものはあらず。深夜白刃を揮つてこれを敵手に加へ、白晝爆彈を抛つて忽ち他を壞滅せしむ。その事實すでに戲曲的にしてまたロオマンチックなり。況んやその間にはこれを國事のために敢行する公共心あり、これと共に自家の鬱憤を漏らす私心の供ふあり。その事情は萬別にして、而も人間心裡の機微を味はしむる感興の多き暗殺の如きはあらざるべし。左ればシャーロット、コルデーの事は佛蘭西革命史中に傑出したる精華にあらずや。左ればまたブルータスのシーザーに於ける沙翁の大手腕を煩はしたるにあらずや。シーザーのブルータスの劍を瞥見するや。汝も亦たかと呼べる、その一言の特に喧傳せらるる所以のもの、爰に暗殺の詩的趣味をも收めたればな

り。況んや友を犧牲にしたるブルータスの行爲も、大勢の前には何等の功果をも齎らさず、共和の羅馬は等しく失はれて、帝國の羅馬ここに巍然として建立せられたるをや。吾人は遠くシヤロツテ、コルデーやブルータスを呼ぶの要なし。最も近くは所謂露探と呼ばれたるもの丶、殺害また多大の詩興を與ふるものにあらずや。白晝大都の公道に於て白刃を他の胸側に加ふ。事すでに歌舞伎場裡の所作を見るが如し。さらにまた刺客の心裡に入らんか、こ丶に多種多樣の情致は認めらるべし。その殺害の行爲となりて顯出するまでの經路波瀾は如何に興趣深かるべきか。蓋し深大の理智と想像力とさらに多大なる同情の念とを有せずは味ひ難き處ならんか。

併しながら今やロオマンチックの時代はやうやく去らんとせり。吾人は實利實驗の時代に入れり、比較考量の時代に入れり。斯の如き時代に於ては從來の如きロオマンチックの行爲また多く見るべからず。吾が過去の刺客暗殺は多くロオマンチックの風致を伴ひて、頗る芝居がゝりの趣ありき。然れども今後に至りては、その行動もまたその行動に到らしむる心裡の經路に至りても、共に實利實驗の時代の風潮に順ふべきか、吾人は西洋に往々暗殺の行はるるを知る。然れどもかれの暗殺は甚だ詩興に乏し。その詩趣あるもの上記ブルータスやコルデーの如きは稀れなり。少くとも近世に於ける暗殺にはかくの如き趣なし。大統領カルノーの場合然り、澳國皇后陛下の場合然り、マキンレーの事件然り、近くは葡國皇帝皇太子の暗殺また何等の詩趣を伴はざるが如し。吾が國情の凡て西歐の大勢に風靡されつゝあるが如く、暗殺の一事また歐化してやうやくその趣を變ずる事あるべし。白刃に代ふるに短銃を以てし。國家若くは國民の休戚を念慮するに代へて、虛無主義若くは社會主義の如き所謂主義を以て暗殺的行爲の動機となすに至るべし。吾人は墺國皇后陛下を弑し奉りたるもの丶、何等國家國民の事を念頭に置かざりしを知る。マキンレーの場合に至りては殆んど何のための暗殺なるや吾人が了解に苦しみし程な

りき。若しこれ等の場合に何等かの意義ありとすれば、そは只漠然たる無政府主義若くは虚無主義より來れるが如し。余はかくの如き抽象的の主張よりしてまたかくの如き殺人的の行動の生るゝを怪むものなり。

然りと雖どもたとへ時勢は推移し、今や比較考量の世となり、左眄右顧の時となりしと雖も、凡そ他の生命を害はんとするもの、その心裡に何等の苦衷なかるべきか、何等の苦悶なかるべきか、而してさらに何等ロオマンチックにしてまた戯曲的の趣なかるべきか。吾人は思ふ、時勢の推移と共に時代思潮の變遷と共に刺客の行爲は一層の詩趣を增すものなりと。現代の思想、現代の人物は事物を即決するの斷なし。則ちかれを思ひこれを思ひ悶々の情殊に深かるべき筈なり。かくの如き現代人の暗殺の行動に出でんとするや、その苦衷と苦悶とは所謂前時代の人の想像に及ばざるものなくばあらず。かくの如き心意の状態はやがて狂的となるべく、從つてその暗殺の行爲は尤も興味あるものたるを得んなり。

凡て人間の行爲はその時代思潮の印刻を伴ふ、殊に暗殺に於ては明確なる時代の印刻を見る。吾人は吾が國史の上代に於て狹穗彥の弑逆未遂を見たりと雖もそは上古の事茫遠として事蹟の明らかにすべきものなし。同じく上代に於ける入鹿誅戮の如きは頗る興味ある事實なりとす。蘇我氏の專橫と共に其の進步的行動と、これに反する保守的運動ならびに鎌足の經營等、相ひ並び相ひ反して入鹿の誅戮に終る。國運の消長と進步、保守兩主義の衝突とを表示すべき好個の戯曲なし。下りて戰國時代には戰國時代らしき暗殺あり、義朝のそれの如き然り。さらに源平二家より北條氏に至るの間に於ける暗殺の如きは、一面に因果應報の宗教的意義を示すと共に、政權與奪の術數を見るべき特殊の戯曲を構成す。德川氏に至りては、將軍家を害はんとしたるもの、特に家光將軍の屢々難に遇はんとしたる、諸侯の間に於ける所謂御家騷動を惹起したる、これまた好個の題目ならずや。德川氏時代に於ける此種の暗殺が只所謂御家騷動としてのみ殘り文學史上に特

殊の印象をとどめざりしは、時勢のやみがたき處なりと雖もまた甚た遺憾の事ならずとせず。

かくの如く考へ來りて明治の暗殺史を観ればその興趣一段の深きを覺ゆ。これを概説すれば明治の暗殺史は進歩的思想と保守的精神との衝突に出づ。吾人はまた維新の前後に於て幾多の暗殺ありしを知る。ために幾多の名士の終に明治の舞臺に顯はれざりしを知る。余は今さらに玆處にその名を列擧せざるべし。併しながら當時の暗殺にはまた特殊の趣あり。當時に於ける進歩保守の兩思想は、勤王佐幕の黨與となりて顯れ、さらにその公心と私心とは、相ひ縺れ相交りて極めて複雜なる戯曲を示す、吾人は未た明治の小説に於て偉人の心理を寫したるものに接せず。所謂歴史小説なるものは大抵は偉人の事蹟を單に表面より記述したるにとゞまりて、心裡の推移を明らかにしたるものを見ず。作家にして若し維新前後の暗殺を研究せんか。則ち偉人の性格その心裡の苦悶は極めて興味ある材たるを得ん。余は未た英雄偉人の性格を示したる作物のなきを惜む。

暗殺は明治の改暦以後にも多く行はれたり。今その第四十一年に至るまで數へ來らば、遂行と未遂とを合はせて、數年にして一人を出しし割合なり。但し余がこゝに暗殺といふは公人のそれをいふ。私人の場合に至りては、殆んど枚擧に暇あらず。余がいふは殊に政治の舞臺に於て顯はれたる暗殺に關するものなり、以下その一二を擧げんに。

第一に余は大久保參議の紀尾井坂に於ける暗殺をあげざるべからず。余は素より今參議の暗殺の所因をいふの要なかるべし。然れどもその詩趣を言はんがためには、一應その事情を記さざるべからず。由來明治の政治史は對外主義と内治主義との爭なり。蓋し對外主義はむしろ保守黨に屬しまた武斷主義なり。内治主義は進歩黨に近くまた文治派なり。内治派は當時大久保參議を中心として廟堂にその翼を張り、對外派また一味の黨與を以て臺閣にその重きを爲せり。西郷隆盛は即ち自からその中樞たりしが。余は門外漢として斯く

の如き政治の內情を縷述するを好まず、また能はず。然しながらなほ一步をすゝめて言はんに、かくの如くにして互に相持して對抗し來れる兩黨は征韓論に於て衝突し、大勢は內治派をして凱歌を奏せしめ、隆盛をして城山の露と消えしめが、薩南の風雲如何に依りて蹶起せんと欲せし、各地の對外派はこれがため暫らくその息を潛むるに至れり。然れども各地に散在せる對外派、ならびに薩長の政府に平かならざる黨與は、憤滿措く能はず、機に應じて爆發せんとせしが、この氣運は終に發して、加州の士島田一郎が斬奸狀を懷にして、參議を淸水谷に一撃するに於て一段を結べり。聞くが如くば島田氏が斬奸狀を懷にして上京するや、加州の士は素よりその警察の官衙またこれを知りて而もこれを抑制せざりしといふ。また如何に對外派の思想と勢力との地方に磅礴たりしかを察すべし。

世に若し參議の暗殺の詩趣を疑ふものあらばそは甚だ事情を解せざる人なるべし。隆盛は廟閣に於ける參議の知己なり。參議は國家のために其友と戈を交へて終にこれを仆せり。對外派の與黨は六十餘州に瀰漫して時に應じてかれに報ひんとせり。島田一郎はその代表者なり、而して等しく國を憂ふるの士なり。この憂國の士は遂に大久保に一刀を浴て死に到らしめたり。蓋し參議に於て死は易し。只死に至るまでの苦衷は如何に深大なりしか如何に苦悶を重ねしか。一面その友を仆し、他面國內の騷亂を鎭靜す、その間の憂慮恐らく想像の外にあらん。余を以て參議に贊辭を呈するものとなす勿れ余は單に詩的想像を記すのみ、嗚呼對外派は一郎を驅て參議を仆せり、併しながら內治派は仆れしか。極めて然からず。大勢は內治派をして殆んど微動をも感ぜしめず。やがて現代の公爵伊藤はこの大勢に乘りむしろこの大勢に驅られて政局に出顯し、參議の後繼者としてさらに一段の光彩を輝かせり。

征韓論以來臺閣を退きし一派は議會に於て內治派と戰を交へたれども、自由黨まづ第一議會に於て時の武斷派と交綏し、爾來一轉して內治派の手中に收められ以て今日に至れり。而も大勢はなほこれに滿足せず、

征韓論當時の對外派を驅つて殆んど盡く文治派たらしめ了れり。かくの如くにして余は大久保參議の暗殺を中心として一面に西郷の死を想ひ他面に志士島田一郎の死を見、さらに此れを貫くに時代の大勢を以てするを觀ず。これ豈に一場の悲劇ならずとせんや。余を以てすればこれ實にシーザーの死に勝りて史劇なるべき價値ある事蹟なりとなさゞるを得ず。

第二に注意すべきは子爵森有禮氏の暗殺なり。森子の文部大臣にして尤も適材にまた尤も手腕ありしは、吾人の記臆になほ新たなる處なり、公爵伊藤の始めて内閣の制度を定むるや、子は全權公使より擢んでられて文教の主腦に据えられたり、余は子爵が進歩的思想の勇將たりしを知る。その教育の制度に嶄新なる改革を施したりしを知る。而も氏の進歩的思想なるものは所謂輕跳浮華なるものにあらざりき。現時の所謂ハイカラ式にはあらずしてむしろ莊重嚴勵頗る國威國權の伸張に貢献する所ありしが如し。たとへば現下吾が學生の　格やうやく回復して、長大强壯を加へたるは、一つに學校の教科に於ける體操と武術との影響に依る。而して體操と武術とは實に森子の革新に依りて學校に紹介されたるものなり。少くとも兵式體操の勵行に至りては子に依つて遂げられしものなりとす。只これ其思想の極端なるや、恐らくは傍若無人の擧ありて他の誤解を招きしものあるか。

刺客は子爵が伊勢の大廟に靴して上り、杖を以て御簾をかゝげたりとの一事に憤激してかれを刺せり。それ時は紀元節の大典にして而かも國民が永劫に記憶すべき憲法發布の當日、降雪の粉々たるに際せり。子爵將に參内のため家門を出んとするや、刺客は謁を求む。かれはこの大典に子爵を參せしめじと注意せしものと見ゆ。子爵の平民主義は直にかれを引見す。その引見の刹那刺客は忽ち白刃を子爵が大禮服の脇腹に加へたり、而も一刀の下に彼れを仆せり。たま〳〵護衞の警官これを認めてまた刺客を仆す。國家最大の慶事の日は忽ち不慶の日となれり、悲劇の日となれり。而して此れより文教の政弛委してまた回復の望みたえた

り。

吾人はこの場合に於て前記大久保參議の暗殺とや丶趣を異にしたる感興を認む。かれに於ては大勢參議の死に依りて動かず、參議の施設は着々その死後に行はれて殆んど遺憾なかりき。森子の死に至りては然らず。子は未だ大勢に乘りたる人にあらざりき。子が死と共にその施設殆んど亡びたり。大勢は未だ子が行動の凡てを是認せざりしか。而も悲むべし、文敎のこと今日なほその績を見ず。批難攻擊の標的たるもの常に文部を以て第一とす。有爲の人失はれて國家文敎の基礎未だ定まらず。これまた一種の偉大なる悲劇にあらずや。參議の場合は刺客の身上に關する悲劇なり、此れは國家の悲劇なり。かれは政治的の戲曲にしてこれは思想上の悲劇なり、子爵の暗殺事少なるが如くにして實は一大悲劇なり。

明治暗殺史の最後の打ち止めは星亭氏の暗殺なり。星亭氏の暗殺は公人のそれの最後の場合にして、而も尤も詩情に富みまた尤も時代の思潮を示したる事件なりとす。星氏は偉大なる人格を有せりき。而して最も進歩した思想を有したる公人なりき。その政治の舞臺に於ける遣り口の猛烈辛辣なるは頗ぶる米國式なる事世人の了知せる處なり。而もその猛烈にして辛辣なる傍若無人の行動は、深大の怨嗟を招きしのみならず、かれは大虐政家大惡黨なりとの觀念を多數の腦裏に刻さしめたり。蓋しかれは惡黨なりしなるべし。大亂暴者なりしなるべし。然れども事業は往々惡黨に依りて成る、亂暴者に依りて遂げらる。而も其事業たるや、實に世を害するもの丶みにあらずして、善良なるものも合せて成就す。余はかく考ふる毎に英吉利の海軍に想ひ到らざるを得ず。不撓艦隊をたほし英吉利の海軍を樹立したるものはドレークなり。而れどもドレークの素性を洗はゞ實に一個の海賊たるなり。星氏の暴政またドレークの業に近きものあり。かれは水道を經營せり。電車を計劃せり、東京灣の築港をも目論見たり。かれが先づ東京に着目したる處その異彩を見る。況んやかれがその子分を愛するや懇篤を極め、財を散

するに淡く、且つその私行の極めて清淨なる現代稀れに見る所なり。かくの如き人格を有するかれはその勢力を東京市の教育界にまで及ぼせり、かれは市の教育會に於て極めて意義あるまた極めて時勢を道破したる演説を試みたり。かれは實に時運を代表したるものなりき。かれをしてこの教育會の壇上に立たしめし時運は眞に人をあやまらざるものなり。かれはその私行に於てその行動に於て、恐らくは時代の模範となり得べかりしならん。併しながら舊式の思想はこれを以て意外の事となせり。怪しからぬ事となせり。こゝに於てかこの舊思想は刺客となりて發顯し、市會の議事堂に於てかれを仆せり。これまたシーザー殺害に勝る好個の悲劇にあらざるか。

刺客は舊幕の人なりき。蓋し暴漢星亨の如きをして市政を左右せしむるは、東京市民の恥辱なりと考へしならん、恥辱なりと考へて憤慨せしは當然なり。刺客は武士道の子なりき、孔孟教の兒なりき。武士道と孔孟教とにして意氣あらば、豈に星氏の行動に默々たるを得べき。而してかれ刺客は世の進運を促す手腕を有せず。その素行は謹嚴なりと雖も、要するに舊式の義人なり。呪はれたる星氏の家庭圓滿なるに比して、刺客の家に明治紳士の甚だ名譽とすべからざるものあるが如きは、則ち以て兩者新舊道義の標準の甚だ異れるを認むべし。余は今孰れを揚げ孰れを貶さんと欲するものにあらず、只事實をあげてこの新舊思想の衝突を言はんとするのみ。則ちかくの如くにして仁義禮智一點張なる舊思想は星氏を仆したるなり。

星氏は仆されたり、併しながら今日の東京市民はかれが餘澤を被れり、かれが計劃したる電車は布設せられて東京市の面目は一新せり。東京市をしてさらに商業交通の都となし世界の大都たらしむべかりし東京灣の築港は、不幸にしてかれの死に依りその計劃を挫折せられたり。吾人はこの偉人の死に依りてこの一大事業の蹉跌したるを悲むと共に、さらにそれ以上に悲むべきものあるを見る。そは星氏の死がかくの如き光明の側面を消散せしめしとともに爾來星氏一流の暗黒面

の發露するに至りし事實なり。星氏は明暗の兩側面を有したりしが、その與黨には黒面のみありて光明なし。刺客の一撃は實に星氏を一層の偉人たらしめしと共に、その殘黨をして主領の偉勳なくして、獨りその惡行をのみ繼續せしむるに至れり。それ星氏の人格の大はその暴虐と共に幾多の掬すべき美所を發揮し仰ぐべき光彩を發揚せり。然れども星氏なき後のその與黨は氏の人格なくして、只その醜惡をのみ模し常に市政を危からしめんとす。これ豈に甚だ惜むべき事ならずとせんや。

此に於てか見る、刺客の行爲は却りてその敵手の名を成し、その目的とせる風教の維持はこれを遂ぐる事能はず、却つてこれを惡化するに終れり。これ正に明治史上の一大悲劇なり。余を以てすれば單に道德の一事よりするも、星氏と刺客との間に於て何等上下すべき差等なしと信ず。而してこれまた新氣運と稱する無形の怪物と、舊思想と名付けられたる老翁との格闘にして、刺客は即ちこの兩者を操れる大勢の飜弄物たりしなり。かくの如く觀じ來りて余は市會の議事堂に於ける星氏の横死を以て、明治年代に於ける尤も興味あるまた尤も意義ある悲劇なりとなすものなり。只余は今こゝに星氏の場合に於ける刺客事件の感興を盡す能はざるを憾みとす。蓋し暗殺は大久保參議の場合に於て明治の政治史及び政黨史の一半に關係し、森子爵の場合に於ては明治の思想史に密接の關係を有し、星氏の場合に於ては、前兩者を合はせて、政治と人文の發展との上に至大の關係を有する悲劇を構成せり。蓋しこれ等の事件はこれを考究するの深さに從ひて益々詩興を多からしむ。余はかくの如き事件とその事情に關しては殆んど門外漢たり、故に知る處多からず、從つて語る處詳なるを得ず、今は只かくの如き感興のあるべきを記して、特にその文藝上の價値を語らんと欲したるのみ。

それ詩興は凡人の事實にも認めらるべし。然れども偉人の事蹟にいたりてはさらにその大なるものあるべし。特に上記刺客の場合の如き一大危機に至りては、

單にこれを狀況（シッチエーション）として觀察するも好個の詩料たり。人或ひは偉人に於て認むべき詩興あらずとなし、尙ほ偉人は意志の人にして情の人にあらず、故に文藝の主題とするの價値なし、よしやこれを主題とするも何等の感興をあたふるものにあらずといふものあり。これ一見眞實らしくして實は誤謬の甚しきものなり。凡そ偉人とは單に意志の人をいふにあらず、智情意三者の共に大に發達したるものにして始めて偉人たるを得るなり。偉人豈に情に於て缺くるものならんや、只偉人の心を知らんとせば大なる天才と深き考究とを要す。平凡なる作家は只偏狹なる事實と人物とを見るに過ぎず。偉人の苦悶苦衷を知るは只天才に待つあるのみ。抑も現代の文藝は作家自己の經驗に重きを置く、果して然らば、現代の作家に偉人の事蹟の詩材として認められざるは宜なり。然れども詩趣詩興は偉人の暗殺に際するか如き危機に於てその絶頂に達す、暗殺は事實に於ても文藝に於てもクライマックスたるべし。余は天才の出てゝかくの如き詩題を捕へん事を切望す。それ明治の暗殺史はまた明治の戯曲史なり。何ぞ此の好詩料を委棄して可ならんや。

文藝論二則

田中喜一

一、文藝の本質　二、理想の眞義

文藝の目的は何なるぞとの疑問に對し、之に十分なる解答を與へんには、先づ文藝を產出する人生一般の特色を觀察するを以て必須の手段なりと信ず、勿論文藝には宗教科學或は哲學が、各々人生を支持し發展する機關として特有の方法を有するが如く、亦特有の方法あるは言ふ迄もなし、左れど此等のものは人生を理想化する機關にして、又人生の内容を作る成分なる以上は、人生の特色を形くる樣式を分受し居ること明なり、宗教の樣式は直に科學の樣式にはあらず、科學の樣式は直に又文藝の樣式とならざるは勿論なるも此等

の者が人生の分化にして又人生の機關なる以上は、或る形に於て人生の特色を存せざるべからず、故に人生に於て出現したる凡ての活動の様式を觀察するに先だち、常に人生一般に固有する様式を觀察する必要あり、人生一般の様式とは如何なるものか、此點に就いて詳論するには仔細に心理學及び論理學を借り來る必要ある故、茲には唯極めて大體の説明にのみ止め置かん。

人間の生活をして吾人が今見るが如き特色を有せしむるに至れるは何によるぞ、そは下等動物が本能を以て彼等の生活の知的方便と爲しをるに反し、人類は衝動を以てその生活の智的方便と爲し居るの根本事實に由るなり、今本能と衝動との相違を略述せんか、本能はそれが附與せられたる儘にて生活の用を充たし行くものなるが、衝動は之に反し、附與せられたる儘にては何の用をも爲さず、個人の努力に因りてその様式の變更せられ連絡の改正せらるゝに及び、始めて生活に役立つには至るなり、吾人が始めて生活を營むに當り、その精神生活の材料としては斯かる性質のものより、他に何者も存せざる故、吾人が一たび吾人の活動の結果として、或る種の經驗を得るや否や、その意味を最新の衝動に反照して衝動の內容とし、意味とするなり、此に至りて初は盲目的に働ける衝動が、始めて內容又は意義を得て將來の生活の方針となるなり、左れど事實として人間の生活は、絶えず外界の變化と內面の變化とによりて變化し行き、又變化し行かざる可からざるもの故、從つて過去に於て、努力によりて衝動の結合を改め或はその內容を變じて作られたる智的の方針は、新しき境遇の要求に應ずる爲に絶えず變更せらるゝ必要あり、勿論吾人の性情にして激變せざる限りは、吾人の境遇と雖も激變するものに非ず從て境遇を統一し行く智的方針と雖も亦激變する必要はなきもの故過去に於て有效なりし智的方針は猶ほ大部分有效ならざる可からず、されど前にも述べし如く、吾人の生活は內面の要求の變化と外界の刺激の變化とにより絶えず變化し居るものなれば、如何に過去に於て有

効なりし智的方針とはいふとも、その儘少しも變更せられずして直に新らしき境遇に適合するものは有らずと云ふも可なりとす、人間の生活に二元の外觀を有して現るゝ習慣と理想とは斯かる特有なる樣式を以てその特色とするもの、人生がその支持と發展とを勉むるに當りて、自然に出現し來る事實に過ぎざるなり、勿論一見すれば、理想は絶えず習慣を打破せんと勉め、習慣は又能ふ限り理想の改造に抵抗せんとなし居る如く見ゆる故、此等二つのものは全くその利害を異にし、少しもその間に融和を許さざるの觀をなすも、更に究むること一層、深く人生の特色に對照して此等二つのものの關係を見なば、二つのものは人生が實際に有せる材料の性質上、最も能く勞力の消耗を防ぐが爲に企てられたる分化なること知らるべし、されば習慣と理想とは決して根本的に相容れざるものならず、新理想の形式は舊習慣によりて期待せらるゝが爲に成立し、舊習慣は新理想によりて改造せられて、初めてその生命を持續することを得るものなり、此故に新理想は舊習慣を打破するを目的とし居るが如きも、その實その方針は舊習慣より得居るもの、又舊習慣は新理想に反抗するを目的とし居る如きも、その實新理想に降伏してその一要素となることを本來の職分とはなし居るものにて、吾人の生活の凡ての部分は皆此習慣と理想との反抗及び協同より成立するなり、吾人の行爲は一部分習慣に信頼して決行し得るが故に安心と平和と此處に在り、左れど一部分は理想によりて改造せらるゝを必要とする故其處には苦痛と不安とあり、之を要するに半ば習慣より大體の方針を得て吾人の行爲の輪廓を作りながら、半ば新しき境遇の要求より來る理想により、最も現在に適當する樣それを改造し行きつゝあるが人間生活の一般狀態なりとす。

　吾人の生活の根本性質を旣に斯かるものなりとする上は、それより分化し來る種々の機關は、宗教にせよ科學にせよ、將た藝術にせよ、等しく此特色を分受し居らざる可からざることは、その現はれたる事實を點檢する以前に、先づ何人の想像にも浮かび來るべきを當

然とす、人生の活動は前進せる如く、過去に成れる習慣を新しき理想によりて理想化すること故、人生に起れる有らゆる機關のもてる唯一の作用は皆理想化といふ一事に歸す、理想化とは過去の習慣を現在の理想によりて改造し行くことに他ならざれば、文藝が人生を支持し又發展する一機關として出現したる上は、文藝の目的も過去の習慣を現在の理想によつて統一し、醇化し行く他にはなき筈なり、予が曾て或る折に述べたりし如く、科學といひ、道德といひ將た藝術といふとも、皆等しく人生を理想化するの他に目的を有せざるものなれど、唯順序より言へば、最初に科學が起り次に道德起り、斯くて最後に藝術が科學の創めて道德の紹げる事業を完成せん爲起りしもの故に、此等の三者は等しく人生の理想化を職分となすものから、尚ほ多少その特色とするところを異にし來れるなり、科學も道德も藝術も皆等しく意志の欲求を其の根柢とし客觀的には智的關係となり、主觀的には情的鑑賞とならざるべからざるものなるが、それが働く時期の相違に從ひ、比較的に智力の働と見ゆるは科學にして、比較的に情の働と見ゆるが藝術なり、道德は科學と藝術との中間にあるもの故、半ば智の働にして半ば情の働の如く見ゆるなり、とはいへ實際には決して左る相違なきものにて、唯經驗の素材（ローマテリアル）を統一するに科學が最初にその業を創め藝術がその業を結ぶより生じたる相違に過ぎす、上來述べ來れるごとく人生がなかば習慣に賴（たよ）り行くを得とせば、其處に餘裕の生ずる譯にて、半ば解決を要するならば、其處に苦痛を伴ふべきなり、藝術が人生を構成する一要素にして又それを統一する一機關なる以上は、藝術も眞に藝術と名け得られん程のものには、同じく過去の習慣と現在の理想との間に存する、融和せんとして暫く反抗し努力しながら討議するところの理想化の經過を完成するを目的とすべきが故、藝術の本色は半ば安舒の者なると同時に半ば苦痛のものならざるべからず、シラーは曾て彼の有名なる鐘の歌の中に曰ふ、「人生は嚴肅なるが藝術は遊戯なり」と、左れど予を以てすれば、種々の形式に現れた

る人生が半ば嚴肅にして半ば遊戲なるが如く、人生の一部なる藝術も亦半ば嚴肅にして半ば遊戲なりとしか見えざるなり、既に人生といへばその中には藝術も含まれ居らざる可からざる故、藝術を除ける人生は人生の全體とは言へざるに、シラーが人生は嚴肅にして、藝術は遊戲なりといひ居るは、既に論理上の誤謬に陷り居るものなり、予は斯かる見地に立つ、故に今日我國に行はれ居る、藝術特に小說に關し、或る創作家及び評論家の間に稱せられ居る二種の見解、その孰れにも同意する能はざるなり、その一方の見解を取る創作家並に評論家はいふ、文藝は人生に現るゝ解決すべからざる矛盾に對して、人の發したる苦悶の聲なり、故に文藝には遊戲の精神を入るゝ餘地少しもなしと、又他の一方の創作家並に評論家はいふ、遊戲の趣味以上何等の目的なき文藝も存在し得るなりと、勿論此後者に屬する評論家及創作家は、前者に屬する創作家及評論家の如くに偏狹ならず、前者が苦悶の發表を目的とする文藝以外に他の種類の文藝を一切認めざるに反し專ら遊戲の精神を旨とする文藝以外にも、人生の大問題に接觸するを目的とする文藝の存在を許し居れど、兎もあれ專ら遊戲の精神のみにても文藝は成り立ち得るものと主張するものなり、予は文藝を以て人生を理想化する多くの機關の一と見做す見地より此等二種の評論家及創作家の孰れの見解にも同意する能はず、兩種の見解にはその孰れにも眞理の包含せられ居ることは認む、左れどそは各々盾の一面を持して相下らざるもの、其處に許容すべからざる誤謬も亦包含せられ居るを認めざる能はず、煩悶と安心とが共に人生に含まるゝ以上は、その人生より分化し來れる文藝にして安んぞ偏重偏輕を許さんや。

一部の創作家批評家の間には理想を排すと稱する聲の行はるゝが如し、若し此理想なる二字を以て、古來幾多の哲學者が默想し來れる抽象的理想の意味ならしめば、予は元より是認するを憚らざれども、左る限定なく徧く一括して理想といふものならば、そが唯人生觀の上なるにせよ、將た文藝の作品の上なるにせよ、

共に許容すべからざるを切言するものなり、理想とは何ぞや、理想とは觀念の動的に現れたるを名くるに過ぎず、觀念は生活を維持するが爲に、吾人が外界の刺激を醇化したるものなる故、その本質は元來動的なるべきもの、若し唯一個孤立して存在すと假定せんには勿論觀念は直に行爲となりて現るべきも、事實に於て然らず、無數の觀念が互に相連續して存在するもの故、其處に相互の制約を受けて自由の行動を取るを得ず、已むなく靜的の外觀を示すのみ、然らば此靜的のものが如何にして動的となるかといふに、その中の一個の觀念が實行となりて現るゝ丈けに必要なる周圍の幾多の觀念が、相共同して助力するが故なり、例へば大阪に行くといふ一個の觀念あらんか、それには同時に行きてよきか、金はあるかといふ如き幾多の觀念簇起して、それ等が手段となり、遂に行くといふ目的の觀念を强盛にし、愈よ之を實行に現れしむるなり、豈啻に斯かる顯著なる事例をのみ引くを要せんや、眼前机上に在る洋灯を見るといふ場合にも、見るといふ觀念には更に幾多の連續的觀念の助成ありて、初めて洋灯其ものを明瞭に認めしむるに至るもの、其他何ものか斯の如き過程を經ざるものある、予自己なるものは複雜なる觀念より成り居るも、一時には只一事の外爲し能はざる故に、多くの觀念が同時に實行となるを得ず、さればこそ一觀念が彌次々に現はれて行爲の連續となり、其處に自己を實現するなれ、此靜止の觀念が動的となれる、即ち行爲の方向の決定せらるゝそれを稱して軈ては理想といふ、觀念とは Idea なり理想とは Idea なり Idea の動けるもの即 Idea なれば、之を理想と譯するは寧ろ甚だ妥當ならず、嚴密には動念若くは動想ともあるべく、爾したらんには却て能く他の誤解を招くことあらざりしならん、既に然り理想は決して遠きにあらず、近く我等が日常經驗の中にあり若し吾人の行爲にして苟も意識的ならんには、理想は實に其の客觀的意義の他に存在すべからざるなり、然らば人生觀の上より直に理想を排斥せん杯といふことは、啻に不合理なるのみならず又何等の無意味ぞや、

更に又文藝の作品に就いていふも然り、現實の働く方針が理想なるからには作中に描寫せらるべき人物にも先より、理想の存在を否むべからず、又直に創作家自身が創作時の態度を想ふも、理想の意義が已に上述の如くなる上には、理想の伴ふことなくして如何にしてなく一個の作品を構成するを得んや、如何なる平凡人の平凡生活を平凡に寫せばとて、究竟此理想を斥けて遂に能く何物か現れん、何物か作り出されん、それ此の如し、予は理想排斥なる言葉の、徹底せる解釋の下には到底有り得べからざるを信ずるものなり、予は玆に尚ほ言ふべき多くの事を殘せるも、時追りて詳述する能はず、更に藝術上の眞なる題目の下に次に於て補說を惜まざらん。(談話筆記)

西園寺内閣と桂派との政爭

静觀居主人

今の内閣と、今の内閣に最も反對者と思はれて居る、又自分でも反對する氣で居るかも知れない桂一派との關係を少し論じて見やう。

私は今度の政爭では桂一派が負けて居ると思つて居る。桂の方が少し遣り過ぎたんだらうと思つて居る。一時議會中には今にも西園寺内閣が崩れるであらうと思はれたが、恰度議會が濟むと同時に二大臣の補缺が出來て、司法、大藏、遞信、皆夫れ〴〵專任の大臣が確定した。而かも司法と遞信の二大臣は新たに貴族院から出て來た。殊に貴族院の中でも他に比較すると割合に堅い團體から出て來た。勿論此二大臣を入れたからといつて、其團體が必らずしも現内閣に賛成すると極つては居るまい。だが千家の出た木曜會は前から今の政府黨らしかつたから、それて千家も入ることゝなつたのてあらうし、千家の内閣に居る間は内閣黨て居るだらう。堀田を出した研究會は先きには清浦が操縱して山縣黨の爲めになつた。清浦が樞密院に入ると共に、自分の代りに波多野を入れた。波多野は勿論山縣

派の爲めに盡力するだらう。しかし波多野と清浦とは工合が違ふ。一から十まで山縣派の爲めにする譯に行かない。元來研究會といふのは子爵議員の一種の結合であつて、子爵仲間の利害のためには變なことをやるかも知れぬが、純粹の政治問題に出逢つては、どつちかといへば存外眞面目に研究して、そいつをあの會の主義として、若くは黨議として括て了ふ。其結果が何時も山縣派と一致するかといふに必らずしもさうはいかん。其れを山縣派に引張るには餘程骨の折れたものだ。一派の主もなるものは決して自から山縣派とも何とも思つて居ないらしい。殊に子爵以外の若い議員や、廣澤、柳澤、柳原などいふ伯爵議員の二三の人――壯士議員といはるゝ二三の人があつて決して山縣派の自由にはならなかつた。鐵道國有の時なども此等の壯士議員が隨分騷いだ。外にも騷いだ人々があつて、一寸危うかつた。それで此會は山縣派の勝手にならなかつたのみならず、今の內閣の勝手にもならない。底を今の內閣も根こそぎ知て居る。知つて居て其首領株の一人を內閣に入れた。されば聊か冒險が寧ろ當つた。そして研究會をして會の力といふものを自覺せしめた。會の中から大臣を出し得るといふ自覺を起さしめた。其自覺は愉快な自覺である。其愉快の自覺が西園寺なり、堀田なりの遣り方次第では今の內閣の爲めになるかも知れぬ。要するに元來政府黨に近い木曜會は千家の入閣によつて益々內閣の爲めになり、今迄必らずしも政府の自由にならなかつた研究會も、堀田の入閣によつて幾分內閣の方に向いて來たことは疑ないだらうと思ふ。尤も政治界の事はどう變化するものか朝以て夕を計るべからざるものであるから、しかとさうとは斷言し難いが、意外の事が起らぬ限り、大體の形勢は右の如くであらうと思ふ。

兎に角あの二大臣補缺の一件があつて以來、どうしても內閣の腰が据つたことは爭はれない。此爲めに西園寺內閣は今にも崩れやう／＼と噂し合つた連中や、又之を信じた世間一般の人の見當が皆悉違つた。意外の感じをした。此議會の初まり頃には頻りに內閣の

迭を叫んだ連中はちよと面喰つた姿となつた。今では桂が今にも取て更はるといふ考は世間一般に減つた。今になつて世間が漸く桂が少し遣り過ぎてしくじつた事が分つて來た。處が桂のしくじつた事は其實、今年の一月の中頃には、桂自身、及び少くも桂に屬して桂が内閣を作れば其椅子にても就きさうな連中には分て居ただらうと思ふ。つまる所世間では少し餘計に桂に望を囑し過ぎたものといへる。

それで、さういふ具合に仕向けたのは、西園寺が總理大臣として第一落附があり、智惠も働き、又腕もどこかすばしこい處があり、而して腰が据つて居る爲めであらう。大體西園寺よりも或は桂の方が少し人間が善過ぎるかと思はれる處もある、どうも西園寺の方が桂よりも少し人が惡るいかも知れぬ。が西園寺がさういふ藝當をなし得ることになつた力の出所が今一つ有つた。新らしい二大臣を入れて、立直つた。其腰を立直すといふ事にまでも及んだ力の出所が、西園寺自身の備へて居る力量以外に今一つあつた。其れは外でもない。寺内といふ力であつた。寺内は今の内閣に於て一寸副總理といふべき格で、桂の時の山本といふ地位である。大臣中の首席でもあり、又實際からいつても副總理の役を勤めて居る。桂が今度やりしくじつたのは僕の見當では、寺内を自分の味方に附くるとか出來なかつた爲だ。或意味からいへば桂が強いて寺内を西園寺の方に押し込んで了つた爲めだ。それは桂の失策といふよりは事の自然の行掛り上さうなつたのかも知れない。寺内も別に桂に惡意もなく、桂も別に寺内に惡意もなく、ただ自然にさういふ風になつたのかも知れない。かも知れないが結果から見れば寺内といふものを桂が西園寺の方に押込んだともいへる事になる。寺内の心理を解剖して見たら今少し面白い事があるかも知れないが先づ、今いつたやうに見て置かう。

で今年の一月の十三日に西園寺が阪谷と山縣を呼び附けて己れも辭表を出す、お前さん達も出せと言渡した。其事を聞いて同じ十三日の中に辭表を出したものが一人ある。誰あらう夫れは寺内である。外の大臣は

十四日の朝臨時閣議を開いてから辭表を出した。寺內は其前に出した。阪谷は松方から辭職の事をいはれ、山縣は桂からいはれ、西園寺も桂からいはれた。然しさういはれるやうになつた事件の責任者は實に寺內其の人であつた。あの鐵道の建設改良繼續費の年度割。一寸見れば元老の削減通りになつて居るやうだが、先きの方には一億何千萬といふものを出さねばならぬ樣になつて居る。元老の方ては夫れを見落して居つた。又或は見落す樣に出來て居たらしい。頭の方を見れば三千何百萬てよいやうだが、先の方にずうと長い尻ぽを引いて居る。元老共は夫れが分ると共にひどく怒つた。折角人に相談をして置いてこんなごまかしをやつて居るとひどく怒つた。處て、其一件は寺內がさうさして居り、又さうさすることを承認したのだ。これが全く桂のロジックに合はぬ事になつた。といふのは桂が豫算を削減させる爲めに用ふる論法は、陸海軍は戰勝後てもあり、巨大なる豫算を請求する。而し陸海軍に請求通りの金をとられては到底財政が立たぬ。是非共大に我慢して貰はねばならぬ。が陸海軍に我慢して貰ふには。其手段として各省先づ自ら我慢せねばならぬ。各省て遠慮なく取れば、陸海軍は猶更ら我慢せぬ。これが桂式專賣の論法て、今度も亦其論法て行た。此論法は實際內情をて穿も居り、又いひまへとしても強いいひまへてある。此論法て遞信省の一億何千萬といふ豫算をへこまさうとした。處が山縣は服さぬ。鐵道會議ては一億何千萬と可決した。夫れは宜しく無と元老が治まらぬ。西園寺は大體極まつたから枝葉の事はどうてもよいと葉山に逃げた。逃げる時に一切を副總理の寺內に賴んだ。所が寺內は陸軍も我慢したから遞信も我慢せよとはいはなかつた。まア少し位はよからうといふやうな心で一億何千萬を其儘にして置いた。此寺內の行動は全く桂のロジック以外に出た。それて桂の方ても寺內君の同意した事だからそれてよからうと跋を合せるとよかつたかも知れぬがそれをしない。到頭二大臣西園寺辭職といふ事になり、二大臣西園寺辭職なら寺內も辭職といふ事になつた。寺內が西園寺

の方に今度一層堅く結び付くやうになつたのはそこいらから出て來て居る。さうして寺内の腹の中では桂を餘り餘計の事をいふぢやないか、其んなことの爲めに辭表を出させるなどゝは以ての外だといふ感じが起つたかも知れぬ。これが西園寺の方の餘程の强味だ。辭表が御前に出る時でも、寺内の辭表といふことは餘程御前に響く。それで阪谷、山縣の辭職は御裁可になつても、寺内の辭職は御裁可になり兼ねるといふ氣味もあるかも知れぬ。西園寺が現職に止まることになつたのも寺内を現職に止むる爲めといふやうな事があつたかも知れぬ。要するにあの問題の時は西園寺と桂といふ兩大關がウンと取組んで桂が西園寺を土俵の外に押出すといふ形勢であつた。西園寺が危ふなく土俵を踏切る處だつたが。ドッコイと廻り込んで、殘つた〳〵の聲を聞いていよ〳〵土俵の眞中に衝立つた。又四つに取組むといふ姿になつた。西園寺の方に御親任が殘つたといふ動機は寺内が西園寺の方に行つたといふことにあるかも知れぬ。要するに桂の方からいへば寺内を向ふの方に押込んだといふ事がしくじりの元であつた。

それであの時に行司はもう此勝負を見て了つて、桂の方はいけまい。これは西園寺のものだと西園寺の方に團扇を上げて居たかも知れない。必ずしも二大臣の出來るのを俟たずして勝負のついた事を見て居たかも分らない。つまり桂が少しアセリ過ぎたので、未だ西園寺を土俵の外に押し出し得るといふ機會でなかつたかも知れぬ。若し機會は早過ぎなかつたとしても寺内といふものを西園寺の方に附けてさうして押し出さうとしたのは無理なやり方といはなければならぬ。

そこで、此角力がさういふ具合に西園寺が殘つて、土俵の眞中に立直つて、四つに取組んで、而かも其腰が据つて了つたとすれば、今後の勝負はどうなるかといふと、こいつは餘程六つかしい問題だ。爭はどうしても事實問題から起らなくてはならぬが、どうも桂の勝手に都合の善い問題が多くない。本來西園寺內閣では此れまでの施政は多く前內閣の政治を踏襲して來

た。西園寺の失策は大抵桂の失策だ。桂からは攻擊が仕にくい。只最も遠慮なくやるには外務の一角に喰てかゝる事だ。此方は周圍にかけかまへがない、處が矢張り此問題てはどうも旨く行かぬ。矢張りよい大問題は財政の問題、戰後經營の事だ。現時の日本の內外に亘つて最も緊要重大なるは戰後經營の財政問題だ。それて此節では國債借替の利子が高過ぎたというて松田を攻擊し初めた。借替の利子が高過ぎた爲めに銀行は預金利子を引上げねばならぬと銀行屋が苦情を持出す。又株屋仲間は、抽籤法て償還金を振り撒いたら景氣が直るだらうと思て居たが、さうはして與れぬのて之れも不平だ。此株屋の大藏大臣にこぼす不平の聲は間接に大藏大臣を攻擊する材料を與へた。それて桂一派が松田攻擊を初めかけたとも見られる。元來三菱と松田とは仲が惡るい。先きの彌之助が日本銀行總裁を罷めたのは松田が大藏をやつた時だ。三菱仲間ては松田をよく思つて居ないだらう。それかあらぬか、今度の大阪の銀行大會には豐川良平なども大分やつて居る模樣だ。尤も三菱は大隈黨で、曾根が大藏をやつた時などもよくなかつた、そして大隈黨は此頃は桂とわるくない。それを桂が利用して火の手を上げるかも知れない。然し私は之れも無理だと思ふ。夫れて松田の頸は縮められまいと思ふ。どちらかといへば今度の遣り方は松田のお手際だ。現在には減債基金を償還する餘裕はない。四十年度の剩餘金を基金に繰り込んて償還せようといふ計畫、十二月になれば償還する丈けの準備が出來やうといふ譯だ。つまる所、四十年度の所謂自然的增收があるが、そいつを外に廻さなかつた。遞信省でも陸軍省ても其剩餘金を貰ひたくて／＼堪らない。此等の省には公債支辨も未だ殘て居る。それを此方に廻して貰ひたいのてある、然しどうかして大藏てはそれを與れぬ事にした。それを償還の方へ廻した。松田は財界の方からいへばよい事をした。借替條件が少しひど過ぎたといふやうな事があつても、差引いて見ると餘りエライ攻擊の材料にならぬ。寧ろ松田の手際がよかつたといふ事が殘る。それから大阪の方ても銀行大

會の決議で大いにやらせる積りであつたかも知れぬが、さうはいかなかつたらしい。さうしてどうも井上といふ先生は矢張り伊藤と同じやうに今の內閣の方に餘計に居るやうに思ふ。或は松方が大阪に行たのは銀行家に松田に喰てかゝらせる爲めとも思はれたが、さうでもないやうだ。松田は不得要領のやうでなか〳〵要領を得て居る男で、殊に松方などの所へもちよいちよい行て居る模様だから松方も松田を餘り苦しめることはしないらしい。これもまア大した事がないと私は見て居る。

さうすると問題は外にない。現內閣が大いに選擧に干渉をして、原が內務大臣攻撃の材料を與へる事でもあれば格別だが、これも私は大した事がないだらうと思て居る。原の腹の底では無論餘計政友會の議員を出したいだらうが、然し是迄の議員數を出せば、よいと最低の處では考へて居るかも知れない。といふのは、一方の敵の方が弱いからだ。進歩黨と大同派としつくり聯合しても敵がどういふものか、餘り多くはあるまい。大同派は今度は餘程やられるだらう。支部も持たず、又實際黨派の姿もない。又進歩黨も譯の分らぬ積極主義でしくじつて居る。勿論政友會も增稅問題で、選擧民の感情を害して居るが、大同進歩に對しては防守の口實は持つて居る。そこで是迄の議員數で滿足と覺悟して居れば、餘りあせらぬでもよい。それに今度は政黨が皆不振だから、存外中立派が多きを占めることになるかも知れない。それは政友會がウンと殖えるよりも無論現內閣には嬉しくないんだ。處が中立といふのは實は怪しいもので、どうかするとどうでもなる奴が比較的多い。其中立の候補者を一生懸命叩き附ける必要があるとは原が感じて居ないかも知れない。だから餘り力瘤も入れず從て干渉もせずとなつて、問題が終に起らないかも知れぬ。さうなれば自然大喧嘩の材料もなく、ずる〳〵と此內閣が續いて行くかも知れない。餘り有難くもない內閣だが、暫らく夫れ以上に有難い內閣が起り得ないといふ事になるかも知れない。つまる處桂先生少し見込がなからう。

然し財政經濟上ては餘程弱はつて居るといふ事は事實だ。投機仲間の弱はつたといふのは昨年の事て、今日は地方の人も困しんて居る。昨春の大景氣に思惑をして、仕入をウンとして手元は非常に苦しい。銀行は資金を持て庫の中に寢かして居る。一方の苦しい人は益々苦しい。甚だ宜しくない樣子てある。て此苦しさは前及び現内閣が勝手に色々な事業をたくらんだといふ事以外に、銀の下落、(ボイコットよりも此方の影響がひどい)て支那貿易がめちやくちやて、又米國の大景氣の反動として起つた不景氣て歐米への輸出がきかぬ。正貨は流出する。今年になつてからも輸入超過が已に六千萬圓、今年中には一億位になるかも知れない。爲めに經濟上から一般に泣聲が大いに上るといふ時期が此先きに來るかも知れぬ。さうなると國債償還の注射ではいかず、本式のパニックが起つて、對パニック手加減に政府が大しくじりにしくじるといふ事がないとも限らない。然し之れは今日から分らぬ事だ。或は松田先生例の不得要領て無神經て居たら之をのすかも知れない。兎に角今日ては大藏攻撃も怪しいものだ。これは私一個の考だから當るか當らないか當てにならぬ事てある。(完)



露墺の關係

(何故に露西亞は墺地利と結んだか)

宇内の大勢は時々刻々に推移して、政界の形勢は日一日と改まつて行く。陳きもの謝し新らしきもの之に代るは敢て異とする處てはないが、昨日の仇敵今日は親友となつて、更に舊怨を顧みない、昨日まて利害關係の上から相反目してゐたものが一朝にして其國家の利害の方向相齊しき爲めに漆膠も啻ならぬ間柄となる。變化の生ずるは無理ならぬ事ながら傷ましい限である。其最も著しきものは北米合衆國の世界の政策を採つた事てあらう、日本の一躍して列強の群に伍した

事であらう、露西亜が當分の間蟄伏して起つ能はざる事であらう。此三大變化の生じ來つた爲め、國力の均衡は忽ちに狂つて、秖り歐洲ばかりでなく地球上の各國に其餘波を及ぼし、どの國もこの邦も遲速こそあれそろ／＼と地盤の動搖を初め、中には頗る浮雲い變動を起した所もあるに至つた。されば此二三年後の歴史は此等の騷動の始末を書き立てた記事で埋められ、甘く始末の付いたものも果報拙く終つたものも、事の成行の一つと成るに違ひない。

ボルテールが嘗て政界の事變は重要なる結果を生じ、其外の出來事は顧るに足らずと言つたのは極めて適中した言葉である。前者の道は國民的活動の新領内に通じ、後者には道なく野原の如きものである。此兩種の事象に臨んだ場合政客の難しとする所は、孰れが前者で必要なものか孰れが駄目な後者であるか、其辨別の一點である。何人も之を識別することは困難であらう、只時代が經つて後に始めて其目安も立つのである。バルカン事件に關して墺露の連合したのや、其急劇な始末は蓋し此著例である。此連合は何人も意外とする所であつた。何者十九世紀の間に於ては此兩國の國是も其國家の利害も東歐洲に於て直反對の地位に立つて居たからである。從て兩國の和親などいふ事は油に水を混和する如くに殆んど徒爾と思はれて居た。世界の一驚を吃つたのは之故である。今一つ訝恢の感を起させたのは露西亜が歐洲に於ける其の職掌を等閑に附した事である。露西亜が是迄心を傾けた主要なもの從つて幾多の煩はしき困難に逢つても恐れず撓まず根强く、幾多の義俠的の犧牲まてして辿つて居たものは歐洲南部にあるスラブ民族の利福を圖るといふ事であつた。クレミヤの役も千八百七十七年の陣も之あるが爲めに惹起せられたのである、爲めに招いた損害も之あるが爲めに蒙つた所である。其大切なる役目をも打忘れて露西亜たるものは、全スラブ民族が倶不戴天の寃家たるものと相結んだ、其盟約の下心は何事か起る迄同民族の諸國の連合を維がうといふにある。けれども或る露西亜の愛國者の言つたやうに神聖なる露西亜が墮落したのもゴルコウスキー伯とムラビエフとの間に調印せられた下劣なる約條の規定せられた時位に墮落した事はないのである。是一國民たるの特權を一椀の肉汁に換ゆるものと謂つて可い。コミヤコフ、アリサコフ、ソロビエフなどが盛に唱道した全露西亜主義の向上心と理想とが未だ其餘勢の熄まざる今日の露西亜

では、墺露の同盟は實にも唾棄すべく再び償ひ難き罪悪に當るのである。有識の士や操觚の士は之を以て露西亞の品位を汚すものと爲し、一般のスラブ民族を傷ふものと說き、東歐羅巴に於ける墺地利の政策の一成功だと論じてゐる、而してエーレンタール男が代議士の間で試みた重要な演說のあつた後の今、渠等代議士は自分達の豫言の的中した事を叫んでゐる。此問題は近き將來に於て屢持ち上がるものと思はれるから、其材料の重なもの丈を書いて留くのは徒爾ではあるまい。

　マセドニアの國は澤山の種族と澤山の國語の混合から成つてゐるものだが、其人口の主なものはセルビア人、ブルガリア人、及希臘人である。其中で希臘人は數に於て最多く、又最重要な地位を占むるもので、土耳格人は言はゞ押入婿である。ブルガリア人とセルビヤ人の間には烈しき軋轢があつて、互に政權を手に入れようとしてゐる、各其後ろにはセルビア王國とブルガリヤ藩の後ろ楯を倚んで相下らない。兩者共に殆んど同一の國語を使つて、同一の宗教を信じ、互ひに結婚を取結んでゐる。兩者の間に別を立てる必要は毛頭ないやうであるが、只ブルガリヤ教會が希臘天主教から獨立して宗務を執るに至つて初めて兩者が分れて來る。此宗務院の牧師の全部ブルガリア人也と認められてゐるが其實セルビヤ人が澤山居るのである。而してブルガリアの藩より派遣せられてゐる傳道師が改宗騷をやつてゐるのが漸々と其一味を增して數千の多きに達した。

　ブルガリアは倖にも其野心のキッカケを得た。ブルガリアが未だ回々教の桎梏を脫するに至らざる頃、土耳格政府は其セルビヤ人を憎むの故を以て渠等に通じてゐた。セルビヤ人は全スラブ民族を糾合して有力なる一大スラブ民族の國家を建設しやうといふ野心を有つて居ると目せられてゐたのである。ブルガリア藩が建てられた後と雖土耳格政府はマセドニアにあるブルガリア人の布教事務所に向つて切りに秋波を送つて居た。是全くスタムブロフの反露西亞主義、全土耳格主義の政策から出た事である。こんな風でマセドニア人の多數はブルガリア教會の爲めに略せられた。その上にブルガリア藩廷に於ては熱心に其傳道師の努力に幇助を與へ必要な金ならドシ〱と使はせた、マセドニア人の多數の、學校で成績の佳いものはソフヤに留學させて其教育を了へしめ、其俊良は選ばれて藩廷

の文武兩官に陞用して立派な地位を與へるといふ風に仕向けた、處が丁度此時平和なる競爭は變じて侵掠的の擧と成り、遂には流血を見るに至り、土耳格人をしてマセドニアに在るブルガリヤを放逐するやうな政策を採らしむるに至つた。其マセドニア人は其後ろに回々敎の束縛より脱せんことを切望せる自分達に同情を寄せたる同胞藩廷の有力なる勢力あるが故に、土耳格ブルガリヤ間の戰爭も何かといふ風に成つて彌形勢は切迫した。偖此種の戰は例令甘く行つた所が、バルガン半島に利害關係のある列國の同情を買ひ得ない場合には頗る不得策である、加之其成功も覺束ないといふ所から、露西亞と墺地利は半島の現狀維持を宣言として結合するに至つたのである。

先づざつと是が墺露連合の仍て起る所であつた。(現代評論抄)

亞細亞起たば如何

吾人が印度支那、若くは日本に於て見るが如く、亞細亞に於ける新しき國民的生活の運動は、從來白人種によりて、長く劣等者とのみ考へられたる人民の未來に關し、幾多の斷定を與ふべきものあり、如何に文明と修養とに於て進歩するものあるとも、白人種は印度種或は黄人種を以て自己等と同等なりとは見做さず、之に對して彼等亞細亞人種は如何に報復を企つべきぞと、こはヴイアトルなる署名にてフヲルトナイトリービユー紙上に見えたる一記者の問ひし所なり、斯く一問を放つて記者は自ら答ふらく恐らくは亞細亞に於ける非白人種は遂に大に團結して、亞細亞大陸を以て全然自己等の領有に屬すべきものと主張するに至らんと、今此大膽にして敏慧なる考察者の所説を抄出せん曰く、

印度人は假令彼等の間に幾多の分裂ありとするも、その非白人種たるの故を以て容易に相結合し得べきものなるが、今此皮膚色問題の紛爭は、印度人の團結それにも優る恐るべき一大同盟を作ることなかるべきか、亞細亞人の他國に移住するを防止することは軈ては今日想像し能はざる所の結果を齎すことなかるべきか、即ち全亞細亞の鞏固なる結合を來すことなかるべきか

と、記者は尚ほ之に續けて、歐米兩大陸に於て白人種の文明が亡滅するごとき事は勿論有らざるべきも、亞細亞に於て能く勢力の永續を保つべしや否やと、即ち記者の說くところは下の如し、

西部歐羅巴並に北亞米利加に於て、極小量に見積りても猶ほ十億萬

の人民の永存を許すが故、苟も歐羅巴人種の道德組織が弛緩せずして在らん限り、白人種の文明は存綴して得意の境に在るべきなり、言ふまでもなく、內より自ら潰敗せんか遂に滅亡を免かれず、如何なる社會なりとも能くその結果より救はるゝものあらざるなり、若し歐羅巴及び北亞米利加が假に夢想によりて蒙古なる扁平足人種の爲に征服せらるゝことありとせは、そは唯白人種自ハの結果ならずんばあらず、決して獨り亞細亞人種の覺醒によるとのみ思ふべからず、否それ以上の原因あるべきのみ、好しや左る場合のありとも猶幾年代の間は、一旦緩急あるの時白人種は忽ち團結して能く海上權を制するを得べく、又アーリアン文明が實際黃禍に厄せらるゝことありとも、現在彼等が獨占し居る凡ての大陸をば猶ほ支持するを得べきなり、

と、そは然りとして、左らば亞細亞は如何になるべき、白人種は現在の立脚地を持續するを得べきか、記者は又之に答へて曰ふ、

旣に地球上の全人口の半を占め、尙ほ且つ白人種よりは增殖力の盛なる亞細亞幾百万の人民は、彼等が當然の要求なる、彼等の白人種の領土內に於ける同權或は彼等自身の領土內に於ける專有權の主張を續け、遂には之を得るに至るべし、若し黑色並に黃色の人種が全然占領せらるゝか、或は管理せらるゝがにより歐、米、弗、濠の四大陸より排斥せらるゝの曉には、從つて亦白人種の企業も統治權も黃人種の大陸より驅除せらるゝに至るべし、こは相殺手段として蓋し已むべからざることなるのみ、何は兎もあれ、先づ第一に經濟上の困難が直に層一層組織立てる經濟的報復となりて現はるべし、ボイコットの考は白人種を驅嗣すといふ鞏固なる目的を有して先づ支那人の間に抱かれゝ斯くて全亞細亞の市場より白人種の商品驅除に勉むべし。されど高額の商品稅がそれ等の市場に失はるゝと否とを問はず、白人種の工業の進步は人口の繁殖、富力の增大を來し、而して從來考察せられし最大の豫想よりも、更に一層强烈なる進攻的勢力を海上に占有することゝなるべし、思へ如何に大英國幷に獨逸に於ける人口がそれ等兩國の國是を工業に定めたる以來、驚くばかりの增加を來せしかを、記臆せよ又、殆んど亞細亞の全部を擧つて今猶ほ純粹に農業を基礎となし、而して依然として今猶ほ八億万の人口を維持することを、彼等が共通の經濟上の困難をして痛切に感ぜしめ、更らに廣く撒布せしめよ、而して彼等の領土以外の如何なる大陸にも白人種の國家あること、左れど黑色人種並に黃色人種の將來如何ばかり增加し如何ばかり進步すとも、決して彼等自身の大陸以外に何物をも有せざるべきことを確知せしめよ、亞細亞對白人種の思想をして遂に一大十字軍を起すに至らしめよ、日本をして支那人の爲に領袖とならしめ、印度人の爲に解放者たらしめよ、而して又黑人種をして白人種が遂に擊退せらるべきが如きを感ぜしめよ、斯くて初めて西方文明の衰頹、或は消滅を想ふ不思議なる夢の全く覺醒せらるゝに至らんかな、と、

獨逸に於ける工業の進步

國家盛衰の度を知らんと欲せば先づ三個の問を起さゞるべからず、市場に上る重なる製造品が次第に增加する量に於て生產せられつゝあるか。これ其一なり、その國民は他國に移住しつゝあるか或は確實なる賃銀

を得て本國に居住しつゝあるか。これ其二なり、その賃銀は高上しつゝあるか低落しつゝあるか。これ其三なり。倫敦デーリーメールの一記者は此等の諸問に答ふることに於て、獨逸最近の進步が財政上並に經濟上に於ける實物教授として、最早之に增すものあらざる程の度にあるを認めぬ、記者は獨逸の農業に就いて、今や獨逸の地域は大に科學的耕作、漑灌並に森林の拔除等によりて改善せられしを語り、次の如くにいふ。

獨逸は產鐵國としては第二位に居り、斯くて此點に於ては我國をして第三位に下らしめしに拘らず、尙ほ又獨逸は織物製造に於ては第二位に居り、船舶輸送に於ては第二位に居り、造船業に於ては第三位に居り、而して化學器械並にその種類の工業品に於ては第一位を占むるにも拘らず、彼はそれ等諸工業の爲に敢て農業を犧牲とするに至らず、その鑛業、製造業、運輸業に於て使役する勞働者の總數は千百万人より千二百万人に及べるにも拘らず、農業に從事する勞働者八百萬人を有す、之が比較を試むるに、人口に於ては獨逸より少きこと僅に三分の一なる英吉利の農業に從事する勞働者の總數に四倍するものなり、獨逸にては今日五百五十万以上の優良なる農場を有し、千八百万人以上、即ち耕作者並にその家族とを含めるそれだけの人員を養ふを得るなり、その他耕作に堪ふべき地及び葡萄園を合して六千五百萬エーカーあり、又森林のみにて三千三百萬エーカーあり、

と、獨逸は此の如きの狀態に在るを以て、國民その本土に安んじ、移住者は殆んど跡を絶つに至れるが、記者は尙ほ續けて曰く、

此實際の即ち根本的原因は獨逸に於ける工業の進步に歸すべく、斯くて年々その人民の增殖あるにも係らず、僅々三十年の間初には平均一年二十萬人の移住者を出したるものが、現今はその數減じて三萬人となるに至れり、獨逸の勞働市場は近年甚だ健全なり、即ち國民の境遇は甚だ滿足なり、千九百〇一年より千九百〇五年に至る五年間、英國よりの移　者九に對し、獨逸よりの移住者は僅に一の割合を示す程なり、

と、デーリーメール氏は獨逸の實業に就いて頌詞を呈すること、その勞銀の增加を說くの條に於て絶頂に達す、曰く、

千八百八十七年と千九百年との間に獨逸の勞働者の勞銀にして政府の保險局に預けられたるもの、平均二割六分以上に上れり、千九百年以後尙ほその增加の度速にして、實際我英國に於けるよりは遙に優れり、千八百八十年と千九百年との間にて、獨逸に於ける造船職工の勞銀は二割二分の增加あり、機械師の勞銀は三割五分の增加あり、一般勞働者の勞銀は五割、採鑛者の勞銀亦五割の增加あり、獨逸にて最も多く勞働者を使役するものはクルップ合資會社なりとす、千九百四年には此會社が使役する所の勞働者は實に四千六百六十萬人に達しき、而してその日々に支拂ふ每一人の勞銀は、之を千八百八十年に比すれば高きこと五割二分、更に之を千八百七十一年に比すれば高き、こと正に六割一分に達せり、

最近二十年間に於て工業並に農業の勞銀全體の增加額は非常に大なるが上に、勞働時間の減少は更に大なるものなりき、而して又一面勞

働法の實施による効果は、之を英國に比すれば一層獨逸の勞働者の利益を確實ならしむるものありと、

メレデヰース翁

西暦千八百五十九年に "The Ordeal of Richard Feverel" を出し、爾後三十餘年の間に "Rhoda Fleming," "The Adventures of Harry Richmond," "Beauchamp's Career," "The Egoist," "Diana of the Crossways," 等の名作を次ぎ次ぎに出して、今では英國文壇一方の老將として、悠々餘生を樂んでゐるジョージ、メレデヰース氏は玆歲八十の春を迎へた。「ウエストミニスター評論」は其三月號の卷頭に氏の文勳に對する頌辭と其高齡を賀する祝辭として概ね次の如き意味の一文を揭げてある。

二月二十日を以てジョージ、メレデヰース氏は滿八十歲の高齡に達し、英語を解する現代の識者達より熱誠なる賀辭を受けた。吾「ウエストミニスター評論」八十餘年來思想の公平不偏を標榜し其時代々々の最進步せる思潮を代表し來つた吾「ウエストミニスター評論」は此機に際して、此最公平にして最獨創的な十九世紀の人生批評家、人生描寫家に對して眞心からの頌辭を捧げようと思ふ。世の最良なる英國文學に接觸してゐるといふ人達と同じく吾「ウエストミニスター評論」は此一方には盡きる事なき淡々た、晩年の慰樂を享け、一方には當代の人々から無冠の天爵ともいふべき尊敬と愛慕とを捧げられてゐる、第一流の小說家にして詩人、又諷興家（ユーモリスト）、一面時代の批評家なる氏を賀するといふのはまことに罕な目出たい事である。

殆んど二十年近く、メレデヰース氏は筆を執つて公衆の前に立つた人である。其作の美質は夙に識者の認むる所と成つて居たので、今日氏が普ねく熱情を以て迎へられ謳歌せられたるやうに以前に於ても歡迎せられて居た。氏が今日の地位の動かない事は其作物を手にすれば容易に判るので、世の識者は氏を目して獨創的で且深邃なる有識の士といひ、批評家の目には氏は批評家に映じ、詩人には詩人と見え、諷興家（ユーモリスト）は諷興家と看、著作家は愛すべき作家と見立て今日に至つたのだが、今後とても相渝らず見る人々の心の鏡にさま〴〵に映じて秀でたものと欽羨することであらう。世間では氏が實世間に接觸してゐないと言つて難ずるものもあるやうであるが、若し實世間といふことを單だ

思想の上の娛を書籍の中に求むる人々と假定した時は或はさうかも知れんが、實世間といふ語を鑛山或は工場のベンチや吹鞴の邊て働いてゐる人々を含めたものと解する場合には此誹難は全く通ぜぬ臆斷と成つて了ふ。讀書といふ事を精神上の娛樂と見做すものはこんな人達の內にある。氏の崇拜者はかくの如き人達の間にその數を增加するのてある、又かくの如き人達の間から、氏の作を解し其眞價を認め、氏に對して之は自分の智惠の恩人だと思ふやうな研究者は出てくるのてある。一體立派な人々の胸に應へるやうな作家なら常に讀者を失ふものでない、而して世間の眼が高くなり、文明が進むにつれて其讀者の數も殖えて來るのである。

かくの如き賀すべき反面に悲みの存するの氏は吾々の大恩師てあるけれど、それは氏の胸中の欝勃して居た所を外に顯はし、吾々に授けてくれたのだが、年を取ればもう昔の働か出來なくなつて、過去の名譽は葬られて了ふ事てある。けれども氏の吾人に授けて呉れたものは永代の遺產てあつて、其作が人の心に泌々と感ぜらるゝ限、只一時の流行の影のやうなもので無い限は、其眞價を失ふことは決して無い。其實は自ら滅ぶるもので無い許りでなく、永く〱他の作家を刺戟して淸新なる作物を產み出すものである。氏が晩年の一の慰樂として充分に樂めるものは自分の影響は世間の靑年達に及ぼし又絕えず及ぼす事だらうと追想するのであらう。靑年は靑年て行く〱は立派な事をして其恩に酬ゐなければなるまい。兎に角に人を奬勵奮發させる作は乾度、其摸倣の作を出す許りでなくもつと大切なもの、即ち古い作が古い時代に獨創的て深遠なものであつたやうに新らしい時代に同樣の價値を持つた作を喚んで出すものである。是は誰人の作たるを問はず立派なものならば皆同樣てあるが、獨り氏の場合に在つては自己の作物が世人から眞摯な體度で推賞せらるゝのを高齢の今日現前に見るといふのだから洵に幸福な事といふべきである。（以上社同人）

（此欄の担任者山縣五十雄氏神經衰弱症に惱まされし爲執筆するを得ず、已むを今回丈は社同人にて責を塞ぐこととしぬ、讀者請ふ諒とせよ）



露國の敍事民謡

馬場孤蝶

何れの國の文學史上でも、民謡の發達したものは、勇者を歌つた敍事詩――卽ち、正史及神話中の勇者の物語を律語に綴つたもの――である。所で、さういふ敍事詩は、大抵の國では、餘程昔に、文書になつて了まつたのである。西部歐羅巴などでは、中世に於て、敍事詩を文書に上ぼすことが行はれたと同時に、人民の間に吟唱せらるゝことは全く止んで了まつたので、如何なる調子で吟唱せられたものであるか一向に解からぬのであるが、十九世紀の初に當つて、デンマーク領の、ファロォ島嶼では、古い敍事民謡が、中世に書き取つた形よりももつと古い形で、現に吟唱されて居ることが發見された。又、それに次いで、露國の北部では、古代の民謡が、千年程以來全く口頭にのみ依つて今日に傳へられて居るのみならず、その吟唱の範圍が次第に廣がる傾向があることが發見せられたのである。

予が今、こゝに大略を語らふとするのは、この露國の敍事民謡(ビリナ)に關することである。

北部露西亞の大きな湖沼、森林の間に住む農夫の間に、この敍事民謡は。古代の人が有したと同じ信仰を以て吟唱せられて居るのであるゝて、その全く發見されたのは、三十年位以前のことである。

然しながら、民謡の研究は、その少し以前から、學者の注意を引いて居たのである。十八世紀の中葉に、身分の解からぬ人ではあるが、キルシャ・ダニレフといふ人が、ペルム縣のデミドフ鑛山の坑夫の間に行はれて居た民謡の蒐集に力めた。て、そのなかから、拔萃したものが、千八百〇四年に出版されて、世人の注目する所となつて、續いて、千八百十八年に至つて、最つと完全な集が印行されたが、こゝに至つて、學者の

注意が喚起されて、民謠蒐集に着手するものが稍多くなり、民謠の記錄さるゝものが次第に增して來て、千八百十九年に、ライプチッヒで出版された獨譯の民謠集中には、二三珍奇な歌が加はつて居た。が、最も博く世人の注意と熱心を喚起したのは、ペエトル、リブニコフの功に歸すべきである。千八百六十一年から同二年に渉つて、リブニコフが、オネガ湖の沿岸地方で蒐めた民謠集二卷が出版せられたが、世人の歡迎は著しいものであつたものゝ、事の餘まりに奇異なので、稍や不信の態度も見えたので、リブニコフは、第三卷の出版の際には、發見の顚末記を添附した。この敍事民謠集三卷の出版は、露國文學上の一時期を劃すると云つて宜い。

ペエトル・エヌ・リブニコフは、オネガ湖の西岸にある、ペエトルザボドスクといふ所に駐任して居た官吏であつた。千八百五十九年に、町の二三の老人の口から、オラニエッツ縣の村落には、古い奇異な習風、傳說、歌謠などが、今に傳はつて居るといふことを聞き、その例證として、官報に出て居た二つほどの歌のことを聞いた。で、その年のうちに、『壜』と綽名の付いて居る村廻りの裁縫師の口から直ぐに書き取つたといふ民謠の稿本を手に入れたので、いよ〳〵民謠の蒐集に手を著けたが、始は、歷史上、宗教上の歌しきや集まら無かつた。

千八百六十年になつて、或る統計を作れといふ官命に接したので、こゝに始めて、人民そのものの間に就て、民謠蒐集を爲る機會を得た。シユグンスクの市では、警官の助力を得て、二人ほどの神歌唄ひを捉らへて、その知つて居るだけの歌を皆歌はせて見たが、神歌唄ひは大抵、世間歌――敍事民謠(ビリナ)――を歌はぬものであるから、何の得る所も無かつた。が、何處でも『壜』といふ男のことを屢聞くので、何うか、その男を見付け度いものだと、或時は、冬の最中に湖水の氷上を渡り、或時は、夏、水の漲る小舟に乘つて、對岸の地方へ行つて、その蹤跡を覓めたが、二度とも無効であつて、やう〳〵、千八百六十三年に至つて、

その男を見付け出すことを得たのである――けれども、その以前に、リブニコフは、他の歌謠者から、多くの民謠を聞き得たのであつた。

官吏の風を爲し居ると、兎角、農民に疑はれて、十分の便利を得られぬので、リブニコフは、農民同樣の服裝を爲て、或時、『壜』の住居して居るプドガといふ所へ歸る市場通の舟に便乘した。節は、五月であつたけれども、湖上には尙氷が殘つて居て、なか／＼寒いのであつた。折柄、逆風て、終夜、力を極めて漕いでも、纔と、發漕點から十二ヴェルスタ程の、森だの沼などのある小さい島へ達し得たのみて、とう／＼其所て風待を爲ることになつた。所て一軒しきや無い家のなかは、舟待を爲て居る農夫連で一杯て、到底内へは入いれぬので、外にある焚火て茶を𤏐しらへてから、地面の上て眠たのである。が、奇妙な歌聲が耳に入いつて眼が覺めた。見ると、自分の所から三歩ばかり離れて、農夫の一群に圍まれて、白髯の眼の輝いた、人の好ささうな顏付の老人が居る。て、この老人の唇から、未だ聞いたことの無い、不思議な、心持の善い、賑やかな歌が、或は急に、或は緩に、極く古い、今の人には長く忘れられて居るやうな調子て、流れ出るのてあつた。やがて、その歌が濟むと、今度は、又連つた歌――『ノブゴッドの商人サドコオ』といふ名高い歌を唄ひ出した。今は、全く眼が覺めたリブニコフは、これこそ、今まで探がして居た敍事民謠であることを知つた。彼は、その後、專門の歌謠者が、善い聲て如何にも巧妙な言葉で歌ふのを幾度か聞いたけれども、一度も、このレオンチイ・ボグダノヴィッチといふ老人が、嗄れた弱い聲て、ちぎれ／＼な言葉て、歌つた時の人を壓するやうな淸新な印象を受けたことは無いといふのである。

其れから、このボグダノヴィッチといふ老人の世話て、多くの歌謠者に逢ひさういふ歌謠者をして、官吏に對する疑念を去つて、知つて居るだけの歌を皆謠はしめる便利を得たのであつた。まづ、かういふ風て、リブニコフの集めた歌は五萬行に達した。けれども、

これだけでは未だ、オネガ湖畔に貯はへられて居る民謠の寶庫は、唯その一部分を開いたのに過ぎ無い。千八百七十年に、アレキサンデル・エフ・ヒルフェルディングといふ人が、リブニコフの擧げた地方の習慣を見、且歌謠者の歌を聞き度いといふ望で、リブニコフの紹介した地方へ旅行したが、彼は、其所に止まらずに、尙進んで、オラニエツの北部及東部に入つて、拾九世紀に於ける、敍事的民謠の本場ともいふべき所に達した。二月程の間に、彼は、リブニコフが蒐めたより以上の數の歌を集めた。その數は、三百十八篇に達したといふのである。

さういふ地方は、餘まり人の行かぬ所であつて、人民生活の狀態が、敍事民謠の起こつた當時と餘まり違は無いのである。オネガ湖の沿岸地方では、首都聖彼得堡との交通もあるので、人民はまだそれ程不便な狀態で生活して居るのでは無いが、それから離れて、北部及び東部の方になるに從つて、農民の生活狀態は極めて苦しくなるのである。さういふ、地方になつて來ると、森の向ふには沼があり、また、その向ふに森があるといふ有樣で、交通の唯一の方は、唯散在せる、湖水に依るのみである。荷馬車などは、路が沼澤の多い所だから、到底使へぬ。夏でも橇を用ゐるか、又は、長い二本の棒の一端を馬の首へ縛り、他の一端へ荷物を縛りつけて、地面を挽き摺らせるボロキイといふものを用ゐるのみである。それから、水路の便の無い地方では、農民は、馬に乘つて路も無い森林のなかを通ら無ければならぬ。森の間に僅に切り開いた地面で行ふ、骨の折れる耕作と、秋の漁業とだけでは到底生活が出來ぬので、大抵は、副業として、白海に集まる獸を狩りに行くといふやうなことを行る。女も、小娘も皆男と同じやうに一生懸命に働いて、飢えさへせねば、まづ幸だと爲て居るのである。食料には、主に、燕麥をいろ〳〵に調理して用ゐる、玉菜、葱、胡瓜、蕎麥等は到底作れぬからである。

千八百七十年にかういふ地方を巡遊したヒルフェルディングは「住民の生活狀態は益々困難ならんとす」

と云つて居る。即ち、政府は、國庫の都合上、北部森林の保護を必要と認めて、森林開墾を一切禁止したが、農民は、元より、松だの、落葉松だのといふ大きな樹のある森は、よし切り開いても地質が耕作には適し無いので、一切、それには手を著けず、唯、樺、赤楊などの倭樹のある土地を切り開いて居たのみであるから、この禁令は、農業の禁止と同様であつたのである。

所が、面白いことには、この禁令が、ある地方へは、これまで其所には無かつた習慣、即ち、敍事民謡を謡ふといふ習慣を誘致したのである。歌謡者は大抵、裁縫師、靴師、網漉(あみすき)等のなかから出たのであるから、農業は、敍事民謡の保存には好適のものでは無いのである。所て、住民が、大抵、農業を棄てなければならぬやうになると、彼等は皆、網漉(あみすき)を行り出した——從つて、敍事民謡を謡ふことを覺え出したのである。

露西亞の他の地方ては、餘程昔に敍事民謡は消滅し去つたのであるのに、何故(なぜ)、かういふ北部僻遠の地に、それが保存せられて居るかといふと、それには、原因が二つある。即ち、彼等の生活の自由であつた事と、世間と掛離れて居る事との二つてある。この地方の住民は古來嘗て、耕奴制の壓制を蒙むつたことが無いので、古い物語歌のなかに表はれて居る自由な力の理想を失は無い。又森林に圍まれた、世間から全く懸け離れた地方に住んで居るので、世態變化の感化を受けず、生活狀態は全く、敍事詩時代と同じして居るのである。敎育さへその痕を殘さぬ。文字の讀めたり書けたりする者は極く稀てある。て、古代に關し、不可思議に關する信仰の保存されて居るのは勿論てある。謡ふ者は皆、聞く者も大抵、敍事民謡の中の事實を頭から信じて居るのてある。疑が生ずれば、敍事民謡は死ぬるものてある。ヒルフェルディングが、書取るために、歌謡者に、極くそろ〳〵と歌はせて居ると、歌謡者は勿論、居合はした農夫等が、いろ〳〵と説明の言葉を挾むのてあつたが、それに依ると、彼等が、歌謡中の事實を確信して居ることが明に知り得らるゝのてあつたといふのてある。て、歌中にあるやうに、何んぼ勇士ても

二百貫もあるやうな棒を振るとか、或は、一人て、四萬人をみなごろしにするとかいふことが實際出來るものだらうかといふやうな疑の言葉を出すと、歌謠者は、直ぐに『昔の人間は今の人間とはまるて違ふから』と手も無く說明し去るのてある。

古昔の希臘、中世の歐羅巴ては、今日の小露西亞地方のやうに、詩の吟唱は、職業的のものてあつたが、今の北部露西亞ては、それは職業的のものては無く、單に、家庭の慰て、誰れても、古民謠を覺えるだけの記臆力と聲さへあれば、謠ふのてある。

尤も、宗敎上の歌、卽ち、スチイクといふのを謠ふのは職業になつて居て、門附の歌謠者があつて、これを、カリキイ・ペレコジエといつて、大抵、盲人若くは不具者が、それをやつて生活して居る。

けれども、中世には、露西亞ても、敍事詩の職業的の樂師があつたことは疑無いのてある。聖ウラヂミイルの孫の朝廷に、さういふ樂師の出たことが正史にも載つて居るし、國敎は、皇帝の前に、道化師、提琴彈(ひ)き、俳優の現はるゝこと、及び、魔的歌謠卽ち俗世歌を謠ふことを禁じて居る。それて、この魔的歌謠のなかに敍事詩も多分は含まれて居やうから、この敍事詩は、元來は、民衆の爲に作られたものては無くして、上流の社會、帝室の親兵などの前て謠つたものらしいのてある。親兵の功績の方を大に讃美してあつて、君王の方の功績は寧ろ小さいものに爲てある點から見ても、主として、親兵の慰に供したものなることは明てある。が、歌によつては、性質上、君王の前て、樂師が謠つたものに違ひ無いのもあるのてある。

まづ、それは、兎もあれ、今日、露國の北部に居る歌謠者は皆農民であつて、大抵は中以上の家計を營んて居る者どもてある。多分、實世間の職業に關する才能が、敍事民謠に對する嗜好をも伴ふのてあるからてあらう。て、さういふ可成な身分の者どもてあるからリブニコフや、ヒルフェルディングから謝禮を受けることを肯じ無かつた。リブニコフが、上手な歌謠者のリャビニンの娘に頭飾の絹切を贈つた所が、リビャニ

シは、別れに臨んで、朋友は贈物の贈答をすべきものだと云つて、直に、縫取りの爲てある手拭を贈り返して來たといふのである。敍事民謠卽ちビリナを謠ふことが、民衆の間に尊敬さるゝことは非常なもので、リビヤニンなどは、漁獵に出ても、民謠を謠つて遣りさへすれば、他の者どもが、代り〲、彼の網の世話を爲て呉れるといふのであるし、現代のものどもが敎を受けた老歌謠者某などは、謠つて呉れと賴むと、何時も『半ルップル出せ、直ぐに謠つて遣る』といふのであるすると、誰れかが直ぐ半ルップル出すのである。が、この老人は、非常な上手であるので、禮を受けて謠ふのは、此の老人ばかりだといふのである。

て、學校と、商業とが、この僻遠の地に闖入せざる限り、敍事民謠の死滅する危險は決して無い。記憶が主なる力で、民謠は保存されて居るのである。敍事詩の創作力は、彼得大帝の時代以後消滅したと想像されては居るものゝ、實際は無くなつたのでは無いが、今は一向に働いて居らぬのであつて、人は、前から傳はつたまゝで、廢語などの多く混じつたまゝで謠つて居るのであるから、時には、全く解からぬ言葉の出て來ることなどもある。で、さういふ言葉の解釋を求めると、それが、その邊の方言のなかに無いものである場合などには、これは昔から左樣謠ひ來つて居るのであると答へるのみである。さういふ風で、北露西亞の農民の一向に知らぬ、ドニエプル河の地方の天然の狀況、例へば、『羽毛草』とか『大平原』とか、『野牛』とかいふ言葉が尙歌のなかに殘つて居るのである。が、この外に、地方的の變化の加はつた所も少からずあるのである。勇士が馬を驅つて通る苔のある沼だの小さい湖水だの、船の艤裝方、鞍の置き方、其他のことで、湖畔の住民の習慣、及び天景などの添加された部分がなか〲あるのである、

地方的感化の著しい一例は、ポリヤニイツァといふ言葉の保存されて居ることである。かういふ言葉は、露西亞の他の部分では全く解からぬ言葉になつて了まつて居るので、リブニコフの民謠集第一卷が出版され

た當時には、學者と雖も、この言葉の意味を知つて居るものは無かつたのである。『馬乘て冒險を求めて回はる大膽なる人間』といふ意味であらうと云ふものも有るし、大辭典の著者ダアルの如きすら、その辭典のなかでは『兇徒若くは剽盜の一群』といふ解釋を與へて居るのである。けれども、北西オラニエッツでは、何んな農夫でも、昔は、勇士の働を男も女も同様にやつたので、男をボガチイルと云ひ女をポリヤニツァと云つたのであると説明し得るのである。

巧拙に拘はらず、總ての歌謠者の歌に現はれて來る人物は皆個々の特種の性格を持つて居る。例へば、王ウラヂミイルは、必ずしも公平なる君主で無くも、何時も必らず好人物であり、勇士のなかでは、ドブリニヤは何時も、禮儀正しく、アリオシヤは大膽で機智に富み、チユウリロは豪華を好むで居るのである。かういふ風に、物語は全體としては崩れずに保存されて居るけれども、部分に渉つていふと、歌謠者自身は他から習つた通りその儘に謡つて居るのだといふに拘はらず、同じ人から學んだといふ同じ歌を二人のものに謡はせて見ると、少し宛違ふのである。これは、歌謠者自身の個性的色彩が其所へ加はるからであらうと思はるゝ。それて、或る歌謠者の謡ふ所では、勇士が皆信神の念の著しく强いものになつて居るし、又他の歌謠者は、自己の溫和な氣質に從つて、激烈な言葉を甚どく和けて謡ふのである。それから或者は、謡を甚しく長く爲て謡ふ――一の歌を謡ふのに、二三時もかゝることがある――これは、いろ／＼細かい事を加へたり、全き一節を繰り返したりして眞の叙事詩的なやり方を爲るからである。然かし、かういふ種々な差違があつて、十世紀と同じやうに、叙事民謠は、現世紀の生きて居る作物であると同時に、歐洲で中世紀に記錄されてから、以後、民衆の記憶から全く消え去つた叙事民謠と同じやうな特種な性質を保有して居るのである。

謠ふ風調は極く單純なもので、極く僅な種類に限られて居るのであるが、これを記錄するのは甚だ困難てある。歌謠者は各自己の風調を有つて居る――それは、

大抵二種の樣であるが――それを、巧みにそれ〲の題目及び感情に調和させて、覺えて居るあらゆる歌を謠ふのである。リプニコフも、ヒルフェルディングも時に筆を投じて、この教育無き樂師の熟練に、驚嘆して聞き入つたといふのである。

それて、かういふ敍事民謠が、露西亞の他の部分では、漸次に崩れて行つて（スカズカ）といふ散文昔話にまてなるには、四つ程の變化を經たのである。敍事民謠は、嚴重に極まつた特徴がある。即ち、何時も、場所や人名は正史上若くは準正史上のもので、文體も極まつて居れば、律も大凡の所極まつて居る。所て、この特徴が少し崩れたのが、『昔物語』（ボビバルチナ若くはスタリナ）て、今一層崩れたのが『哥薩苦歌』（カザチェスキヤ）て、それが變つて『壯年歌』（マロヂェツキヤ）となり、今一つ變つて『無名歌』（ベジミヤニニヤ）となり、最後に散文昔話（スカズカ）と爲つて居るが、この變形の進む毎に、時代、場所、人物等の極まりが段々薄くなつて、最後のスカズカに至るといふと、組立の一定した規則も、定まつた場所の指定も、全く消滅し去つて居るのである。

そこて、敍事民謠は大凡三組に別れて居る。第一は、ウラヂミイル即ちキエフ組、第二、ノブゴロット組、第三モスコオ組て、この三つの一番始に、前代勇者に關する三つの謠が序歌のやうに爲つて附て居るのである。所て、第一及び第二の組、特に第一のキエフ組の成立に關しては、學者間の議論が一致せぬ。或學者は、露西亞人は、宗教上の歌ては、アリアン人種に共通な傳說を保存して居るのてあるが、古勇者の歌ては、共通のアリアン傳說を全く失つて居る、これは、佛教から來た敍事詩を知つて居たトルコ的蒙古人種と露人が觸接してから生じたものであらう。即ち、露西亞の敍事詩は、外國の物語の斷片のやうなもので、全く露西亞起原のものであると誤解して居た人々が、それへ正史及び地理上の名や、種々の勇者に關する特徴を附加したものに過ぎぬといふのである。

露西亞の敍事民謠が、他のアリアン人種の勇者物語

に酷似した所のあるのは、拒み難い事であつて、印度、スカンヂナビヤの神話的叙事詩、ケルト人種の民謠などとは、特に善く似通つて居る。けれども、露西亞の民謠は、さういふ骨を根本にして、全く一個の肉體に發達して、全く國民的のものに爲つて居る。露西亞の叙事民謠が、全く韃靼及び蒙古から借り來つたものであるといふ議論は、大部見當違て、比較神話學の學者などは大抵これに反對するのである。それで、露西亞の民謠を古代史と比らべて見ると、勇者等は何處までも露西亞的のもので、此のなかに表はれて居る風俗なり習慣なりは、正確に露西亞的のものであることが知れるのである。

所で、他のアッリアン人種の神話と多少の相違のある點は、天然界の現象に説明を求めなければならぬ。天然界の諸現象は、最初、それ〴〵神に爲られた。で、さういふ神は、それ〴〵の附屬性に從つて、幾つかの數に分れ、又、その附屬性は、全然獨立の人格を有するやうになつて、それが、神の子とか孫とかいふことになつた。かういふ風に神の分限を極めたのは異教時代のことであつて、神はそれ〴〵、諸種の場所、正史上の事件及び人物等と交渉を有することゝなつた。所で、基督教の入國と共に、さういふ神の分限はますます明確になつて、初は各勇者に更はり、それから、家内の魔物とか、魔法使とかいふものに變はり、或者は魔物として、全然排斥され或者は、新しき聖者の特質のなかへ合併されて了まつた。

王、ウラジミイル、スビヤトスラビッチが、耶蘇教を露西亞へ入れたのは、九百八十八年のことである。耶蘇教は國教となつたのみならず、人民は生命に由り、新しき宗教を奉じ、古い偶像の破壊を默認し、相率ゐて洗禮を受けた。露人は、自然力を代表する偶像を禮拜しては居たものの、殿堂も、僧侶も無いのであつたから、新舊宗教の轉化に際しても、何等の葛藤も生じ無かつたが、何千年來傳へた來つた舊信仰は、一朝にして左様容易に擲ち去り得べきものでは無いので當時の露人は二個の宗教を同時に持つたといふ譯に爲つた。

所て、この難關を切り拔けるには何うしたかといふと、誠に自然な方法に出てて、在來の異敎の神様にも又、洗禮を施して了まつた。即ち、古敎のなかの雷のペルンが、預言者イリヤ(ユリヤ)及び民謠中のムウロムのイリヤとなつたなどが、その一例である。以上で、キユフ組の叙事民謠の起原の大體は說明し得られるのである。

さて、その次は、ノブゴロッド組の謠であるが、これは、キユフ若くはモスコオ組のものよりは、ずつと數は限られて居て、實際の所は、二ッしきや無い。

ノヴゴロットは露西亞の大都市の一つで、露西亞のベニスとも云ふべき商業地で、他の露西亞の都市よりも遙に早く發達して居たので、西部歐洲及東洋と手廣き商業上の關係を持つて居た。この狀況は、「商人サドコオ」といふ民謠に善く表はれて居る。それで、シユウド人、スカンヂナビヤ人、其他の人種との戰の有樣を傳へた歌は一つも現存して居らぬが、貴族と平民、即ち、ヴオルコフ河を界に分れて居る市の二つ部分の間に起つた內亂の有樣は「ヴヮシリイブスライビイッチ」といふ歌に表はれて居るのである。

この組には、キユフ組のやうに、元行(エレメント)の謠はれた所は甚だ少く、キユフ組のものに比べると、實に多く極まつた、實際的な、且正史に近づいた所がある。

所で、以上の二つの組では、人民の正史上の運命の大切な有樣なり、根本的精神なりが表はれて居るのであるが、然かしこの組の外に、人民の間に謠つたもので、全くの叙事民謠といふ名の適切に充てはまるもの即ち、實在した事件を歌つたものがあるのである。さういふ種類の謠では、人物が或る確な時代とか眞の事件とかいふものに結び付けられ、キエフ組、ノヴゴロッド組の勇者のやうに正史上の名を付けられて居るばかりで無く、正史上でその人物の行だとなつて居ると同樣の行を屢爲て居るのである。かういふのが、モスコオ組の歌の特徵である。

このモスコオ即ち帝國組の歌のなかにも、叙事詩に有勝な超凡な事件が表はれて居無い譯ではなく、その

なかの勇者は、隨分超自然な行を爲て居るのである。これ等は、確に、前代の組の歌から借り來たものであらう。て、かういふモスコォ組の歌は、力に於ては前々の者よりは劣つて居り、文體に於ては、餘程、「昔物語」若くは「無名歌」に近寄つて居る。韃靼侵入以前のことは一向表はれて居ずに、雷帝イワンから始まつて、彼得大帝の時代までて終はつて居る。普通には、この大帝の時代て、敍事民謠を造くる力は消滅したと想像されて居るのである。て、キエフ組の時代からイワン帝に至るまでの間には、民謠が餘り多く造られ無かつたやうに、彼得大帝以前の百年間には、民謠に好個の題目を供するやうな著大な事件が甚だ多かつたに拘はらず、その間に丸るで敍事民謠の無い時代になつて居るのである。

この組の歌に表はれた事件のなかには、隨分奇異なものはあるのであるが、皆確固たる正史上の根據があるのである。キエフ組て、ウラジミイル・スピヤトスラビッチとウラヂミイル・モノマカスとを打つて一團と爲てあると同樣に、イワン帝の行には、その祖父のイワン三世（イワンの父のことは一向に關係無く）及其他の人々の行を綴り合はせてあるのであるが、一體に、イワン帝は、その善良な側からのみ見てあるのである。西伯利亞の征服、カザン及びアストラハンの征略、波蘭士との戰、クリミヤの韃靼人との戰などが、イワン時代の民謠の中心である。

モスコォの英國使節館の施行官、リチャァド・ゼエムスといふ人が、僞帝ドミトリの亂後十四年、即ち千六百十九年に、その事件に關して既に行はれて居た民謠を多く集錄し、千六百八十八年には、カイダロヴイッチが、同時代の民謠を蒐集した。これ等が、露西亞の民謠が文書に錄せられた始まりてある。ゼエムスの蒐錄した民謠は、モスコォ組の歌を多く集めてあるキイリエーフスキイの六卷の大著述のなかに收められて居るのてある。

敍事民謠に表はれた彼得大帝は、正史上の彼得に似て居る所が極めて幽かてある。彼得大王の戰爭は、民

謠作者には、餘程好い題目を供した。けれどもボルタヴァの戰などの歌のなかには、昔の民謠のなかの蛇退(じや)治のドブリニャだのムウロムのイリヤだのから借りた物語を織り雜ぜて居るのである。

て、敍事民謠の創作は、千八百十二年の佛人侵入頃までは全くは止まず無かつたのである。けれども、この時代の民謠は、前代の者に比すると大に劣つたもので、時味の甚だしく欠けたもので、時代の紀念物として、僅の興味を引くに過ぎぬのである。で、すべて、モスコォ組の歌は、前二組の歌の謠はるゝ部分で、今日謠はれて居るのみならず、尚又、露西亞の中央諸縣、チェウラとかサラトフとかいふやうな所で謠はれて居るのである。

其所で、又立返つて、キェフ組及びノヴゴロット組の起原論になるが、この二組の歌は、露人の創作では無くて、トルコ、モンゴリヤ起原のものであるといふ說を唱ふる人々は、その論の根據として、この種の民謠が若し露人の創作であればキェフで作られたに極つて居るから、今日も矢張りキェフ地方で謠はるゝべき筈であるのに、左は無くして西伯利亞とか、アルチャンジェルの諸縣とか、シムビルスク、ペルム、オラニエツなどの地方、ドン河の沿岸、ヴォルガの河口近方などで、今日盛に謠れる事實を擧げて、これ等の民謠の起原は、西伯利亞を漂泊して居た韃靼人種から來て居ると推論するのであるが、これは、甚だ迂遠な議論で、實際上、この現象に關しては、それよりも單純なもつと自然な說明を、キェフの正史上から爲ることが出來るのである。

ウヂミイルの歌(モスコォ組)は拾、拾一、拾二世紀に作られたものである。これには十分な根據がある。この組の何(ど)の歌に依つても、露西亞人は耶蘇敎信徒として表はれて居り、大抵は、韃靼人と戰爭を爲て居ることになつて居るし、又、事件は大抵キェフ及び附近に限られて居て、他の町の名は出て來るに拘はらず、モスコォが少しも擧げられて居無い。これて見ると當時モスコォには未だ存在して居無かつたと見て然るべきで

ある。所て、正史に依るにモスコォの今日の內廓（クレムリン）の所に、ウラジミイル・モノマカスの子ユウリイが家を始て建てたのは千百四十七年てあるのてあるからキェフ組の歌は、耶蘇教が露西亞に入いつた九百八十八年からモスコォの出來た年即ち千百四十七年に至るまての間に作られたものと見るが至當てあらう。尙その上に、歌のなかに表はれる勇者は大抵正史に載つて居るものてあるが、何れも拾三世紀の始以後まて生きて居た者ては無いのてある。

　それから、今一つの證據は『イゴォル征旅の語』である。これは拾七世紀以前に、文書に錄された唯一の叙事詩て極めて著名なものてあるが、なかの事件は、ノブゴロッド・シエヴェルスキイの君、イゴォルが、千百八十五年に、當時ドン河の沿岸に住んて居た、トルコ、フインランド種の遊牧民ポロヴチイに對して復仇の師を興こしたことてある。て、かういふ戰を根據にしたこの詩が、この事件に關係ある重な人々の生時に作られたものてあることは確てあつて、その文書に收錄されたのは拾四世紀若くは拾五世紀の中のことてあるらしい。所て、その始の數行て、無名の作者は、『ボオヤン（當時高名の詩人てあらう）の風て無く』『今振り』即ち叙事民謠（ビリナ）の風て歌ふ積りてあるといふことを云つて居る。これに依れば、叙事民謠が、千百八十五年頃既に行はれて居たことは明ては無いか。尤も、こゝて一言斷はつて置き度いのは、『イゴォルの語』は、前にも云つた通り、文書て吾々に傳はつた唯一の叙事詩てあるから、甚だ貴いものてもあるし面白いものてもあるが、しかし、叙事民謠即ちビリナとは全く違つたものてあるといふことてある。

　叙事民謠といふのは、その名の示す如く、人民が作つた歌てあつて、一人の作者の痕跡の無いもので、そのなかの人物は、正史上のものよりも寧ろ神話上のものてある。然るに、『語』の方は、一人の詩人の作物て、その人格て著しく彩どられて居り、そのなかの人物は並の人間て、一向超自然な所は無く、事件は全く正史上の事件てあり、詩は整然と組織立つた一篇のもので

ある。敍事民謠には、詩及び正史の諸種の層が認め得られる。古生物學が實世界の事物を研究するやうに、詩の方でも同じやうな方法での研究を民謠に用ゐたらば面白からうと云ふ説もあるのである。

で、キエフ組の歌及び前代勇者の歌が、拾世紀及拾一世紀に於て、ウラヂミイル及びヤロスラブルの兩市が建ち、南部露西亞の住民が北方及び東方への大移動を始めた時分に、既に存在して居たと推定し得べき根據の十分あることは、以上の説明で、大體解かることであらう。で、この大移動は、段々と勢を增して、特に拾貳世紀に於て、ウラジミイルが帝都となつた時分には、最も著しくなつて居るのであつた。それで、南部で行はれて居た民謠も移住民と共に北行して、後年大露西亞の中心となつた部分へ移つて往つたとは、容易に認め得らるゝし、且又、それから尚後になつて、モスコオ時代の露西亞の生活の必要から、尚住民の北行は續いて、キエフの歌も、古代の遺物と共に國境の方に運び行かれたことも、毫も怪むに足り無いのである。

と共に、南方では、拾參世紀に於ける、韃靼人の侵入の爲に國を荒された事、拾四、五世紀に於て、リスアニア人の支配の下に、前より傳はつて居た文明の頽廢した事等の爲に、敍事民謠は、民間の記憶より全く消滅し去つた。それから拾六世紀になつて、南部露西亞の住民が、再び、カザックの共和制に於て一社會を組織するに至つて、昔物語の新しい組を作つたので、これが、全くキエフ組の敍事民謠の代りに行はれることゝなつた。で、敍事民謠が元生れた土地のキエフ地方の小露西亞では、宗教歌のなかに人名とか事件とかが幽に殘つて居るのみで、敍事民謠は、今日は全く歌はれずに、樂師には、カサックの勇者の歌のみが歌はるゝのである。が、北西の荒涼たる大事件も戰爭も無かつた地方では、ウラヂミイル王の臣下の勇士は何等の競爭者も無く榮えて、移民は、昔の南方の美くしい故郷を想ひ出させる樣な歌や物語を愛で傳へて居るのである。

かういふ風に、敍事民謠が、次第に北へ移つて行く

のは、スカンヂナビヤの敍事歌が北行して遂にアイスランドへ行つて、其所で中世に文書に收錄された順序と殆ど同じてあつて、これが、敍事民謠の現時北方に行はるゝ所以の道理ある說明に爲るのである。て、かう見れば、西伯利亞渡來說は全く餘計なものとなるては無いか。（ハツフグツド氏の『露西亞の敍事歌』に據る。

大石正巳

黑頭巾

其一

◎大石氏が始めて廣く世間に知られたるは、馬場辰猪と共に明治義塾を經營せるの時にあり。而して彼が馬場と親密なる關係を結べるも亦た此の時にあり。

◎明治義塾は今の法學院の處にありて、三菱商業學校の後身也。馬場、大石二人者が、義塾を擔當せるは則ち岩崎氏との關係に依る也。

◎明治義塾の其後は、同じく土州出身の豪傑的教育家福富孝季と杉浦重剛等て引受けて、更に其中の普通教育方面のみを引抜きて獨立せしめたるが則ち杉浦氏の日本中學校の起因たる也。

◎福富は當年文學士中の一奇物、容貌魁偉、風采頗る堂々たり。其の位置は高等師範學校の一教授を以て終れりと雖も、其の人格は、明治年代土州人中の一出色たるを失はず。

◎當時馬場は英國留學より歸朝、日猶ほ淺く、新智識に富み、風雲の志頗る切也。而して彼は巧みに英語を操つるを以て、義塾の首腦たる立者は勿論彼ならずんばあらず。

◎馬場は少壯頗る美少年なりき。その英國に留學中も、歸朝後も中々の洒落物にして、風采を氣にする人なりき。而して其秀麗なる容貌、瘠地の體格、優に神經質の才人たるを表現して餘あり。

◎大石や則ち之に反す、世人の知る通りの、茫漠たる巨漢、何と無く人格の大なる處微見す。義塾の經營、

人物の調和に就ては、彼大石の力に俟つてと多かりしや必せり。

◎大石は本來學問好し。外國語に至つては殊に然り。されども彼は非常の勉强家なり。彼が政事家として必要なる智識を涵養したるは、當時馬場の刺激に因ること少しとせざる也。

其二

◎大石が一躍して天下の注意人物となれるは、彼が馬場辰猪及び末廣鐵膓と共に、袂を連ねて自由黨を脫退したるの時にあり。

◎而して十八年十月なりしと覺ふ、横濱に於ける爆烈彈事件の起るに及びて、大石は大謀反者として知らるゝに至れり。

◎當時、自由黨の勢焔頗る盛んなる時に、板垣總理歐行の說起る。馬場、大石は板垣に說くに、此處暫らく外遊を中止し黨勢擴張に盡力されたきことを以てすると共に、洋行費の出處を質すに、板垣は蜂須賀茂詔侯也と答ふ。

◎馬場は英國留學中、蜂須賀侯は公使なりし故に懇意の間柄也。依て侯に質すに、侯は遂に窮して、『ドーモ出處は言ひ難いが、自分の金ては無い』と答ふ。

◎是に於て、板垣總理政府に買收さるゝの疑起り、馬場大石等大に憤慨す。當時銀座に自由新聞社あり、板垣を社長とし馬場を幹事とす。馬場は幹事の名を以て社員を召集し、板垣不信任を決議せんとす。

◎偶仲裁者あり、板垣よりも屢辯明書を送り、事體破裂に至らずして終れりと雖も、馬場、大石、末廣は此事件に因つて遂に板垣を去る。

◎此頃板垣が政府の爲に致されたるは事實なるべし。而して彼の三人者の活潑大膽なる行動は、頗る當局の注目を惹き、つねに秘密探偵をして彼等の身邊に附纒はしむ。

◎三人者の中にて、末廣は最も平穩にして學者的人物也。彼の一門一族には儒者多く、彼も亦少壯にして宇和島の學者を以て稱せられたり。彼の二兒、重雄、恭二共に現に帝國大學の敎授たり。

◎末廣は、此の如く正直無事の人物なるを以て、屢人に欺かれ易し、三人者の中にて、遂に政府の爲に羅致されて、巧に其の鋭鋒を鈍らされたるは此人也。歐洲旅行記「啞の旅行」出資は種々の風説を傳ふ。

◎馬場と大石と相携へて横濱の居留地の商館にゆき、ダイナマイトを購はんとせる事件は、忽ち密行探偵に發見され、即時拘引せられたり。當時探偵の報告書に曰く、購入の談判に當れるは馬場にして同行の大石は唯だ傍觀せるのみ也と。

◎蓋し大石は外國語を解せず、故に會話は馬場に一任せざるを得ず。然れども此事件は兩人者何れを主とすべきや未だ分明ならず。

◎馬場を善く知る者は曰く、馬場は居留地に行く毎に商館をヒヤカせり。餘り優待されて氣の毒さに、僅か許りの品物を求めて歸ること屢々也。爆裂彈も唯だヒヤカシたるのみなるべしと。

◎或は曰く、爆烈彈の奇計は、大石の大膽不敵の計畫に出づ。此事件の主者は勿論大石に相違ある可らずと。

◎此疑獄は十月より翌十九年六月に至る半年の長に亘る。二人揃つての辯士を被告としたることなれば、裁判官も無々持て餘ましたることなるべし。

◎馬場は弱體なる故に、忽ち健康を損じて病監に送られたるも、大石は壯健なるが故に、隨分ヒドキ室に置かれ、三冬の寒日に高窓より風雪の吹込む板の間に息災に暮らしたり。

◎囚獄は人格の最も好き試驗場也。此舞臺に立ちて喝采を博したる者、相馬事件に於ける後藤新平、朝鮮事件に於ける楠瀨幸彥の如き、皆之に由て男を上ぐ。而してこれ等以前に、大石が爆裂彈疑獄に發揮せる大膽にして剛健なる人格は、早や世人をして其の有爲なる前途を想望せしむるものありき。

◎放免後幾くも無く、馬場大石相携へて外遊の途に上れり。固より岩崎家の出資に依れり。而して馬場は費府滯在中肺を病みて歿せり。

其　三

◉駐韓公使としての大石は、外交の初舞臺たるにも係らず、其の遣り口は、充分に彼の本色を發揮したるものならずんばあらず。

◉防穀令事件に於ける彼の態度は決して巧妙といふを得ず。然れども其押し強き放膽的態度は、成敗に係らず人意を強くするに足るものあり。

◉韓皇の嫌ひといふにも頓着せず、彼が金縁の眼鏡を掛けて押し通したる如きは、彼の遣り口を見るに足るべし。而して神經過敏なる外務當局者が、屢彼の眼鏡に就きて忠告を發せしは事實也。然れども此の如きは大石が意固地になりて特に試むる譯にはあらず、無頓着にして放膽的なる彼の性格の發現に外ならざる也。

◉彼は一見極めて無頓着にして圓滿なる如く見ゆれども、彼の本色は恐らくは然らず。大膽無遠慮にして思ふ通りを發揮するこそ彼の眞面目也。

◉故に或場合には、彼は極めて愼密と圓滿とを缺ける、露骨的にして圭角ある性格と見らるゝこと無きに非らず。之を要するに、彼の過去に徴すれば、衝突は彼の敢て顧慮せざる所也。

◉大石が隈板內閣に入つて大臣たるや、政務調査會に於て警視廳存廢論沸騰す。廢止は彼の宿論也。而して但板垣は意外にも警視廳增設論を提唱す。此時、大石は痛快に板垣を駁倒して一言無からしめ、滿場列席者をしてハラ／＼せしめたり。

◉彼は人格圓熟したる今日に至つても尙往々其の性癖を露出す。其の近年殊に熱心に坐禪に凝る如き、其の短處を自覺せるに依る歟。

◉彼が參禪の師は、八十の老僧勝峯大徹也。大徹は元と南禪寺の管長たり。其の著述には「內觀法」「禪と長壽法」あり。彼や稀世の高僧には非ずと雖も、荻野獨園等の名僧凋落したる今日の禪林に於ては、一の元老たるを失はず。

◉大石は大徹に至つて參禪し、授けられたる問題をば、每朝三四時頃起き出てゝ考案し、朝飯後、車を驅つて本鄕の奧なる大徹の居を訪ひ「おいてになりますか」と呼んでズツト堂に入る。かくて大徹と對談すること

少時。庵は餘り廣からざる故に談論往々他室に聞ふ。

◉或は傳ふ、大石は毎日答案を大徹に提出するの前、高津栢樹老師を聘して豫修を爲すをつねとすと。栢樹師は禪僧の出身にして、東京盲唖學校創立以來、今に至るまで盲唖教育に從事し、七十を過ぎて壯健にして衰へず。

◉近來參禪の政客三人あり、故烏尾得庵、渡邊國武、及び大石也。孰れも野狐禪たるは勿論也と雖も、其中自ら得失無きにあらず。

◉烏尾子は機鋒最も鋭し、彼は利器を懷抱して、不平の爲に禪に逃るゝ者也。渡邊子に至つては、執著未練の人、其の禪を修め仙に擬るは、徒らに死を恐れて斯生に戀々する、彼の人格を暴露せるものならずんばあらず。

◉吾輩を以て見れば、大石は、修養の一方として、參禪するものならざる可らず。されば栢樹師を聘して豫修するを妨げず。唯だ早起參禪、心を臍下丹田に沈めて飛揚奔騰の客氣を殺ぎ漸を以て圓滿なる人格の錬成に資することあらば則ち可也。

◉釋宗海は宗演と同門弟子、而して現に圓覺寺の管長たり。嘗て參禪の書生に語げて曰く「新聞に出され度い爲めに參禪するは、お爲めになりませぬ」と。或は曰ふ、此の如きは大石一輩の參禪を諷する也と。是れ酷評也。

◉大石の性格を發揮せる駐韓公使の手際は、必ずしも成功と言ふ可らずと雖も、彼は之に由て有爲の資を先輩に認識され、爾後の活動の端を開けり。

其四

◉東方策を皷吹してより進歩黨に入黨するに至るまでの無所屬の大石は政海の飛將軍として、遺憾無く活動したりと雖も、彼は結局一遊星として終る可くして、而して有力なる黨員たるに適すまじきやとは、政界の問題たりき。

◉當時彼は在野黨聯結の楔子として、調和の人物として必要不可缺の才なりき。彼は憲政黨にも本黨にも重んぜられ、政府黨よりも敬視されき。

◉松隈内閣の成るや、彼は入つて次官たり、而して隈板内閣の成るに及びて大臣たり。彼が、かく速かに故參の政黨員を拔きて大臣を贏ち得たものは、八方交際の才器、彼に若くもの無ければ也。

◉星亨は餘りに戰鬪的也。犬養毅は智謀餘ありて襟度足らず。大石や力あり智も亦あり。襟度あり。恰好の獨立の器也。

◉然れど彼が無所屬として活動したるは、自由黨との舊關係もある行掛もありしなるべしとは雖も、實は彼が竊かに一飛躍すべき好機を待ちたるに因らずんばあらず。

◉彼は、多年自由進歩兩黨間に介立して自家の位置を高むると共に、政界の實情を究め、適處を擇びて遂に進歩黨に投じたる也。

其五

◉進歩黨員としての大石は、黨員として有力なるのみならず、結局、黨首として現代有數の器たることを證明するに至れり。

◉大石の人格に對する疑問は、於是一解決を下されたる也。而して同時に、彼が聲價も亦頗る昂れるを見る也。

◉大石の才と智とは、犬養に若かず、其の學殖も亦固より鳩山に及ばず。而して是等の故參を拔きて進歩黨の牛耳を執るに至りしものは唯だ彼が人格の力也。

◉進歩黨の實情より見れば、大石を以て黨首と目するを妨げず。而して黨首としての彼は、伯大隈よりも、寧ろ好望なるに似たり。

◉近來の大石をして演壇に立たしめば、則ち滔々たる萬言、首無く尾無く、而して曲折あり趣味ある、頗る不得要領の演説を爲すべく、一時間乃至二時間と雖も、敢て其の窮するを見ざるべし。

◉此の如きは茫漠にして寛大なる彼が本領の發揮也と謂ふ者あり。然れども吾輩を以て見れば、此の如きは寧ろ彼が田舍演説の習慣となりたる也。

◉田舍人が名士を歡迎するは、其の主張を聽かん爲に非ず、風采に接せんが爲のみ。されば成るべく、長く

演壇に立つ程、それ丈け聽衆の希望を滿足せしむる所以也。而して大石は頗る其の術に長ぜり。

◉蓋し優勢なる政友會に在りては松田原等は田舍に出陣するの必要を見ずと雖も、進歩黨に在りては、大石自ら大車輪に黨勢擴張を圖らざる可らず。彼が演說振りの田舍廻り化するも亦諒とせざる可らず。

◉土佐出身の政事家としては、大石は蓋し第一流の材ならずんばあらず。彼は板垣、後藤、河野の孰れにも優るとも劣ることある可らず。

◉晩近、土佐に於ける第一の聲望は、大石にあり。土佐人は由來理性の人、政事家としての伯板垣を排斥し其遊說を妨害し、時々彼をして憤慨して涙を揮はしむることあるにも係らず、彼が單に先輩として歸國するときには舊に依りて之を歡迎す。

◉土佐人は、此の如く理性の人也。同時に實行の才幹に乏し。伯板垣、後藤、河野皆寧ろ理想の人。大石や理性の人、談論頗る理窟詰めなる土州人に在つて異數の實材たり。恐らくは阪本龍馬以後、土州唯一の人格といふを妨げず。

◉精神家として谷將軍あり。土佐の政事家として、一點の光采を上院に放ちつゝあり。然れども統領の器として大石に比すべきにあらず。

◉彼は首領としての器は、松田よりも原敬よりも以上也。若し內閣を組織するの日あらば、其の聲價は侯西園寺を拔くこと一等地ならん。

◉兎も角も彼は年齒猶ほ壯にして、前途に富み、頗る有望の黨首也。而して進歩黨の氣勢、伯大隈の當時に比して何と無く精采に乏しきの感あるは何ぞや。

其六

◉進歩黨の氣勢大に精采を發せざるは、大石が伯大隈の智勇辯力に若かざるが爲に非ずして、彼が議會に於ける態度晩近頗る旗幟鮮明を缺くものあるに由らずんばあらず。

◉伯大隈の進歩黨を率ゐるや、少數黨の本領を發揮し、其の行動つねに社會の注目を惹かんと力めたり。

◉目覺ましき行動を敢てして、以て其の存在をして、

つねに顯著ならしむべきは少數黨の本領ならずんばあらず。

◉然れども此の如きは、各國の政略の情勢に照らして、宮中少くとも官邊の信用を博する所以に非ざるべし。

◉大石の統率する進歩黨が輓近頗る圭角を捨て、鋒鋩を藏して、往々有耶無耶の態度に出るものは、彼れ首領株の鋭氣衰へたるにあらず、寧ろ速かに政權を得んとするの念、あまりの急なるに由らずんばあらざるなり。

◉進歩黨は政權に渇すること實に久し。今日に至つて如上の態度に出るもの、寧ろ人情の自然として、同情に値するもの無くんばあらず。

◉然りと雖も、進歩黨が大なる決心を以て勇猛の態度を維持すべきは、此際にあるべき也。

◉議會に多數を制する政友會が、つねに報酬如何に依りて問題の採否を決するの傾向あるは、心ある國民の憤慨に堪えざる所ならずんばあらず。

◉民意は善良也。此の際、報酬を捨て、道理に殉ずるの政黨出でば國民は靡然、之に左袒せん。

◉多數黨も少數黨も報酬を貪るの態度同一ならば、國民は寧ろ其の有力なるものを擇ばん。少數黨は遂に浮ぶ瀨ある可らず。

◉而して大黨小黨擧げて利益に殉ずるあらば憲政の發達を奈何せんとするや。

◉吾輩は、大石等始め進歩黨の領袖が、黨勢擴張上頗る苦心慘憺たるものあるを諒とす。鳩山の去るや一人の隨ふ者無し。以て其の壘の案外に堅きを知るに難からず。

◉進歩黨たる者、濶眼を開き、區々たる利益を捨て、民意の最終の歸嚮を得るを目的として、旗幟鮮明に健鬪せよ。

◉而して黨首大石の人格識量、これを政友會の何人に比するも敢て遜色あるを見ず。彼須らく陣頭に立ちて、堂々として快心の態度に出ざる可らざる也。

◉天下は廻り持也。進歩黨が政權を有せざるを憂へず。唯だ其の主義態度の人心に明らかざるを憂ふ。

◎大石が一代の大立物となるべきや否は、今後二三年間に於ける、黨首としての行動に據りて定まらん。

（完結）

偶話

塚原澁柿

△四五日前に歸宅　しました。……いえ、近日毎日電報に書うと思ふ『家康公』の取材の爲めに駿遠三尾濃江といふ邊をほつき歩いたてず。……面白い話も有つたか？…否も、天氣の惡いのと。人力車の貴いのと。的にして行つた寺の坊さんや神主樣が、問話の要領を得させて呉れ無いのとには閉口しました。

△たが其間に二三の　不思議な珍話もあつた。場所は些と困るからヌキにしますが或る寺に家康公のお宮がある。拜殿をして「御神體は」と問ひますと、坊樣、鹿つぺらしく、「當寺へ御鷹野て御出になつた節、住持の上人へ下すッた其の御直筆です。」「シテ何う云ふ御書て？」「東照宮と御認めになッた軸物てす……。」僕も呆れて二の句が出無かつた。

△濱松て　築山御前（家康公の室、關口氏）の御墓を尋ねた。豫て私は富塚村の西來寺と聞いて居た。て富塚の村へ行つて「西來寺々々々。」と問いた處が、誰も知らない。「其んな名の寺は此邊には無い。」と云ふ。「ハテさう云ふ理は無いのだが。」と、小藪と云ふ村て昔し殺された權現樣の奧樣の墓のある寺、とだん／＼聞くと。「ウン其れか其れなら西來寺て、中學校の後ろの澤といふ小字の場所にあるあの寺だ。」と西が西となつては最う解らない、田舍の人の朴訥は今ても斯なてす。

△行つて見ると　御墓もある。無論毀れては居るが、堂もある、門も圍垣もある。私は以前或る雜誌て見た。築山殿の墓は寺の風塔の中に轉がされてあつて、見る蔭も無い、此は彼の甲州へ内通をして德川家を滅ぼさうとした處から、其れて幕府ても構はぬのてある。さ

りながら、餘り薄恩の處爲だ。と駁擊してあつたが、見ると讀むとは大分違ふから住持に訪くと。薄恩どころか以前は此の墓廟の外に牌堂も建てられて居て、(御一新後雨漏の爲に取壞されて今は無い)猶ほ三代公の時分三十石の御朱印地も附いてゐて、慶應の末年までは隆々たるもので有つたと云ふ。此の雜誌記者は何を聞て書いたのか、隨分不穿鑿な談である。

△穿鑿と云へば　中央公論で大いに穿鑿して戴きたいのは、秀頼公の若君國松殿の事である。大阪落城の後、國松殿は伏見で捕はれて、六條河原で傳役の田中六左衛門と一所に斬られて、其の亡骸を京の寺町の誓願寺、松の丸殿の墓側に葬られてあるとの事は、普く人の言ふ所である。靜岡の馨田町、恭陽院の由緒書を見ると。此の若君國松殿をば同寺の上人了的當寺の三代目で家康秀忠の二公に極めて寵任されたが命乞をして、我が弟子分として、寺へ置いたが、三十一才で入寂された。然かも生涯二百俵づゝ幕府から賄料を附けられて居たと、元祿五年同寺の役僧から駿府城代三枝攝津守に差出した書附に書いてある。當年八才の國松丸を斬つた江戸幕府の處置に對しては昔しから頗ぶる議論もあるが、此て見ると其の駁論の根柢を失ふことに爲る。延て悲慘なる大阪落城史の終末に一轉化を來たす譯になるのだが、此は一つ貴社の力で其の眞實を取糺して戴きたい。△特に其の恭陽院なる寺が泛々の田舍寺では無くて、德川家には非常に深い緣故がある。(家康公の竹千代君て、駿府に人質になつて居られた時には、祖母の源應尼公と此寺の隣地に居られた。有名なる公が府中寺の額は此寺の物で、後は幕府の菩提所の格で、五百石程の朱印も賜はつて居た。即ち源應尼の墓は此寺に現存して、恭陽院とは此の尼公の法號である)だから右の書上も、私は一個の史料として研究する價値が有るべきものと思つて居る。猶ほ序てに申すが、右の國松殿の御妹では、鎌倉松が岡の東慶寺といふ尼寺て剃髮して、後には天秀大和尚といふ大智識になられた。其寺は昔しから名高い、緣切寺といふのです。(談話)

現代人物評論（四）

田山花袋論

△花袋氏

秋聲

花袋氏の自然主義や其作物に就いては、天弦氏などが已に詳細な評論を試みてゐられるから、僕等が彼此蛇足を加へる必要がない譯である。

田山君が如何にも涙の多い、息苦しいセンチメンタリズムから、今日の自然主義に吹ッ切れて來るまでの經驗には、長い間の衷心の苦悶や矛盾があつた譯なので、唯藝術のため、小說を作るための方便や、外界から誘導されし一種の傾向でないのは言ふまでもない。「蒲團」などが痛切に人の頭腦を衝いたのも其の爲で、今度の「生」を讀むと、氏の藝術的生活の全面が名殘なく我々の面前に展開されるやうな氣がして非常に面白く拜見してゐる。從つて氏の作物は直ちに氏自身の苦い經驗悲しい矛盾疑惑其自身なので、技術上其を發表する手段に餘裕と云ふものが或はないやうにも見えるし、自分を離れて、自分以外の箇々の人生を其々に觀察するのは、間弛ッこいと云つたやうな風も見える。田山君はセンチメンタルの淸い人であつたゞけに、自然力や肉慾の壓服を感ずるとも人一倍强く、動もすると少し誇張に流るゝ點がないでもないやうであるが、氏の特色も旋て其處に在るので、旗幟を鮮明にして陣頭に立つと云ふ意氣も見られる。是迄の作物を拜見すると自身を說明せられたのは皆な好いやうである。「放火犯」や「弟」のやうな客觀的描寫式のものになると、唯材料を其まゝ投出したやうな觀があつて、奥に控へてゐる作家の箇性や人生觀と云ふやうなものが見えないやうな氣がする。單に新事實を發見したから、之を報告しておくと云つたやうな氣がする。

これは餘談であるが、紅葉先生は如何かすると、「こんな物は賣物にならぬ」と言はれたとがあるが今顧みて見ると、「あの時分の作物は、成程賣物にしやうため

の努力であつた。僕などは發足點が已に幼稚であつたから素よりお話にならぬが、所謂る賣物にするためには、隨分自分を欺いて來た。花袋氏などは、多年節を屈して長く自身の文藝的生活を味はれた人で、今日の名聲を博せられたとなどに就いては、僕等は多大の尊敬を拂つてをる一人である。

序に、氏にアートがないと云ふよを言ふ人がある。然し其は昔のよて、花袋の近作には如何して恐しいアートの勝つたものがある。「弟」などは其一例である。丸でガラス張にした水彩畫のやうである。「生」なども多少冗長な點もあるが、周圍の空氣を描く手腕は大したものだと思ふ。それに常時と違つて、人物が皆な能く出てゐる。氏の作では一番立派なものに成るであらうと思ふ。

△田山花袋氏

相馬御風

私一個として見ると、自然派の鼓吹者、自然派の作家としての田山花袋氏よりは、『野の花』『故鄕』の作者としての田山花袋氏が、どれ位より重大な意義があるか知れない。

私が始めて『故鄕』や『野の花』を讀んだのは中學三四年の頃であつた。涙香氏の探偵小說や弦齋氏の教訓小說などに飽き〳〵して居た所へ、あの滴るやうな情味のあるのに接したのだから、今まさに血が湧き出さうとして居た私なんかの胸に。それは〳〵云ひ知らぬ響を與へられたものだ。器械體操だとか擊劍だとか、銃槍だとか、朝から晩まで犬ころのやうに跳ね廻り騷ぎ立つて居た、荒つぽい、亂雜な少年の頭に、一味シットリとした潤ほひが出來たのは、まア私にとつてはあの「故鄕」の感化が非常なものだつたと思ふ。夕ぐれの散步などには、きつと懷にして居たものだ。私の居

中學は、越後の高田だが、あの荒れ果てた城跡の土手に上り、芝草の上に臥そべつて、幾度くりかへして讀んだか知れない。讀んで居る中に、ほろ〳〵熱い涙が流れて來る。その涙が、どれ位私の心の底を潤ほしてくれたかわからない。『故郷』について『野の花』を讀んだ。これも同じやうな風にして讀み且つ感じた。

とにかく私の十六七歳頃から十九歳頃までは、前に云つた二作を一時も放さずに持つて居たので、隨てその感化はどれ程受けたか分らない。私の幼い感情はこの二作によつて最もよく涵養されたと云つても差支へない位だ。これは私一人ではなからう。私等と同時代の人で多少小説好きであつた人なら、必ずあの二作の感化を蒙つて居ると思ふ。この點からだけでも私にとつては、花袋氏は一生忘れる事の出來ない人だ。時々あの時分の花やかな有樣を追懷する事があるが、その度に私は古城の土手で『故郷』や『野の花』を讀んで泣いた事を思ひ出さずには居られないのだ。

それから『南船北馬』、あれが又中學時代の私等に非常な感化を與へて居る。あの當時の學校の作文で紀行文など書く事があると、誰れも彼れもあの文體を眞似たものだ。單に文體を眞似ると云ふばかりでない、山河草木に對してあの『南船北馬』のやうな感じ方が、どれ位私等の自然に對する感興を湧かしたか知れない。

いろ〳〵むつかしい、批評をなさる方は外にありませう。私はたゞ私の少年時代の記憶を記して花袋氏の私等時代の少年に及ぼした感化の偉大な事を頌しやうと思ふ。

△田山花袋君の自然主義

醒雪

僕は花袋君の自然主義とかいふ態度には敬服しないものであるが、唯氏が一路向上の途に立つて、常に新らしい作家の如く感ぜられる進歩には、竊に敬服してゐるものである。花袋といふ名は實に古い作家の名て

ある、恐くは今日では古老株の一人であらう、しかもなほその主義はとにかく、新潮流の前頭に立つてをられることを欣羨するものである。往時の花袋君は、或は飜譯が上手であるとか、叙景の文が美しいとか稱せられて、一種の技巧派であつたことは爭はれない。もしそれを以つて止んだならば、硯友派の一才子であるの外、こゝに論評せらるべき人ではなかつたらう。氏が孜々として倦まざる讀書修養が、恐くは氏の今日を致したので、僕の想像にして誤まらずば、その極端な自然主義、否倫理主義は、單に進歩の一階段であつて、やがては、かのツラピッドの寺院に隱遁した人の樣に自然主義の反動が、その大成の作に仄き來るべきであらうと思ふ。否な、かくなければならぬと信ずる。

近時の氏が作物は、他の諸家の批評に遜つておいて、こゝには唯自分の感想を述べることにしやう。氏は屢々自然主義の爲に氣焔を吐いて、人間は必竟自然に抵抗する力がない、目的も理想も全く權威がないと斷ぜられたと記憶するが、僕はこの公言を以つて恰もかの社會共產主義の大言壯語と似てゐるように思ふ。彼等は所有權を否定してゐる、他人の所有權は事實に於ても否定せんことを欲してゐる。だが、自分の金錢は時とすると固く握つてゐる、或はこれをも散ずる人はあらうが、その愛する妻の獨占權をも、進んで抛つ人は鮮い。理窟は何とでも立ちもしやう、只花袋君自身が、眞に自己の目的や理想を抛擲してゐるかどうかは問題である。若し果して、無目的無理想であつて、氏自身の小說や思想が、かくの如く發展し、かくの如く進捗して來たものとすると、それは唯漫然と動搖した來たのに過ぎないであらうか。

聞說く、昔のソフヰストはあらゆる教權を疑つたがその「疑」を疑ふことを忘れた。自然に背馳する目的や理想の力を疑ふことは、我等も亦花袋君と疑を同じうしてゐる。しかしあらゆる理想やあらゆる目的が、必ず自然に背馳するものであるといふ斷定は、何故に疑ふことが出來ないだらうか。人間が懸猫の如く呻い

て、寐お白粉くさい布團の臭をかぐこと、それのみ自然に背馳しないものであるといふことは、何人が斷じ得るのであらうか。

理想なく、目的なき獸界のみが、自然で目的や理想を自ら生み來つた人間が、獨り自然に背馳して進んで來たものであらうか、假に然りとすればこれ即ち人間の理想や目的は、自然に抵抗する權威があるといふことを許す所以であるまいか。

氏曰く「新らしい生活に這入つた所がそれが何時まで續くものか、同じ樣に故の習慣にもどつて了ふまでのことである、」然り〳〵、無目的無理想は、やがて本來の有理想有目的の人生に復歸するまでのことである。

△田山花袋氏

德田秋江

私がまだ早稻田の學校に行つてゐる頃であつた。朝九時少し前、通寺町の、あの狹い人通の多い緩い勾配の道を上つて行くと、丁度山城屋といふ小間物屋の前の邊で時々行會ふ無骨な大男があつた。年は三十を少し出たくらいで、着物は藍微塵のメイセンのこともあるが、大抵は二双縞でそれに田舍メイセンの絣の羽織を着て、毎時も本を二三冊ぐらゐの紫メリンスの包を抱へてゐる。道を行く人は數限りもない、それに此の人が何故私の眼に着いたかといへば、無骨な大男といふ點であつたらうと思ふ。前齒の少し出た、生してはゐぬが、頰髯の荒い、鼻の下の溝の明瞭に刻まれた。眼付に人を壓迫するやうな、つまり餘り好い人相ではなかつた。それが嚇すやうに私の胸に刻まれた。て、會ふ度に『あゝまた此の人に會つた』と思ふが、行過ぎて了へばそのまゝその意識は消えてなくなる。

三十四年——最早七年の昔になる——の夏私は學校を出て、其の九月に坪内逍遙氏の世話で博文館に入れて貰つた、其の時の嬉しさも、これまで時々嬉しいことの少しはあつたその一つだ。先づ館内の知名な文士

が日々見られるのが嬉しい。唯高山樗牛氏——此の人は早稻田の講堂で熟知してはゐたが——が殆ど私と入れ違ひに病氣の爲に出館しなくなつたのと、それから嚴谷小波氏が洋行中で留守であつたのが殘念であつた。

田山花袋氏の名は私の記憶を呼び起す限りに於て、可なり古くから知つてゐた、あれは今から十四五年前てあつたやうに思ふ。矢張り博文館から「春夏秋冬」といふ新作小説のパンフレットが出たことがあつた。私は國にゐる頃それを何處て誰れに借りたか十分覺えぬが唯其のセリーズの中に本は別てあつたが、川上眉山氏の作て詩人と良家の娘との夢のやうな戀を描いた（題は忘れた）のと、それから田山花袋氏の、これも題は忘れた、矢張り小學敎師とその若い妻君との淸い愛情を描いたものと此の二つは非常に氣に入つて、誰れしもあることだが、自分がその戀をしてゐるやうに思はれた。私は川上眉山氏には書を寄せて、敢て頼んで返事を貰つて其れを其の後一年ばかし經つて上京した時の行李の底に大切に藏つてゐたものだ。田山花袋氏のは、其樣な氣に入つた文章を寫して置くノートブツクに別に寫し取つた。花袋といふ名はそれが私には覺え初めて、それから間もなく、文藝倶樂部の確か第一年の卷くらいてあつたらう『桃源鄕』とか言つて、若い文士が自分と緣談のある、桃源里のさる由緒ある神社の神官の娘を餘所ながら見に行つて琴の音を聞くといふのてあつた。それがまた私の氣に入つた。今から思へば花袋氏の作も隨分變つたものである。

それから數年間は私の心跡にも種々なことが刻まれた、て三十三四年の頃から田山花袋氏の名はまた別途の意味て私の注意を惹いた。それは三十四年の春の頃てあつた。一日學校て正宗白鳥氏と何かの談話の間に氏は

『此の間松岡（柳田國男氏）の處に行つたら、西洋の近頃のものは田山花袋がよく讀んてゐるから、紹介する、一つ會つて見玉へと言つてゐた。』

と言つた。其頃は高山樗牛氏などが所謂「文明批評

家としての文學者」を論じ、ニイチエを初め、僕等青年の胸を躍らしむる未だ嘗て聞かぬ泰西文人——シェンキウイッとか、イプセンとかヨーカイとかの名を盛んに口にしかけた時で、正宗氏はクォバジスを手にしてゐたと思ふ。

其の頃の舊專門學校は、言ふまでもなく英文學を教へてゐた。坪内博士のシェクスピアやドウデンが「ビクトリア朝の文學」の講義、增田氏のカーライルやエマソンやホーソーンの講義には小なからぬ利益を得たものであつた。が、英米以外の西洋文學に對しては智識の道は殆ど全く絕たれてゐた。その時高山樗牛氏などに依つて唱へられた是等の文人の名は、私の耳に、何とも言ひやうのない、人を向上(アスパイア)さするやうな調子で響いたものであつた。今日で所謂「大陸文學」といふほどの明瞭な意識はまだなかつたが、何となく私はそれ等の名に憧れてゐた、がさて其等の書に關する智識は何うしたら得られるか、その手段は皆目ない。

所が七月には學校も濟んで、其の夏は國にも歸らず、何か職業を見付けやうと思ひながら、下宿屋の二階にゴロ〳〵して日を消した。すると隣室に矢張り下宿屋に夏中を過す人があつて、その人が寫眞を見るに好いからと言つて、博文館發行の週刊雜誌「太平洋」を取つてゐた。私は所在なさに其幾冊も閉ぢたのを借りて來て見ると、中に「西花餘香」と題して田山花袋氏の歐洲近代文學に關する隨筆めいたものが每號連載してあつた。中にはダンヌンチオの名もあつた。モウパッサンの名もあつた。ストリンベルヒの名もあつた。ユイマンの名もあつた。ハウプトマンの名もあつた。メエテルリンクの名もあつた。其の他今日で所謂近代大陸文學者の事は簡單ではあるが大抵記してあつた。私は飢へた者が食物に向ふ如く、それを一々手帳に寫取つて虎の卷とした。

その內氣樂な夏も段々末になつて、九月に入つてからであつた。一日坪內博士からの召に應じて邸を伺ふと、先生は留守で、奥さんから前言つたお話で、長谷川天溪氏へ宛てゝ書かれた手紙を貰つて、私は博文館

にお目見えに行つた。
私はその十六日から出勤した。後て知つたのであるが、田山氏はその頃「太平洋」の編輯擔任て、週刊だから極めて急がしい。六日の中三日くらいしか全日顏を出す日はない。無論當座は誰れが誰れだか分らう筈もない。が、二三日經つてヒヨツと氣が着くと「通寺町のあの人がゐる……あの人も館へ來る人てあつたか、何といふ人だらう」ぐらいに、其の人の事は考へて置いて、さて正宗氏の言つた松岡氏の所謂「西洋の近頃の物をよく讀んでゐる田山君」「西花餘香の田山君」昔し「小學教師夫婦の愛情」を描いた田山花袋氏が知りたい〳〵と思ひながら、或る日其の「通寺町て見た人」と机を並べて陣取つた長谷川天溪氏の傍に行つて「長谷川さん、田山花袋さんは何の人てす？今日來て居られゝば一つ紹介して下さい」と言ふと、長谷川氏は頭を上げて横を指し、無雜作に「これが田山君だ！」
「オヤ〳〵〳〵此の人が田山花袋氏か、あの通寺町の此の人が！」と腹て驚きながら、
「貴方が田山さんてすか、さうてすか……私は德田と申します。これから何分何うぞ！」
それから偶に館て話したり、途中て一所になつたり、種々文學上の話を承つた。新らしい所てシェレイやウォゾウォスの名しか知らなかつた私は、先づツルゲネーフ（その時までに名だけは一寸聞いてゐた、唯名だけ）の話を聞かされて、さうして
「君なんかツルゲネーフのオン・ゼ・イブを讀んで見ると好い。」
「さうてすか、貴方本をお持ちてすか」
「えゝ持つてゐる。僕のぢやないが、松岡の――柳田のを持つてゐる。僕が持つて來て上げても好いが、其の内遊びに來玉へ」。
といふやうなことて、ある秋晴の好い日に、其の頃同氏の住ゐてあつた――田山氏の好きさうな、喜久井町二十番地もズツと奥まつて、地盤の少し小高くなつた後に一帶に廣い小松林を負ふた家を訪ねた。忘れも

せぬ、其の時後の松林で採つたといふ初蕈の吸物などの御馳走になつて、それからハイネマン出版、上製(今は見ぬ)のオン・ゼ・イブと、クロウェル出版の可愛い本のピエル・ロチのアイルランド・フイッシャマンとの二冊を借りて來た。僕は内心それを非常な誇とした。

オン・ゼ・イブを讀み了つて此度はスモオクを借りて見た。それからモウパッサンも借りて見た。ハウプトマンの「寂しき生活」も借りて見た。二葉亭氏の飜譯の好いことも田山氏に敎へられた。氏は、古い頃の「太陽」に出た「浮き草」の、千切つて閉ぢたのを「之れて國木田も柳田も見たのだ」と言つて、僕にも貸した。鷗外氏の「水沫集」を讀めと言つて貸したのも花袋氏、「かけ草」の「新學士や」「浴泉記」を勸めたのも、「片戀」を勸めたのも「罪と罰」を勸めたのも氏てある。其の後半歲ばかしゝて博文館は退いたが其の他氏に敎へられたことは數限りもない。ダンヌンチオは今でも借りてゐる。

氏の文學上の所說と作とに對しては全然贊成しかねる點も多少はあるけれど、「田山花袋論」といふ題の下には、私は何よりも先づ如上の事を話さずには居られぬ。（四月九日夜）

△花袋君に就て

紅綠

花袋、獨步、白鳥、秋聲、此の四人は創作界の恩人として僕は敬服して居ります。

現時の文壇は摸倣が多いやうに思ふ、其中にも露國や佛國の模倣が極めて多い、模倣の上手な人も其れは名人に違いないが、創作といふ點から見れば意氣地のない事で、いくらうまくとも假聲を聞いてるやうな氣がする、僕は此點に於て以上四氏を頗る偉なりと思ふて居ります、四氏は創作的て摸倣的臭味を有して居らんからてある。

此中最も好きなのは花袋君の作品てある、思想と文章と一致して居る、これが抑々今の文壇に珍らしき事

であらう、一體花袋君は思想に於ては非常に進步した人で總て日に〳〵新らしき方面へと向つて居る人だ、處が、僕の口から言ふと可笑しいが、多くの人は思想が新らしいと共に文章も新らしい、新らしいといふのは生硬なので粗雜なので不熟なので亂暴なのである、思想ばかりなら口述筆記でも濟む事だが筆を取つて書く以上は、日本文字で書く以上は日本の文章の約束を脫する事は出來まい、花袋君は文章に於て多くの自然派の人よりもより能く成功して居る。

　文章に飾り氣を用ゐず直ちに人の肺腑を突くといふ事は極めて困難である。僕は蘇東坡の文章が好きで愛誦した一人だが、あの人は若い時には隨分絢爛たる字句を並べた派手な文章家であつた、年取るに從つて段々地味になつて來て日本で言へば福澤先生のやうな分りよい文章を書いた人である情意の通ずる事を以つて足れりとした。平淡で正直で眞面目になつた、花袋君は元とは美文家で紀行文が上手で新體詩がうまい、卽ち彩華駢麗の文章に長した人である、此の派手な時代を一返通り越して今ま地味になつて來た、どうも一返此の時代を過ぎないものは文章に味が無い、つまり派手な文章の事もちやんと心得て、其れ丈けの力があつて、其れで派手を愼しんで地味にするのでなければ足元が危ないやうだ、失禮ながら自然派の作品に往々如何はしい文章を見る。

　世間には花袋君は思想が進んで居るほどに其の表はし方が充分でない、思想の人で手腕の人でないといふて居る人があるさうだ、けれども僕は此の一年間の花袋君は手腕に於て、非常な進步があつた、此進步は此評を取消し得ると信ずる。

　僕が花袋君に會つたのは前後合して十回に足らぬ、其れもしみ〴〵と半日の清談を聽く事さへ出來なかつた、けれども一度び花袋君に會ふて一語二語話しをきくと旣に何物かに觸れたやうな氣がする、一月も二月も考へに考へ拔いて判斷のつかぬ場合に一寸君の敎を受くると一言にして豁然大悟といふやうな思がする、僕は俳人で頭が古い、此の古い頭が近頃少しばかりで

も新しい趣味を感ずる事の出來たのは多くは花袋君の賜てある。小説創作に遠ざかつて居る僕は何時此の賜を十分に發揮し得るや覺束ない、或は終生出來ぬかも知らん、けれども趣味は無盡藏である、此趣味を一人て味はつて一人て考へ一人て胸の中に樂んて居る事は此上もなき愉快てある、然り僕は此愉快と共に花袋君をも忘るゝ事が出來ぬ。

自分勝手の事ばかり言て濟みませんが、花袋君の作品中何が一番好きかといふと、僕は一番に蒲團、重右衛門の最後、土手の家を數える其他大抵好きだ、最も感ずる處は作品を讀むと讀んてゆく中に作家の極めて沈着に眞面目な態度がありありと眼に映つることだ、決して興に乘じて書き過る事がなく、居ずまゐを崩す事がない、だから隨分危險な事を書いても讀者に惡感を與へない、僕はこれを以て常に自ら省みて居る。



五月十五日

五月十五日は今や僅に旬餘の日子を剩すに過ぎず。全國數百の候補者が、抑々如何なる人物にして、如何なる政見を發表し。又如何なる手段を用ゐて、國民の代表者たらんとするか、はた明治四十一年、日東大帝國の大國民が、如何なる定見を以て、如何なる標準に憑りて、渠等の代表者を選ばんとするか、旬餘の日子は總て此れ等の問題を解決し盡して餘りあるべしと雖も、有りの儘に言はゞ吾人、今日の所謂候補なる者と選擧區民なる者とに對する信の稍々厚からざるものありて、未だ容易に此れ等一切の解決を、唯だ冷然として『時』の解決に放任し去る能はざるものあり。故に玆に

重ねて總選擧問題に關する其の後の世論の一端を掲げて、再び我が國民の猛省を促す處あらんと欲す。

東京每日紙は『選擧期日の確定』と題して

吾人は先づ第一に總ての候補者諸君に望む、今日選擧界は腐敗すと謂ふも、其責任の大半は之を墮落せしめたる候補者其人の墮落に落ちざるを得ず。即ち黄金買收を以て投票を得んと腐心する候補者の不德之が病源をなしたる也、故に候補者が清淨潔白なる手段を以て競爭場裡に立つ可きは勿論何事を措いても、政見を本位として選擧國民の判斷に訴ふるを惟れ努む可き也、勝敗の決をして政見に對する輿論の向背如何に任せしめよ。選擧民も亦候補者の言論に聽き人格に徵して、明かに去就を決せよ、吾人は今の時代に於て、特に此平凡なる說法を繰返の徒爾に非るを確信す、

と云ひ、東京朝日は『選擧と國民道德』と題して

實にいへば、腐敗劣等なる手段の行はるゝは、政治にも固より罪あり。といへども、國民にも亦罪なきこと能はず。若し國民にして不正を容れずんば、國民の前に何等不身する政黨員等が、いかで斯る手段をなさんぞ。すれば則ち若し選擧權を賣る者なくば焉んぞ之を買ふ者あらんや。賣買契約は、主として兩者合意によりて成立する者なり。然らば日本國民は、公權を賣ることの不正を知らざる乎といふに、必ずしも然らず。知りつゝ、猶且つ不正を行ふ。之に就て、日本國民の評價上。吾人は多少の缺陷を認めざらんと欲するも能はず

と斷じ、日々紙も亦『第十回總選擧』と題して

之を四年前の總選擧期に比し國情の變轉固より同日の論に非ず、這般の國情に關する國民的覺醒にして幸に深厚ならんには、來るべき總選擧に對しては其の政黨者たると否とを問はず、選擧者たる國民として當さに大に選擧場裡に於ける舊來の陋習を悔ゐ、時代の要求に適合する適當なる議員を適當に選出して、以て總選擧の面目を一新するの擧に出でざる可らざるに拘ちず、各地に於ける總選擧の準備として吾曹の見聞する所を以てすれば、事實は却て之に反し、選擧の陋習は回一回毎其の禍を深ふするの觀無き能はず、是にたてか心ある議員候補者は他の投票競買者と伍するを恥ぢて選擧圏外に超越せんことを欲し、競爭場裡に奔走する者は却て往々識者の冷笑する所と爲る、斯の如きは元と憲政の本義に非ず、（中略）心ある者固より之を憂へざるに非ず憂ふるも何自から奮ふて任に當るを欲せざるは、畢竟するに選擧界の陋習久ふして容易に改むる能はず、勢ひ赴く所之を其の窮するに任かせざる可らざるを知るが爲のみ（中略）選擧の公平嚴正を期待するに先たち、吾曹は選擧其のものゝ存在如何を疑はざるを得ず、議員候補者の競爭は之あり、選擧は如何投票用紙の賣買は之れあり、選擧は如何、

とまでに怪み、時事翁は例の老人的口調を以て、其の『選擧權の行使』に諄々乎として、諭告すらく、

試に倶樂部の如き社交的集會所に於て談、政治に及ぶときは必らず代議士に對する冷笑罵詈の聲を聞くこと常にして甚だしきは之を以て風上にも置く能はざる劣等人物の如くに評するものさへなきに非ず稍々たる世間の評說を以て直に一般の代議士を評するの不當なるは申す迄もなけれども多數の代議士中に如何はしき人物の少なからざるは實際の事實にして其評價の下落には自ら原因を存することを疑を容るゝ可からず左れば今度の總選擧に當選する新代議士は從來の弊風に鑑みて一國の選良たる面目を維持するの注意肝要なると共に一方には選擧人の心

掛も亦大に悛めざる可からざるものあり近來選擧運動費が次第に其額を加へて今や各選擧區ともに少數の例外を除けば少なくも五六千圓多きは一二萬を算するに至りしと云ふが如き要するに選擧人中に自己の投票を金錢に換ふるの輩、大に增加したるの事實を示すものと認めざるを得ず選擧權は人民が自ら適當と信ずる代議士を選擧するの權利なるに其權利をば恰も貨物と心得、その呼價の高き方に賣附けて憚らざる始末にては其選出せらるゝ代議士に適當なる人物を見る能はざるも固より其處なるのみならず選擧權の濫用に依りて選出せられたる代議士が更に其職務を濫用して自家の私利を謀るの具に供するは當然の因果、敢て怪しむに足らざるなり即ち今日の議會に於ける弊風も其一原因は選擧人の不心得に歸す可きものにこそあれば所謂政界の腐敗を痛論する論者も獨り代議士のみを責めずして其論鋒を是等の選擧人に差向け其改悛を促すの要ある可し固より選擧權を金錢に換ゆるもの近來增加したりと云ふも全國選擧人の總數より見れば一部分の輩にして實際に斯る破廉恥を敢てせざるもの多數なるは我輩の信じて疑はざる所なりと雖もその多數の選擧人中にも眞實選擧權を尊重して候補者の選擇に心掛るものとては割合に少なく自身の關係、他人の勸誘等、種々の情實の爲めに輕々に投票し去るか或は自ら投票權を拋棄するものさへなきに非ず是等の選擧人は投票を賣却するものに比すれば尙ほ恕す可しと雖も其選擧權を尊重せざるの一段に至りては五十步百步の相違と云ふ可きのみ

と、更らに報知紙の『總選擧と敎育者』には一層銳く

毎回の總選擧に棄權者の多數なるは如何。投票の賣買の殆ど公然に行はるゝは如何。何等の主義なく政見なき者の單純なる黃金の力を以て選出せらるゝは如何。かくして當選したる者は既に投票を購へり。他日其權利を賣んとするは人情の免れざる所ならずや。既に祖先の財產をさへ蕩盡せる者が、之を回復せんとあせるも自然の勢ならずや。議員の腐敗し民意の行はれざるは、國民の罪によると決して少しとせず

と疊み掛けて、我が國民の罪を詰れり。然り、吾人も亦た此の場合、總ての讀者、忠良なる我が一部の國民と共に、口を極めて此れ等亡國の民を呵責せずんばある可らず。

更らに、東京毎日紙は『人格、政見の複本位』と題し、『選擧民の着眼點』を論じて云ふ

世間の識者往々にして人物本位の選擧を說く、吾人素より之を不可とするに非るも、立憲政治の本領は、更に一段の深遠に進み、人物の德性を重んずると同時に、其政見を辨ずるの極めて必要なるを強調せずんばあらず、資產の如き、門閥の如き、多く之を意とするに足らず、只意とす可きは人物の如何に在り、更に進んで其政見の如何に在り、吾人は國政の現狀に鑑みて、人物政見兩つながら之を重視するの必要あるを信ず、選擧界は單本位よりも寧ろ複本位なるを佳しとす可し、單に人物本位と言ふのみにては物足らぬ心地せざる能はず、政治意見に對して國民は明白なる判斷を要す、之を缺く者は未だ以て選擧人の資格ありとは謂ひ難き也。選擧人の着眼點は、宜しく此複本位に在る可し在らざる可からざる也

と、その人格彼れの如く、その政見彼れの如き島田沼南その人の言としては、蓋し何人も多少の尊敬を拂ふ可き處ならんか。

又た大阪朝日は『總選擧如何』と題し、直ちに各政黨間の評隲を試みんとして

議會開けて既に十有八年、其の間國民は學ぶ所少からず、不幸にして星亨ズムに魅せられ、政界は百鬼晝行の揚となり、前四年間、殆ど其の絶頂に達す。今や任期滿ち、改選の期至る。國民が前選擧に懲り、更に新に道德心を發揮すべきは此時なり。知らず、選擧の結果、如何に落着するかを。

政友會は實に星亨の遺産なり。其督が邪の代人として暗殺されし如く、星亨も亦刄に斃れしが、其督と同じく彼れの精神は復活して、天地上下に彌蔓せり。到る處小星小亨を見るは、其の證據にして彼等は國民道德を解するなく、主我的本能を飽まで發揮するものなり。

看よ、近數年間に於ける政友會の跋扈を。政府は之を利用して、其の爲さんと欲する所を爲す。爲に議會も形式となり、恰も院督の任を見ず。此の勢ひにして停止する所なくんば、議會なきに若しかざるなり。

憲政本黨は人物に於て政友會以上にあり、而も振はず、爲す所として失敗の歷史ならざるはなく、實は氣の毒の至りなり。憲政の妙は、國民の政治的慾念と道德的精神と相映發し、或る一黨が多數となり、或る一黨が少數となり又形勢變じて其の黨の盛衰を來たし、以て互に相變化し、局面の展開を見、政治始めて活く。若し然らずして、多數黨は何處までも多數黨となり、終始渝はらずんば、何ぞ專制政治に異ならん否却て專制政治よりも恐ろしきものなり。今や多數黨跋扈の弊、遂に議院政治の價値を疑はしむるに至る其罪誰にかある全く政友會にあり更に一種のパチリスあり、名づけて大同派といふ。憲政政友の間に介在し、常に漁夫の利を占めんとし、政黨としては最も卑劣有害なるものなり。唯地方黨員、愚にして其の眞を知らず常に彼等に誘惑化され、斯る黨員をも選擧するに至る。彼等が前議會に於て約七十名の多數を有するが如き實に驚くの外なし。

其他無所屬あり、猶興會あり。前者は混沌として不明なるも、後者は清の清なるものなり、中一二の不明分子あるも此の數年間政海の孤柱となりて活動したるは、實に猶興會にあり。吾人は選擧民に勸む、何人を先づ選擧せんかと云はば、此の猶興會員にあることを。猶興會員は第一期議會に選出されし人々に過し。其の他は主義もなく政見もなく、利の在る所是れ彼等の所屬にて、若し喰はすに利を以てせば、國をも賣り兼れまじき連中なり。何人が彼等を選擧せる、即ち國民なり。國民の道德心が彼等を選ぶに適度なりしと見ゆ、吾大に後悔するものあるべし、之れを改たむるは今回にあり、即ち五月十五日の總選擧にあり。

と論じたるは、憲政本黨に對する批難の稍々足らざるものあるやの嫌なきにしもあらねど一應は先づく公明なる我が社會先覺者の所懐を代表し得たりと言ふ可きか。終に臨みて、吾人は我が言論界に於ける最も有力なる二大記者が、現内閣と總選擧と對する稍々異れる觀察を、少しく擧ぐる處ならんと欲す。

一は國民新聞に見えたる『地方行政と總選擧』にしてその一部には

惟ふに今回の總選擧なるものは、昨年の地方議會選擧に比して、一層も二層も輪を掛けたるもの也。殊に現內閣は殆んど總選擧の爲に生存

すると云ふが如き狀態にして。總選擧に於て、多數を得んとする原政友會領袖と、內務當局者として選擧の公平を保たんとする原相內との一身兩役の働分けは、鬼神にあらざるよりは、決して容易の業にあらず。何人も之に對して疑惧の念を挾むは、寧ろ當然の事と云ふべし、而して我が地方長官が、之に對して如何なる態度を保ち得べきか。是れ亦た昨年の地方議會選擧の先例に徵すれば、吾人をして甚だ樂天なる能はざらしむるものあり。

と、疑惧し、猜忌す。他の一は東京朝日所載の『總選擧事情』にして、

今度總選擧を以て前數回の總選擧に比するに、候補競爭の大勢寧ろ不振の方には非ざるか乎。此總選擧を眼前に控ゆるが故に勉めて手中の政權を維持したりと稱せらるゝ政府黨も、今日となりて見れば、存外に冷靜らしく、是非とも國會過半數の議席を占斷せんとの聲言はあれど、選擧當日と相隔つること四週日の今日まで、其公認候補者を定めたる府縣數は僅々たるに止まる。而して其候補者を立て得べき見込の員數は、二百五十を出づる能はざる可しといふ。此だけが悉く當選するとしても、大たる過半數とは謂ふ可らず。況や必ず多少の落選者あるべきをや。察する所、政府黨幹部の心算は、聯合すべきが如く又せざるが如き現在の諸政黨の勢力の到底強大なるを得べからざるを見透り、且選擧競爭に骨折らんより寧ろ選擧了後に於て當選後の中立議員及其他の反對黨議員を操縱して其勢力を作るを得策と爲し、強ひて力瘤を入るゝに至らざるならん。最も總選擧に骨折る可く思はれたる政府黨既に此の如し。受動的に反動的に其勢力を張らんと待構へたる進步大同革新等の諸黨も、拍子抜けして亦振はざるにあらん。而して昨今の最も普通に行はるゝ觀察談を聞けば、各政黨の勢力は、今度の總選擧を經て、別に變化を生ずまじといふ。局外者も之を聞きては自ら拍子抜けせざらんと欲する得ず。

と、樂觀し、放心す。蘇峯子の位置と性向とは常にかゝる問題に對して、冷情なる能はず恬懷なる能はざるが如く、池邊氏の位置人格が又た徹頭徹尾インデフェレントの傍觀者を脫する能はざるが如きも此の二人者を識る者の眼には、一寸と面白き對照なるべし。閑話結題。



（烏山人）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



銀製洋盃及木盃

紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被上度候

一金七圓五拾錢也　同径三寸丸　同目方正味二十五匁付
一金拾圓九拾錢也　同径三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一金拾参圓貳拾錢也　同径四寸丸　同目方正味五十匁付
一金拾六圓五拾錢也　同径四寸五分丸　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同径五寸丸　同目方九十匁付

三ッ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀製径二寸五分丸臺三ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也　同径三寸丸　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同径三寸五分丸　同目方正味八十匁付
一金参拾壹圓也　同径四寸丸　同目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也　同径四寸五分丸　同目方正味百八十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也　同径五寸丸　同目方正味二百卅匁付

〔定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢〕
〔文字彫刻　一字　金拾錢〕
〔大字彫刻　一字　金七拾錢〕

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術裝物類同装飾品
貴金屬美術婦人小間物類同装飾品
金銀時計類同附屬品類

商玉寶堂

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

〔電話下谷特九六五　一二四四〕

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記ヲ乞ふ

(新著獨逸書類)

DIE GESELLSCHAFT. Herausgegeben von M. Buber.

Rohrbach, P.—Die Kolonie.	.75
Gerlach, H.—Das Parlament.	.75
Scheffler, K.—Der Architekt.	.75
Landauer, G.—Die Revolution.	.75
Göhre, P.—Das Warenhaus.	.75
Hellpach, W.—Die geistigen Epidemien.	.75
Oppenheimer, F.—Der Staat.	1.50
Mauthner, F.—Die Sprache.	.75
Weiningler, O.—Gedanken über Geschlechtsprobleme.	.90
Bélart, H.—Friedrich Nietzsche und Richard Wagner.	1.50
Gersdorff, W.—Terakoya. Die Dorfschule.	1.00
Das Ibsenbuch. Ibsen in Seinen Werken, Briefen, Reden und Aufsätzen.	1.50
Strantz, F.—Opernführer.	.50
Meyer, R. M.—Grundriss der neueren deutschen Literaturgeschichte.	3.00
Ernst Haeckel. Ein Lebensbild. von Wlm. Bölsche.	.50
Key, Ellen.—Das Jahrhundelt des Kindes.	1.00
Beowulf.—Der deutsch-englische Krieg.	1.25
Moser, G.—Der Bibliothekar.	1.00
Haeckel, E.—Die Welträthsel.	.50
Martin, M.—Die höhere Mädchenschule in Deutschland.	.63
Pabst, A.—Die Knabenhandarbeit in der heutigen Erziehung.	.63
Tews, J.—Moderne Erziehung in Haus und Schule.	.63
Nadolny. R.—Verkehr nach Russland.	1.40
Südwest-Afrika deutsch oder brittisch?	.40
Bundschuh.—Die Revolution von 1912.	2.00
Ghikas, G.—Botschafter von Novikow über den Panslavismus und die Orientalische Frage.	.90
Schmidt-Jena, C.—Die neue Frau.	1.75
Georgy, E.—Jenseits der Ehe.	1.75
Gerling, R.—Erziehung zur Ehe.	1.00

第七四番 振替口座 大阪支店

東京・大阪・京都

丸善株式會社

(東京振替口座第五番)

九八九〇 振替口座 京都支店



校長の二子

小杉天外

三

むしやくしや腹の新吾は、上の室に入るより疾く、先づごろり仰向きに寢轉んだ。此處にも赤い澁紙が敷いてある。新吾は毛布を擴げて、厚袍を被けて、先刻まで此うして新聞を見て居たのであッた。成程室の中には、もやくやと煙が漂うて居る。それを汚れた障子から入つて來る、薄い椽側の日光で見ると、空氣は鼠色に染つて、その底から燻ぼッた天井の木目が、縞をなして光る。けれども、豈夫に臥て居るところまで煙が舞下つて來て、顏を背める程ではないのだ。只だ何うも燻臭い、吐く息吸ふ息の度毎に、其の眼に見えぬ炭素の微細な粉末が、鼻から喉から、深く肺臟までも吸込まれて、薄い呼吸機の内膜が、眞黑に汚れて了ふ樣な氣がする。無論神經だとは思ふが、何うも然う云ふ氣がする。頭痛がして來た。

手に任せて新聞を開いた、其處には先刻も讀んで、愚論だと思つた文學論が出て居る。出て居るが、新吾は其を讀むのでは無い、讀まうとしても文字が眼に入らぬ。母に罵られた事ばかりが癪に觸る、焚火の煙が癪に觸る、父の吝嗇な事、僞善家だ事、それから下婢の無禮、與助の鷄卵、思出す事が悉な癪に觸るのだ。此樣な冷淡刻薄な親は何處にだッて無い、と敦圉いて攻擊した。一晩泊つた旅籠屋だッて此よりは親切だ、と思つた。此樣な親達と一緒に居ては、自分の病氣は到底癒る筈が無い、行李を纏めて明日にも東京へ出て了はう、と云ふ樣な考も湧く。

勿論此處を出れば、醫藥料も自分で拂はなければならぬ、食料から滋養物……、總て健康な時より費り增す小遣を作る爲には、健康な時よりも多く働かなければならぬ。併し、此樣な惡くなッて居る俺の頭が、其樣な負擔に如何して耐へられやう……？　若し無理に使はゞ、病勢の增進するは必定である、卒倒するか、昏睡に陷るか、血管が破裂して、不治の腦病にでも成つて了ふに決まッて居る、てなければ、悲むべき精神病にても變症するに決まッて居る……。

此う思ふと、急に胸が逼つて來る。眼から涙が溢れる。今にも其の精神病に成る樣な氣がする。

「だッて詮方が無いさ、成つたッて詮方が無いさ……。」と唇を固く咬んで、我が心に云つて聽かせた。此樣な無慈悲な親を持つたんだもの、此樣な薄命に生れたんだもの、狂人に成らうが、看護する者も醫師も來ない暗い室で、知らぬ間に一人で息を引取らうが、それは詮方が無いさ。

東京の下宿が胸に浮ぶ。石炭の煙が年中臭つて來るのだッた。砲兵工廠の鎚の音が、風の吹具合では、

直ぐ窓の外の樣に聞えた。ガアトと蒸汽の湯を棄てる音が響いた。臥ても起きても、六疊しか無い彼の二階の一室で、机に咬り着いて、厭な頭腦から無理に評論を綴り出したり、翻譯をしたりした。原稿の塡め場に窮した時は、先輩の門を賴み廻つた、心にも無いお世辭も使はねばならなかッた。それで居て始終金が足りない。また運動して仕事を探し出す、と他にも競爭者が控へて居る。奪ひ合ふ、啀み合ふ。何やら此やらして、辛と自分の方へ持つて來る。それでまア其の時の凌は付くが、月を越せばまた同じ苦勞を繰返さなければならぬ。で、何時だッて氣の息まる時は無い。不眠になる、胃も惡くなる、神經衰弱になる、腦病になり掛ける……。顧へば全く辛い生活だッた。此樣な病身になッて、また彼の辛い生活を遣らなきやならんのかなア!　新吾は、新聞も手も投出して、疲れた樣に溜息した。

「これが、慈愛に富んだ親だッたら……。」と何彼につけて怨めしい親達に思が走る。世間普通の親ならば、男兒で一人より無い我が子に、此樣な苦勞も爲せては置かぬ、此樣な病氣に罹らせもせぬ。資產の有る者は資產を傾けても保養をさせる。資產の無い者でも、借財をするなり有る物を賣るなりして、飽まても我が子の回復を計るに違ひ無いんだ。それを俺の親達と云へば、何か厄介者でも置いた樣な顔をして、慰籍を與へて與れやうでも無ければ、治療に注意を拂つて與れた事も無いんだ、滋養物を一度食はして與れた事も無いんだ。死ぬ者なら、疾く死ねば可い位に思つて居るかも知れない……。

「なアに、今度此處を出た以上は、死んだッて歸つて來ませんよ、死んだッて御厄介にはなりませんよ。」と眼の前に親父でも居るやうに、胸の中で云つて見た。而して濡れた眼を睜つて、仇敵の家でも睨

む様に室の内を的も無く睨み廻した。
煙の中に、硝子を嵌めた兩陛下の石版畵が懸つてる、四五年前に文部省から下賜になツた、父の功績表彰の賞狀も額縁に嵌つてる。床の間には、畵仙紙に摺つた二宮尊德翁の肖像が、粗末な紙表裝をして下つてる。

「ふーん、」と眼に入る總てを嘲つた。僞善の標號だと罵つて見た。悉な打毀して遣らうか、とも思つた。思つて居ると、偶と鼻を刺擊する別の臭に氣が着く。戸の隙を潜つて、煙の中に混つて、魚の燒ける臭が臺所の方から飛んで來るのである。これは珍らしい、生魚なんぞ滅多に買ふ事の無いのに、今日は如何したんだらうと思つた。二宮から、何が腐る程來た魚があるらしい、何だらう？と其の強い脂の臭を嗅いで居ると、板戸の彼方から、例の無禮者のお村奴、

「若旦那、御飯でごぜえますよ。」と打切棒な聲で呼ぶ。

毎日遲く起きるので、朝飯とも晝飯とも、孰付かずの十一時に、新吾のみ一人が膳に向ふ例となツて居る。枕頭の銀側時計を取上げて見ると、まだ十時を過ぎて間も無いが、併し今朝は、毎も行る鷄卵の盜食ひが出來なかツたものだから、新吾は空腹を感じて居たところである。て、成るたけ氣の進まない樣な、機嫌の惡い樣な顔を作らへて、勝手の間に遲々出て行つて見ると、居ると思つた母の影が無い。お村も居らぬ。爐の傍には剝蕩けた夜食膳と、一抱もある竹箍の古飯桶が並んでる。膳には黑焦の魚の切身が附いてる、出しだての漬物も載つてる。圍爐裏の薪は燃えもせず消えもせず、相變らず只だ烟つ

てる。灰に落ちた魚の脂がぷす〳〵と臭い。

新吾はどかりと坐つた。而して薄濕のある麥飯を手盛に、口を鳴らしながら不味さうに食ひ始めた。また臥たのか知ら？　と母の事を考へた。裏への通ひ口の、北の腰障子が開放してある。其處から垣隣りの黑い草屋根が見える。草屋根の端から斜に脱れて、木立の深い大山の中腹が覗込でゐる、四五日前の雪の淺く殘つてるのも見える。暗い土間に冷たい光線が流込んでる、風も入つて來る、梁の邊に煙が渦を卷いて動く、土竈の釜の横がてか〳〵と光る。

「お村や、お村、」と突然に背後の納戸の內から母が呼ぶ、「鳥渡來て吳んねえよ。」

新吾は食事を終つて、風爐裏の鐵瓶から湯を注いで居たが、

「お村は居ないよ。」

「何處へ行たゞね？」

「何處へ行つたか知るもんか……。」と其の燻臭い湯を、殘つた飯粒と一緒にずる〳〵と飮んで、「阿母樣、また寢たのかい？」

母の返辭は無い。先刻の事を憤つて居るんだ、と思ひながら新吾も默つて上の室に戻つた。而して緩んだ帶を締直して、柳行李から一張羅の黑斜子の羽織を着て、手巾に藥瓶を包んで、机に懷中鏡を立てゝ、頭髮に櫛を使つた、頓て身拵が出來ると、我が服裝を振返り振返り出て行かうとした。勝手には下婢の影が見えぬ、膳はまだ爐の傍に出た儘てある。新吾は履物を穿かうとしたが、何か心に頷いて、除

と納戸の口へ歩寄り、

「阿母樣、彼方には誰も居らんがね、僕一寸と出て來るよ。」と云つても默つて居るので、障子を明けて顏を突込み「阿母樣、眠つてるのか？」

薄暗い納戸の裡は、着類やら母の手廻の道具やらて、厩の樣に取散してある。黑く塗つた簞笥もある。古屛風もある。菓子折に載せて、有明行燈の代に使ふ洋燈もある。隅の方に虎子もある。藁蒲團に重ねた母の床は、日夜敷詰めに敷いてある。母は起きて居る時の着物を其の儘に、固い夜着を肩まで被けて臥て居るのだ。

「阿母樣、何處か苦しいのかい？」と新吾は寢姿を眺めて訊いた、「藥でも貰つて來て遣らうか？」

「なアに、要ら無えだ。」と云ふ聲は、夜具の襟に押されてか、泥田の底に蛙の唸る樣。

「だツて、苦しきや藥飮めア可いぢや無いか……。下らない强情を張つてらア。」

と云ふと、母は煩さ氣に、顏だけを向ふに振つたので、

「阿母樣、僕は出て來るよ、彼方には誰も居らないよ。」

「何處へ行くだね……、大槻ぢや無ねのけえ？」

「醫師へ行くんだよ。それから、散歩でもして來らア。」

「其樣な處へ行か無えて、大槻へ行つたら何だね？」

「行つて何しろッてんだ？」

「折角の縁談毀れがゝッたて、石黒の末亡人、何樣なに心配してござるべえ‥‥。」

「だから行けッて云ふのか？　厭だ、面倒臭い。縁談なんぞへ關係するなんて‥。」と投げる樣に云つた、

「阿父樣と內野と行つてぢやないか、それで何にか決まるさ。」

「阿父樣は阿父樣よ。石黒樣は、お前の大恩人で無えけえ？」

「恩人だッて何するんだ、毀れる縁談は仕方が無いぢやないか？　豈夫石黒だッて、娘の婿を世話爲せやうと思つて、僕に學資を吳れたんぢやあるまい‥‥？」と新吾は母を反駁て笑つた。而して直ぐと外へ[illegible]

四

新吾の通ふ醫師は、中宿の樂天堂と云ふのだが、町では誰も院號は呼ばずに、蜂屋樣と苗字で通ふて居る。

大山、丹澤山の山の裾に、三方から高く抱へられた秦野は、何方を見上げても山ばかり目に入る。その山には雪があるので、道幅の狹い、屋根の低い町は、冷たい冴えた空氣の底に固まつて居る。人聲が厭に高く響く。石が多いから、荷車の齒が荒く觸る。その車に高く積んだ、專賣所に納める煙草の荷箱が、落ち狀にがたくくと鳴る。屎尿桶を負けた近在の馬は、春季の嘶を呼び交して往來する。彼岸前の農家の暇な節なので、兩側の店頭には草鞋を穿いた客が價を直切つて居る。

その間を新吾は、鼠色の中折帽を冠つて、背は小さいけれど反身になッて行く。在から出た者の眼には、専賣所のお官吏とも映らう。併し當町の者は、校長の息子と云ふ事を知つて居る。新吾の方でも行合ふ顔は大概知つて居る。其邊の水道栓を捻つてる妻さん達も知つて居る。けれども、親父の校長さんの通る時は、右からも左からも、挨拶の煩さい街で、新吾には碌に言葉を掛ける者は無かッた。

即て門柱に、内科外科婦人科の看板の、幾歳かの山風山雨に黒く穢れた樂天堂へ來た。玄關には藥取が三四人腰を掛けて居る。股間の腫物でも切つたらしき若い男が、杖を便によか〳〵歸つて行く。跡には石炭酸や沃度ホルムが臭つた。藥局の硝子戸の内では、髪を奇麗に分けた代診が、かたこと働いて居る。腹の大きい妻君が、醫療器械の箱を提げて、診察所の口から出て來た。

「櫻井君、此方へ來たまへ。」

診察室とは反對の坐敷の縁側から、主人のドクトルが氣輕に呼ぶ。片手には小説雜誌、片手には吸ひ掛けの大和が煙つて居る。今日の宅診が終つて、辛と自分の軀になッたと云ふ風である。新吾が挨拶すると、鬚の薄い小皺の寄つた顔を笑つて頷き、

「何の彼のッて、秦野も春らしくなッたねえ。」と障子を磊落に開けて坐敷に導き、「おい、茶を持つて來ないか。」と呼んだ。

誰も返辭する者も無い。新吾は厚い坐蒲團に小さい體を坐つた。火鉢には火が無いから、隻手は懷中に仕舞つた。書齋とも客室とも兼代の室内は、書籍、簞笥、茶棚、安骨董品、人に見せて差支ない物は

何でも飾立てゝある。地續きの隣家の庭から、米を搗く杵の音が、茶棚の一輪挿瓶を顫はせる。

「この郷では、君の阿父樣を幹事としてあッたけれど、あの、矯風義會て云ふな、彼は一體、誰が計畫したもんかねえ?」と藪から棒に問く。

「誰ですか? 僕は、彼樣な事に興味を有たないもんだから、遂ひ注意を拂つた事はありませんか。」

「無論まア、新思想界の產物ぢやないさねえ‥‥。けれども、宮樣が總裁で、朝野の貴顯紳士、殆ど會員ならざるもの無しと云ふ有樣だが、彼樣な大きな會が、今迄在つたんかねえ? 本部は麴町の有樂町と云ふが、彼邊に、其樣な建物が在るかねえ君?」

「ぢや、お入會になりましたね?」と笑ふ。

「此樣な狹い土地に居りや君、自分一人見識を立てたッて損だからねえ。それに、會費と云や、高が年二圓だらう、二圓ばかり君、僕の家ぢや、紙屑屋へ拂ふ紙屑代でもお釣が來るからね。」と大きな口の傍に笑皺を刻んで、それだけの會費で、毎月一冊宛雜誌が來て、東京へ出た時には無料で講演が聽かれるから、割安に當ると冷評口調で云つて「此地でも、支部の發會式を行るッて云ふ事だが、その時は、本部から誰か來るだらうね、誰だらう‥‥?。」

「なアに、誰が來たところで‥‥。」

「いや、然うぢや無からう、何しろ君、全國に二十萬からの會員が有るッて云ふからね。」

「西洋に此う云ふ諺がありますよ、物の殖へる事をね、僧侶の統計の樣だ、」と新吾は講義でもする樣な語調で云つた、「基督教、猶太教、回々教、佛教、婆羅門……、各宗の僧侶は、世界の人口の三分の一は自分の信者だとか、或は、我が信徒が二億だとか、や三億だとか、各々勝手な統計を立てて居ます、けれども、假に之を正確なものとしたら如何です、世界の人口は幾倍になりませう？」

「はゝゝゝ、面白いねえ。丁度、僕等の社會にも似寄つた事があるよ、列施布の番號さ、あの、藥瓶の札を氣を付けて見たまへ、何院でも、何千と云ふ患者なんだからねえ、秦野中の人間は、悉な醫師へ通つてる勘定だからねえ、あッはッはゝゝゝ。」とドクトルは天井を仰いで高笑の潮を吹く。

餘り賑かなので、仕切の紙門の間から、お河童頭の兒が圓い眼をして覗込む。

「おい芳ちやん、」とドクトルはわが娘を發見けて呼ぶ、「お茶を持つてお來てッてね、それから、火も無えよ。」

「父ちやん、最う御飯だよ、」と可愛い顏が紙門に隱れる。誰かその傍に、云はせる者でも附いて居るらしい。

而ると新吾は、

「一寸と診て戴きませう。」と火鉢の脇から膝を進み寄つて、「何も可けません。」

「まだ眠れませんか？ 困つたねえ何も……、」とドクトルは、新吾の細い手頭を摑んだが、脈を終ると眼の裏を開張けたり、舌を吐かせたり、最後には聽診器まで使つて、さて獨て解つた樣に莞爾と笑

ふ。

「何日まで掛るんでせうなア？」と襟を合はせる。

「然う君、焦躁ても駄目だよ。一名學者病と云つてね‥‥、まア、豪く成つて税を取られると思つて斷念るさ。」

新吾は笑顏になッたが、

「併し、不眠には困りました。」

「些とも眠れんのかねえ？」

「え、些とも。」と新吾は即答したが、その實此頃は熟睡もするのである。

「藥を加減して上げませう。けれども、精神を息めなきや可けないねえ、暢氣に成らなきや‥。まア、暫く讀書を止すんだねえ。」

「それは苦痛てすなア。」

「少し、旅行したら何だね君？」と莨に火を點ける。

「旅行は良いんてすかね？」

「良いねえ。夫は必然と利くねえ、是からは氣候も可いし、伊豆半島でも廻つて來りや、忘れた樣に癒つて了ふねえ‥‥。あの、西岡の敬助君さ、」と話の中に想出して、「敬助君も、何處か旅行したい樣な事を云つてたよ、同伴に行つたら可いぢやないか。」

「ほー、彼の男も旅行するんですか？　何處か惡いんですか？」

「彼も矢張り腦だね、君なんぞより遙と惡い樣だ。加之に何だか、」とまた笑ひ掛けて「失戀の樣な話もあるぢや無いか……、失戀の結果、腦へ來たのかも知れないよ。」

「失戀……？」

「石黑の阿孃樣が厭だと云ふんて、養子の談は毀れたッて云ふぢや無いか……、君は熟く知つてるだらう？」

「それは知つてますが……。」とは云つたが、新吾の知つて居る事實とは相違して居る。此の緣談は、我が父と銀行の內野とが斡旋に成つたものだ。また、双方の經歷と性行とは、新吾から幾回か當人同士へ說明したものだ。此頃になッて急に破談が勃興つた、それが滿枝の苦情から出たのも確かである。併し、未だ何方と決まッた譯ではない。現に我が父は、双方の間を本走中である、「失戀なんて云ふ事は嘘でせう、元來二人の間に、戀が有つたんぢやないんですから。」

「君も文學者の樣でも無いねえ、嫌はれるから戀にもなるぢやないか……、所謂、片戀と云ふ奴さ。」

「然うですかなア？」

「對手は美人だし、財產は有るし、敬助君だッて、戀も落ちるさ。」と先生は無造作に斷案を下して居る。

「然うですかなア。」と新吾はまた云つたが、心では、彼女が其樣な美人か知ら？……

「なんだか、彼の阿嬢様には、他に意中の人でも在る樣な噂もあるが……。誰だらう？」

「其樣な事は無いてせう。」

「けれども、彼の齢まで君……。」と頭髮に白い毛の見えるドクトル君は、中々壯な元氣て云つたが、「櫻井君、君ぢや無いかね、その意中の人がさ……。何だか君らしいね。」

「冗談を云つちや可けません。」と不意なので、新吾の蒼白い顏は眞紅になッたが、体裁が惡いのてすた、「其樣な冗談なんか……。」

「はゝゝゝ、何だか怪しいもんだ、はゝゝゝ。」と獨て面白狀に笑つて、また子供が紙門の間から顏を出すと、「御飯けえ、宜し宜し。」と頷いて、新吾には、「ぢや、水藥の方を加減して上げますよ。」と起ちかける。

新吾も詮方なく挨拶して此家を出たが、その恩人の石黑の娘が目前に現晦く。

五

擂鉢を中央からざくりと破れば、その高い緣が秦野を圍む山脈て、その底が取も直さず秦野に當る。山から外れた南の一方は、平塚大磯の海濱まで、二里餘の平地が明るく展がる。

秦野町の南端れ、其の擂鉢ならば丁度破目に當るところに、幅の廣い河が、解いて投げた帶の樣に盤紆つて居る。大磯へ行つて花水川と呼ばれるのだが、この鄉の者は無水川とばかり云ふ。不斷には水が無いからてある。上流を見ても下流を見ても、何處に一滴の水も光らぬ。干き切つた廣き磧に、冷たい

石が轉々累つて居る。川には欄干を黑く塗つた長い木橋が架つてる。橋板に町の者の下駄が鳴る、車の輪も轟く。在郷者の高聲が、風に吹かれて河原を飛ぶ。此の橋から四五町の下流に、二の宮へ往復の、鐵道馬車會社專用の細橋が、此方からは玩弄品の樣に危險く見える。喇叭を鳴して、その上を馬車が渡る。痩せた馬が脚を悶く、頭を振る。

「見ねえ、彼樣な馬車だよ。」

「礦滓箱に乘つかツて、とろを走せる樣なもんだ。」

丹澤山に働いて居たらしい工夫が、ぞろ〳〵と十四五人も通る。草鞋を穿いたの、足袋跣のゝ、素足に麻裏、太い膨脛を荒繩でぎりゝ縛つたのもある。思ひ思ひの印袢天、毛繻子の襟の筒袖、穴の明いた長い刺着。汚れた頭に多くは獵帽を乘つけて居る。紀州ネルの襟卷をぐるりと頰冠りしたのもある。一人も洋傘を持つた者はない、雨傘を手拭で括つて、背中に掛けたの位のものだ。誰も荷物を持つた者もない、小風呂敷一つ提げた者もない。けれども悉な元氣で、悉な樂し相に見えた。

「憫な奴等だなア。宛然禽獸だ、前途に何等の光明が見えて、彼樣に騷いて行んだ?」

と其の後から新吾は、顏を顰めて迷惑狀に歩いた。歩きながら心の中で熾に罵詈した。文明の虚禮は排斥する、僞善は排斥する、けれども禽獸を眞似ろとは云はん、禽獸の自然を模倣せよとは云はん、此奴等の樂は、犬の挑戯合ふ程度の樂である……と。

だが、人家を離れると、工夫等の騷が一段大きくなツた。高聲で喚く、浪花節を唸る。並んで立小便

をする。女にても行合ふと、大變な事を云つて調戯ふ、袂を引張る、手を握る、女が紅くなッて逃げると、聲を合はせてどッと囃し立てる。それで居て、何かしらむしや〳〵口を動かしてゐる。蜜柑の皮、甘藷の皮、落花生の殼が、彼等の過ぎた跡に長く散つた、駄菓子の袋が春風に轉げた。

新吾は大槻へ行かうとする處であるが、工夫等の挑戯けるのが癪に觸るので、手前の里道から曲つて、遠廻りながら其方に足を向けた。左右には土の黑い畑に、萠黄色の麥が縞を織つて廣がる。今に夏が來れば、此の麥が煙草の苗と植代へられ、紙に卷かれ煙管に詰められて、諸國の人の口に煙る、その原料の葉が培養てられるのである。道が狹いので、新吾は下駄を汚さぬ樣に徐に歩いた。村の者と出逢つた時は、彼方に路を讓らして威張つて過ぎた。雲を透して日光は薄く射してゐる、盃窪がぼか〳〵と暖かである。頭の惡い新吾は、藪蔭に立止つたり、百姓家の背戸に休んだりしては、帽子を脱いで風に觸てた。風を觸てながらも、頭の中では石黑の娘の事を種々に想ふた。

滿枝さんは、疾から僕に意があッた。八九年前、僕が彼の番町の玄關に居た時分、あの頃から其樣な樣子があッた。小說が好きで、その談をして聽かせると、後を後をと強請つて、何時までも僕の傍を離れない。勉強の邪魔をしては可けないと云つて、夫人が叱つて無理に曳張つて連れて行つた。僕が明日の下調をして居ると、その書をひよいと引擲つて、談をしなければ返して上げないなど〳〵困らせた。夕暮に庭へ出て、隣の家根から昇る月などを惘然眺めて居ると、背後から秘と忍寄つて、溫かな柔い掌で目隱をする。僕は直ぐ滿枝さんと云ふ事は分つてるが、態と外の女中の名を呼んだり、一緒に玄關に居

る書生の名を呼んだりした。而ると僕より丈の高い滿枝さんは、熱い息を僕の頭に吹被けて、分らないの、汝の情人よ、と聲を作つて呼いて、ぱた〳〵と笑ひながら逃げる。

一昨年の暮、石黑が旅行先で急病で死んだ時は、滿枝さんと一緒に僕は京都へ行つた。夫人も滿枝さんも、僕ばかりが力である樣な事を云つた。恩人の遺族であるから、僕は我が親よりも彼の人達には盡す氣で居る。けれども僕は、滿枝さんに對して何と云ふ考へを持つて居ない。滿枝さんは僕には美人と見えない、また美人だからと云つて、恩人の總領の一人娘に、其樣な不潔な關係を付けられるものぢや無い。

新吾は學生時代から、婦人に熱中した例が無い、念ひ込だ事がない。學友等の眼色を變へて騒ぎ廻るのを見て、何が彼樣な面白いんだらう？　と訝つて居た位である。夫から最う一つは、婦人と云ふものは何も性が惡い樣にばかり思はれる、口頭では我の氣に入る旨い事を云ふが、心の中では缺點を發見だして、痩ッぽちて、ちんちくて、觀物にしたら嘸ぞ木戸錢が取れるだらうと笑つて居るのだ。若し好い氣になッて何か云ひ出さうものなら、何樣な赤耻を被されるか知れたものぢや無い。就中滿枝さんは然うだ、何も僕を馬鹿にして、好き自由に飜弄して居る樣だ。それとも、彼の隔を置かないのが、僕を懐ふて居る處か……、何にしても見据が付かぬ、底嬌つたい、可怖ない樣な人だ、

「僕よりも、三寸も背が高いんだからなア。」と新吾は想ふても押潰される樣な氣がした。歩が進まなくなッた。

最う大欅の村へ入つて居た。五十萬の財産家に算へらるゝ石黒邸の木立は、直ぐ鼻の前に見えて來た。二抱もある可き欅の大木が、薄曇の春の空に高く網を張つて、入口の左右に幾本か立つて居る。裏庭の方に厚く杉林がある。林の前に勾配の急な寄棟に、山の様な萱家根が高まツてる。納屋がある。土藏がある、厩もある。豚小舍で豚が鼻を鳴らす。白金巾を被にした煙草の苗場が、豆腐を置いた様に長く二列に並ぶ。

「ほーい、ほーい。」と聲を掛けながら、腰の曲つた下男が、家鴨の群を追ふて庭を過ぎる。新吾を見ると醜面を捻つて、「此れは此れはへえ、今日は、何か有るんですかね?」

家鴨ががア〳〵と煩さいので、新吾にはその聲が聽取れなかつた。

「暖たかに成つたな。」と頷いて見せた。

始終來熟れて居るので、廣い庭を眞直に勝手から入つた。爐が上と下と二個所に劃つてある。上の方は疊、下の方は筵、その向ふには板の間も光る。圓柱が寺院のやうに太い。乳呑兒を抱いた出入の嚊が居る、小作人も二三人居る。秦野から來た洋傘屋が、上り口に腰掛けて子供傘の繕ひをして居る、それを珍らし狀に取卷いて、腕白盛の男の兒と、髮を被つた女の兒と、生れて百日も經つたかと思はれるのを負つた子守とが、眼を皿にして見物して居る。

新吾がその傍を通ても、子供等は皆な知らない顏をして居た。機嫌を取る心算で、一寸と頭を撫でると、

「厭だア。」と其の兄息子が頭を掉つて、矢張り傘屋ばかりを見て居る。
「何んたい陸軍の大將、」と新吾は顔を覗いて、「相變らず涎垂してるぢやないか。」
「何てえ、小人島ア。」
「泰ちやん、」と子守は邪慳に曳張つて、「其樣な事いふもんぢや無えせえば。」
「はゝゝゝ、亂暴ちやん。」と新吾は詮方なしに笑つて見せた。
上の爐の傍へ行つて、煮物をして居る子供等の母に挨拶した。故石黒代議士の弟の妻君で、厚木生れの、豊腴とした女である。代議士の存生中から、夫と與に家政の支配を任かされて、年が年中、隻足だッて門の外へ出た事がない、と村の者からは噂されて居る。であるから、知らぬ者は反つて此の弟夫婦を主人と間違へる。郷には不似合の未亡人や、戸主の滿枝の氣取つた風俗をば、お客樣と見るより見やうがないのである。勿論滿枝に婿を貰へば、此の夫婦は直ぐにも分家になる事に決まッて居る。
「如何です、此の取散かした態アよう、」と妻君は世辭笑をして、「さア、彼方へ行らッしやい……。本當にもう、皆樣に御心配掛けまして喃。」
「例の事は如何なッたんです？」と突膝をして居る新吾は笑ひながら訊く。
「如何て貴方、此う云ふ事は最う……。」と際しも煮え上る鍋の蓋を開け掛けたが、「先刻阿父樣にね、滿枝さんを、説諭して貰つたんだけんどね……。」
「は、僕の阿父が來て居ますか？」

「え、然てんすよ。貴方御存じ無えのけえ？」
新吾は知らなかッたので、
「而して、滿枝さん何うしました？」
「若え女は、無頓着なもんで喃……。」と只だ笑ふ。
「滿枝さん何處に居ます？　また造花ですか？」
「如何てんすかよ、先刻、其邊歩いてましたッけが喃。」
「最う造花も飽きる時分だ。」と新吾は笑ひながら起つて、庭に下りた。
庭と云つても只だ廣いばかりで、始終植木屋が手を入れると云ふのでは無い。其樣な氣取つた樹も無い。大きな池は涸れて、眞中の深だけに、汚れた水が溜つて居る。崩れかけた築山がある。枝の伸びた躑躅ばかり多い。桃、柿、梨などの果樹が續く、花壇の跡もある、菜園が杉林まで廣がッてゐる。亡くなッた主人は、娘の結婚までに家屋も改築し、庭園も素晴しいのを造る心算で、設計圖まで出來上つてあると云ふが、それも今は昔の話。
新吾が庭を過ぎると、前の坐敷の障子が開いて、未亡人八百子の、拔衣紋の後姿が見える。額の禿げた我が父も見える、横に坐つてる代議士の弟の、股引の脚を固く坐つて、眼を据ゑて思案顏してるのも見えた。三人は切と密議を凝して居る體である。それでも新吾の影が眼に入つたと見えて、弟だけは此方に顏を向けた。と續いて未亡人も振返つた。遲々と親父も頭を動かしたが、最う新吾は通り拔けた。

其處此處と捜したが滿枝は見えない。葭の薹の隙間もなく出てゐる納屋の傍を通ると、不意に子豚が鼻頭に逃げて來た。それを追蒐けて偏目の十七八の下男が駈けて來た。

「其方から追つちや駄目だよ、後からお廻りよ。」と突然に華かな聲が響いた。

滿枝である。長い竹竿を持つて、溝の向ふ岸に立つて居る。

「やア、今日は豚追になツたんですか？」と新吾は笑つて聲を掛けた。

「其方から追つて頂戴よ櫻井樣、氣が利かないよ……、」と叱り飛ばす樣な語調て云つたが、急に高聲て、「それ、それ、虎吉、庭の方へ行つ了ふぢやないか……、何を惘然してるのさ！　如何したの？　足を如何かしたの？」

「なアにね、瀬戸破片あツたてね……。」

「厭だ、斬つたの？　刺つてゝ？」

「刺さツちや居ねえけんどの……。」

「深く斬れたの？　何か進げやうか？」と袂を探ぐツたが何物も無かツたので、「櫻井樣、手巾持つてるならお遣んなさいよ。」

而ると新吾は笑つて、

「一つきや無いから遣れません。」

「まア、隨分無慈悲だわねえ……。」

と云ふ中、下男は跛を曳きつゝ庭の方へ驅けて行く。
「あら、彼樣なに血が出て居るよ。」と滿枝は見送つてゐる。
「憫然してた報酬さ。」と新吾は徐々滿枝の傍に歩み、「菜葉食つて作らへた血だもの、惜い事は無いッて。」
「ぢや、貴方の血は何を食べて作らへたの？」
「書を讀んで作らへたのさ。」
「豪い事を云ふわねえ、相變らず。」とからりと竹竿を投げて、「口頭で學位が取れりや、貴方は疾くに博士ね。」
「然ですな、然なりや、貴女の方が先輩でせう。」
「何う致しまして、まだ、肩つ切りぢやありません！」
無論新吾の小男なのを諷誂けたのである。新吾は笑つて見せたが、不快の色が顔に躍つた。
「櫻井さん、貴方今日何爲に來らしッたの？」と滿枝が口を繼ぐ、「阿母さんにても招ばれて？」
「いゝえ。」
「ぢや、何か用でも有つたの？　それとも材料取り？」と笑ふ。
「有れば採ります。何か有るんですか？」
「有るわ、貴女の足下に。」

「これですか、」と新吾は負けずに云つた、「此の方は、後廻しにして置きます。」

「ほゝゝゝ。」と高く笑つて、「駄目よ、貴方の眼は望遠鏡だもの。」

「望遠鏡? 何う云ふ意味です?」

「お手許が見えないッて事! 貴方、家の中が見えるの?」

「其様な、謎の樣な事は眞平です。」

「貴方の眼から見たら、世の中の事は皆な謎でせう。未來の文豪は違つたものねえ。」

新吾を見ると毎も此樣な調子だが、その中でも今日は少し手酷しい。緣談一件で、何か興奮して居るらしく見えた。齡は新吾より二歲下の廿三であるが、間を置いた長い姉樣とも云ふべき背である。亡父に似た廣い顏で、むッくりと肩も厚い。特長を云はゞ色の白い位のものだ。それに、此邊の者には際立つ服裝をして居る。

「これが美人か知ら?」と新吾は心の中で訝つて居た。

對人が默つて居ると、滿枝の方では口を閉ぢたが、獨て徐々歩を運ぶ。

「滿枝さん、彼の一件は何したんです?」と新吾も後から從いて行く。

「何の一件? 貴方附いて來たッて厭よ。」

「酷く嫌はれましたね。」

「え、嫌ひ! 大嫌ひ! 今迄とは違ふの。」と眞面目な顏色をして云ふ。

「何故です?」と苦笑した。心では、好かれたッて左程有難くも無いが、と思ひながら。
「然うね……、まア、虚言家だからかも知れない事よ。」
「虚言家? 僕が何時嘘を吐きました?」
「何日だか? 考へて御覧なさいよ。」
「云はない嘘の考が付くもんですか。」
「ぢや、登代子さんに訊いてごらんなさい。」
「妹に? 可笑な事を云ふぢやないか……。」
「失禮よ。左樣なら。」と滿枝は冷笑して、一人で庭から我が室の方へ曲つて行つた。

六

その事情を明さぬので、單だ我儘とのみ叱られて居たが、滿枝は此の夜、櫻井父子の歸つた後で、初めて秘してゐる胸の中を母に明けた。我が夫とすべき西岡の次男は、新吾の妹と情を通じて居たのである。今は關係の斷れた話もある、最う手紙の往復も無いと保證する者もある。けれども、二人の密かに通じたゞけは確かである。此れを聽いてから、滿枝は急に此の縁談が厭になッたのである。

未亡人の耳にも、之だけは意外であッた。併し、單だそれ位の事情では、未亡人は此の良縁を破る氣になれなかッた。西岡家は秦野一の資産家で、勢力家で、町長でも町會でも、彼の人の鼻息ばかり窺つて居るとさへ歌はるゝ程である。加之に其の次男は札幌出身の農學士で、體質も壯健で、容貌も立派で

……、此の地方ではまア、堀出し物のお婿さんである。假へ新吾の妹の方に未練の情があらうと、其の親父たる者が媒酌した結婚に、指も差せる筈が無い。また、汝だとて、些とも彼の女に氣兼する事はないんだから、と未亡人が云ふと、

「いゝえ、私は其樣な事なんぞ……。」と滿枝は頭を掉る。

「では、何も、難かしい事を云はないでも可いでせう。」

「だッて私、其樣な男は厭ですもの。」

「何故さ、前に情婦が有つたからかい？」

「え。」

「お前さんもまア、随分頑固な事をお云ひだねえ。」と未亡人は笑つて、「今の世の中で滿枝さん、女狂ひしない男が有るもんですか。」

「然う？」

「然うともさ、貴女も餘り子供ぢや無いか。」

「おやア母樣、私……、結婚なんぞするのは厭だわ！」

と母子の話のちぐはぐに成つて居る時分を、校長と新吾とは、夜風に吹かれながら村を出外れたのである。

二人は石黒家で夕飯の馳走になッた。殊に父の方は手厚く取賄されたので、常にも無く種々な物を多

量に詰込だ。その他にも、病人への手土産として、重箱が二つ、どッしりと重いのを風呂敷に包んで貰つで來た。石黒家では、下男に送らせ様としたのであるが、物固い父は飽までも辭つて、暗い路を二人限りて通つた。提灯は父が持つた、重箱は新吾が提げた。所々にぼやけた樣な星が光る、雲は流れもせずに漂うてゐる。

父は演說でも講義でも、立派に行れる舌を有つて居る、音聲も長く續く、座談だッて中々下手な方の人ではない。けれども新吾に對しては、何云ふものか餘り口を利かぬ。新吾もまた、親父には進んで話を仕掛けぬ。家に居ても、父子の間に終日談話の無い事も珍らしくはない。その癖來客でもあると、父子して負けず劣らず能辯を浴せ掛ける。今夜は淋しい夜道を連立つたので、默つてばかりも通されなかッた。

「寒い風だなア。」と父は獨語のやうに云つた。

「この村の奴等も、道の惡いのが分らんのか知ら？」と久く置いてから新吾が云つた。

暗い林の間を拔けた時、

「滿枝さんは、お前に何樣な話をして居たのかい？」

「別に何て……。」と新吾は答へた。

また一二丁來ると、今度は新吾の方から、

「一體何決まッたんです？」

「まだ決まッたんぢやないがな。」とばかり。

足は仝じ道を行きながら、父子の胸には、各々異つた事が往來した。勿論新たに勃興つた石黒家の結婚破談に連關してゞある。新吾は切りと、滿枝の言葉を解さうとした、併し何しても解せない。只だ僕に隔心の無いだけは確かだと思つた。彼樣な樣子から考へれば、僕に向つて大に云はうとして居る事があるらしい、明日でも行つたら、或は悉な打明けるのかも知れない、偶として、僕に……、いや其樣な事は無い。有つたところで、彼樣な女は僕には適しない、けれども財産がある、彼だけの財産がありや何事でも出來る、遊んでも暮らせる、自費出版、圖書室、洋行、別莊、と勝手に想像を廻らした。

父の校長は、自分の奔走した緣談の毀れるのばかりを心配した。愈よ破談となれば、責任が自分に掛る。西岡家の感情を損じて了ふ。爰て彼家の感情を損ずれば、秦野に於ける地位も信用も落ちて了ふ、一時に落ちなくとも、誰に頼つて維持して行から的は消えて了ふ。秦野青年會々長、興產會々長、報德會支部長、中郡敎育會幹事、矯風會幹事、と自身には名譽の肩書と信ずる此樣な職名まで數へて、此三十年間に築いた我が地位の末を悲んだ。而して滿枝の我儘を種々と非難した、終には、彼の樣に育てた石黒代議士の家庭敎育を攻擊した。彼の樣な娘を持つたのは、要するに親の罪だ、と斷定した。が、此うして歩いて居る間に、父の足が漸々と遲くなッて來た。街道へ出た頃は、何だか倒れ狀にも見えた。

「阿父樣、何したんです？」と新吾は後から訊いた。

父は默つて居る。半町か其邊來ると、路傍の石に腰を卸して、新吾に提灯を渡した。

「何うしたんです？」

「水が無いかなア？」と云つたが、聲が如何にも細い。

「此邊に水は有りませんよ。」

而ると、父は默つてまた歩き出した。二三町來ると、また息まうとしたが、石も木も無いので、兩手を支いて道中に蹲踞んだ。

「何處か惡いんですか？」

「氣分が不快い……。」と大儀さうである。

「眩暈でもするんですか？　到底も歩けないんですか？」

父は無言て居る。石黒家の御馳走を食過ぎたのと、寒い夜風に當つたのと、毀れかけた縁談の心配とで、腦貧血を起し掛けたのである。冷汗が額を流れた。五十八年の間働き續けた彼の老たる心臓は、警鐘の如く胸で鳴つた。

「困つたねえ。」と新吾は重箱と提灯とを持更へた。

と、父は言葉もなくまた歩き出した。歩くかと思へばまた直ぐ蹲踞むだ。秦野の町の燈火は、最う目の前に數へらるゝ。長い橋を渡りかけた時は、提灯の蠟燭も燃盡して了つた。

（をはり）

村の世話方

（南小泉村第三）

眞山青果

一

南小泉村に引移つて四五日目。是非一度は顔つなぎの酒振舞をひらけ、少しを吝んで村方の氣受を損じても不可まい、と、石岡（僕の間借して居る家）の主人が切りにすゝめる。自家で拵へればお膳は一人前三十錢位ですむ、酒も五合宛あれば好い。蒲鉾だけは些と遠くとも城下の何屋から買つた方が格廉であると、色々算盤を取つてくれた。人數は三十幾人、これも一々名前を書出して見せられた。で、本院とも相談の上、何日、開院の披露の宴を張る事にした。

それには先づ、招請ながら村の重立つた家を此方から廻つたら好からう、見識振つても在郷は通らぬ、腰は低くする事だ、と隱居の差圖である。中にも水車の五兵衞は村の若者頭、衞生係を兼ねてる村の口利き。先づこれが第一。次ぎは區長。次は上(かみ)の虎之助、村での分限である。この三軒は大切であると教へられた。主人の隱居は村の學務員を勤めて居て、月に二三度袴を穿いて學校に出るより外に用事は無い體なので、忙し振が出來るのを何より喜んで居るのだ。ふだんは家に居て鷄の世話や寫物などして居る。こまかく氣の付く年寄で、汁の實や魚の切りやうにまで小言が絶えない。舊士族で馬術師範の家格だが、

維新後間も無くこの村にお在郷したのだ。一人息子の森晋は某宮家に調馬の奉公をして長く東京生活して居た。

すると、奥さんの意見には、「旦那樣、「板橋の家さも廻らなくては不可ませんべ。直ぐ向合つて居て知らん顏も出來まい。」と云ふ。

奥さんといふのは、前に「奥さんは又近所の娘達を集めて裁縫のお稽古だ。小さな丸髷を結つて、瘦せた、小形の、いやに起居の几帳面な人て、癇性らしく始終唇をブル／＼さして居る。演物上手なのが御自慢てある。」と書いた、その人てある。矢張り士族の出て、良人に別れ、子供に別れ、不仕合な體をこの石岡へ後妻に來たのだ。最う十四五年にもなる。頭が高いと云つて、隣近所のうけは餘り好くない。

「なに關ふもんか、あんな畜生めら、知らない顏してる方が好い。」といつこくな隱居は直ぐ憤つた聲てある。

「そだつて、然うは參りますまい、源兵衞は兎に角源左衞門に惡るい。それに、身寄身系も多いんだから。」

「あいつは馬鹿だ。畜生の親だ。」と隱居は喫半しの煙管を煙草盆に當り亂らす。

本性は庄司だが、板橋の名が好く通つて居る。その板橋は今でも門前の小川にかゝつて居る――他の家は多く土橋だ。當代は源兵衞、弟の源七は役場の雇をして居る。親父の源左衞門は今年九十幾つて、門脇の非畠に小さな家を建てゝ、今年十六になる末娘のおふよと一緒に居る。一昨年先の婆樣を見送つ

た當座はひどく力を落して、自分もブラ〳〵疾にかゝり、些とぼけたやうだなぞ噂された位だが、間も無く何所からか茶飲相手の今の婆さんを見付けて來てからは又元通りの元氣になつて、私得畠の指圖やら青物市場の懸引を自分一人でやつて居る。脊は高い、骨組も好い。寄生蟲でも居さうに瞼のゆるく重脹れた、黄色い顏の老爺だ。心の鈍さを表はす口尻は何時も白くとがめられて居る。龜の子の胴亂を腰に下げて、青竹の枝をついて、裾をパサ〳〵と河原町（青物市場のあるところ）へと出て行く。年中白手拭の鉢卷を眞向にだらしなく結んで居る。

僕は兎に角、その板橋へも顏を出す事にした。

二

僕は先づ水車場に五兵衞を訪ねた。新調の紬羽織に袴、氣難しい黒の中山帽子も被つた。何所までも惡丁寧に下々と出て、遜つた樣子を見せた。先方を喰ふ氣だ。

五兵衞の水車は、腐々した植付前の水田を前に、村はづれ庚申堂の直ぐ傍にある。杉皮葺の、横に細長い、堀立同樣の平家。眞向の風當りを恐れて、掌ぐらゐの石塊を屋根一面にならべてあつた。これが搗場、二間ほどの、恐しく床の低い住居をそれに懸下げてあつた。

店頭の往還には空荷馬車が一臺つないである。鬣の長い駄馬はその重い車を引擦りながら、そちこちと路傍の青草を食んで居た。家鴨が五六羽ケッ〳〵とこぼれ米をあさつて居た。

五月の末も――いや六月に近かつた。榛木の伸芽が風に光つた。

五兵衛は臼前の土場、稼場に仕上りの俵をくゝつて居た。二十幾臺の立杵(たてぎね)はゴト〳〵ゴト〳〵と煩さく、目眩(めくるめ)しく地響して、話聲もロクに聞えぬ。腦が疲勞する。頭から糠だらけの若者が二人で房州砂を石臼に添(そ)して廻つて居た。土間へ入ると埃臭(ほこりくさ)い濕氣が冷やりと顔に當る。中にも黴の臭が鋭い。

頭のツルリ禿げた、痩せた小男が五兵衛である。その癖年は存外若いらしく、四十を出て幾らも無いと見た。頬骨は高い、手足の小さな、皮薄い顔立――まア百姓ばなれのした顔立である。慢性の結膜炎とか云つて、青眼鏡の素透を掛けて居た。紺の無尻に帆木綿の前掛をしめて、節不似合の海老茶毛繻のシヤツを伊達らしう着て居た。

「あゝ然うですかい。」と、僕の挨拶を立ちながら聞いて、いやに尊大らしい口を利く――まるで旅すがりの遊藝人でも扱ふ風だ。そして、その、小さな狐目で、僕をヂロ〳〵見て居る。

「何分馴れない事ですから、是非一つ御助力を仰がね　なりません。」

「免狀はあるかね、開業醫者の。」

「ですから當分、本院の名義を借りる積りなんです。」これには僕も頗る參つた。でも、長く某病院の助手をしてゐて、その道には多少の自信ある事なぞ、搔(かいつま)んで話した。

「年は幾何(なんぼ)だね。」

「二十六です。」

「御家内は。」

「まだ、獨身です。」

「そだが、二十六には老けて居すね、誰が見ても三十五六だ。」と、五兵衛先生は笑ひながら前掛の埃をパタ／＼と叩いて、「ま、上つたら何うだね」と、慇懃なものだ。

處へ、學校歸りの赤ッ毛の沸を垂らした小娘が、「五兵衛爺ッあん、役場から頼まれて來した。」と鼠封筒の手紙を持つて來た。そして、不審さうに僕をヂロ／＼見て、バタ／＼と駈出して行つた。

「又だ、甚甲斐の無い事ッた。」五兵衛は手紙を讀んで、さて、勿體らしく眉を顰めた。

「何か急な御用なんですか。」僕は飽迄先方の意を揣いて、故と大業に尋ねるのだ。

「何有、學校の改築事件で又委員に引張出されたんでがすが、斯う何にも彼にもやらせられては、全く甚甲斐がありません。全體村長が無能な人でがすからな。」

「然し、公共の事業ですから、まアやるだけが名譽です。」

「名譽だか何んだか知れないけど、斯う一々引張出されるのは耐りせんよ。」と、ユッタリ組んだ後手に落付を見せながら、小さな目は忙しなく、若者共の臼上げを眺めて居たが、「おい多利、それて針庄は上りだな、そんだら直ぐ、丸三の五俵を仕掛けろ。二番臼で好いぞ。それから荒井の七俵だ。」と大聲に指圖して居る。

「旦那、針庄ンな米が惡るいか餘程切れした。何うしすべな。」と、多利と呼ばれた若者である。

「馬鹿、そんな時にや篩を加減するんだ。」

「ほオ。」と、鈍さうな多利は飼場の方へ行つた。

茶の間へ通された。窓の高い薄ッ暗い間だ。土間にギッシリ積上げた米俵て風が些つとも通さぬ。時折間や壁の隙間からフッと吹込む糠埃に、そこら一面に白い。疊に足跡が付きさうだ。新聞紙を貼詰めた壁際に、欅木目の長火鉢ばかり不似合に目に付く。大きな飯鉢が眞中に投出してあつた。顔に、手に、蠅がうるさい程居る。

河原町に買物に出たとかて、女房は居なかつた。

「さ、とゞら無いけど。」と五兵衛は花莚蓙を僕に敷いてくれて、自分は火鉢の前に無遠慮な胡坐を掻いた。そして、僕を呼ぶに君、君と友達附合てある。

鐵瓶も冷めて居る。火も無い。縁の缺けた瀬戸火鉢にマッチを添えて出した。

「一日に餘程儲けませう、何の位?」

「何有知れたもんてがすよ。今年は今十臺も殖して見ンべかと思つてるけンど、何しろ今てさへ體が引張足ンない位だから、思ふやうに出來せんてな。」

「結構てす。急しい位てなくちや不可ない。斯うして、誰に頭を抑えられると云ふ事も無く、自分の額に汗して公明な生活をして居られるのは、實に羨しいと思ひます。」

「大きに、そこはがすな。これて、天皇陛下を除けば、誰の前ても威張つて胡坐かいて通れるんてがすからな。」と顎を開いて得意さうてある。「そだから私は何時ても云ふんだ。勞働は神聖さ、ね、國家の

事業でがすからな。國會議員は月給を貰つてる、われ〳〵は村會から百文も貰はない。そんで渠奴等以上の事業を働いてるんだ。」と滔々として大氣焰である。氣が張つて來ると、妙に熱心な演說口調になつて、慷慨の拳を叩いたりするのだ。

僕は好い加減の相槌を打ちながら感服して聞いてやつた。

女房が歸つて來た。脊の低い、色の黑い、鈍さうな顏の女である。そこに突立つて、口をホカンと開いて、不審さうに僕を見て居た。斜視のやうだ。

「これ、この人は今度石岡だんぼの家さ御座つた先生樣だ。」

女房は默つて、些いと辭儀したばかり、「河原町の相場は七十錢だとさ、上るばかりでがすぞ。」

「然うかな、由三は大喜びだべ。」

「最少し待つたら、もつと上るかも知んねえね。」と、安双子の絆纏を脱ぎ捨てゝ、無愛措な顏してツイと出て行つた。

五兵衞は又前に戻つて氣焰を吐き初めた。

「それぢや、何れ又御伺ひしますが、何分とも宜しく御賴申します。」と歸仕度するのを無理に引留めて、

「好うがす、出來るだけ力になりすべ。貴方も亦一生懸命に稼ぐんだな。第一藥價だがな、ありや成丈安くするんだね、折角俺が口を利いても、今度の醫者は高いなんて云はれると困るから。」

「承知しました。出來るだけやります。」

「私が手紙つけた病人だけは、是非施療ぐらゐして貰ひたいもんだ。」

「それも承知しました。」

「私はこれが病氣てがしてな、頼まれッと厭んだと云はれねえ性分だ。この前も矢張り、石岡だんぼの家に居た何とか云ふ醫者に頼まれてね、閑上邊の諸親類まで觸れ廻つたもんだ。そんで一文になるでなし、女房にや大小言を喰つたのしや。」と齦を見せて大笑ひてある。

「その氣質を飲込んで、お頼みに上つたんです。」

「はゝはゝゝ、君にひどい所を見込まれたもんだ。人が惡るい。」

僕も笑つて立上つた。

三

區長の家に廻つたが、これは役場へ行つた留守。

次に村一番の金持と云ふ、虎之助の家を訪ねた。これは五兵衛と違つて、些いと喰ひない老爺らしい。何を云つても「んね〳〵。」と畏つてばかり居て、相手にならぬ。二言目には「俺やうなはア在郷者は馱目て御座ります。」と遁を張つて居る。

歸り路に寄つたのが、板橋の源兵衛の家である。先づ隱居所の源左衛門に顏を出した。

源左衛門は例の鉢卷で、狹い座敷の眞中に胡坐を搔いて、パフッ〳〵煙草を燻して居た。隱居所とは

云ふもの丶、高が六疊一間に臺所があるばかり。それも半分は手前の手を貸して建てたらしい、それは粗末な普請――この邊の百姓は大低屋根小前ぐらゐを自分で葺く。煤黒い荒壁は日に乾割れて、雨が透した所だけ白く黴腐つて居る。床も低い、庇も淺い。

六月にも近いと云ふ日中を、老爺は厚い綿入れを二三枚着ぶくれて、坐り直した前から膝頭がだらしなく覗いて居る。その茶飲仲間と云ふ今の婆樣は、澁紙のやうに顏の赤焦けた、目のショボ〳〵した、源左衛門に較べて立つたら、やつとその腋窩までもあるまいと思はれる程小さい六十恰好の婆である。小さな本田髷に結つて居た。喘息らしい咳嗽をゴホ〳〵して居る癖に、始終煙草を離さない、喋る事も好く喋る。愛措好く澁茶を汲んで出したが、穢く伸びた爪垢を見ては些いと飲む氣になれない。

用の話が濟むと、婆さんが切つて出す茱漬をお茶受けに、くだらない世間話である。奧州の田舍では何よりもこの漬物をお茶受けにするのだ。

「そんでは、はァ、貴方は未だ奧樣が無いのかね。」と源左衛門老爺は、咽喉にゆるい、だらしの無い聲でグッリ〳〵と云ふ。

「まだ修業中の體ですからな。」

「なんぼ、修業だつてはァ、奧樣持つて修業出來ないちう事あるめえ、獨りぢや徒然てがすべ。」と厚い唇でダラ〳〵と笑ふ。

「甘い事ばり云つて、先生樣は嘘てがすよ、チャンと好い奧樣を隱してあんのだから。」と婆まで口

を入れる。

「そだべえな、そてなくて、この年まで一人て御座る筈ないもんな。」

「然うてがすとも、今時の若い人ア仲々油断なんねえからね。」

「そだども、そだども。俺ア若い時分とはァ、まるで世の中別だかンな。何うでがす、貴方、婆様にあてられしたべ。」

僕は默つて笑つて居た。

「そんな事云つて、内の爺様だつて若い時は隨分道樂して、そりや手も付けられなかつたと云ふからねし。餘所の後家を探して歩いたりね。」

「噓だがすぞ、宜い加減な事云つてる。」と、老爺は大口を開いて、鈍い濁つた聲て笑つて居る。

「何んて噓てがすけな、俺ア皆聞いて知つてるもの。正作どこの婆様とも、昔ねんごろしたちけな。そいから、一本杉のあれともだとさ。」

「あんな事云つてけつかる。」と、目を下げてエヘラ笑して居る。

「何しろ若い頃は、下滑獨りて結めた事ないッて爺様だからね。呆れた人さ。」

「俺の事ばり云ふけど、婆様だッてはァ隨分、知らねえ顔は出來めえ。」

「俺アそんな事はがアせん。貴方てあるまいし、そいに俺ア若い時から男は大嫌いなんだもの。」と、妙に眩しいやうな顔して老爺を見上げた。

「何うだがな。」

「何うだがッて、本當の事てがすよ。」

「何うだがな。」

「そんだら云つて見さんせ。證據もない癖に口から出まかせ云つてる。俺ア日天樣かけても賭すッから。」

「まア、云はなくとも好げすよ。俺ア本當に知つてるんだから。」

「あれだもン。貴方には負けすよ。」と婆はさも慍りましたと云つた顏をする。

「あはゝはゝゝゝ。」と老爺は又だらしなく、空を突向いて笑つて、「そだけんど、あれて石岡だんぼこそ油斷なんねえ。今ごそあゝしてお袴など穿いてしち八釜しい面してるけんど、昔ははア、何うして〳〵爲方の無え道樂者だつた。舍弟の源三さんと同じ女子張つた時など大騷ぎだッた。」

「今の奧樣來てからかね。」

「未だ來ない時分の事さ。今の奧さん來てからはスッカリ直つた。餘程取扱ひが好いと見えてな。」

と、こんな話をして居る所へ、忰の源兵衛が忙しさうに入つて來た。

源左衛門老爺の忰である。顏まで好く似て居る。茶棒縞の手織木綿の綿入に同じ羽織を厚苦しく着て、大きな白足袋、色褪めた毛繻子の蝙蝠傘を持つて居た。年四十に近い、唇の厚い、痘痕のある男だ。椽先に突立つて、「お父さん、困つたな、裁判が何うも面白くない。」と、キヨト〳〵忙しさうな口振

りてる。

「甚吉の方かな。」と老爺は日和に鈍い目を向た。

「野郎旨く代書人を抱込みやがつたと見えて、此方に不利益な申立ばかりしやがる。寧その事、刑事問題にして告訴すれば好かつた。然うすりや、グゥの音も無いんだ。」と獨りで力味んで居る。

「一體、どれ位貸したんだな。」

「何有、金は些つとさ。そだけんど、默つて居ると、癖になるからな。グン〳〵訴へてやるんだ、畜生、覺えて居れば好い、今に刑事の示談にしてウンと取つてやッから。」

「然うすッと、又裁判所通ひだな、田植前に困つたもんだ。」

「田植など何うだッて、義務は義務だから、訴訟しても取つて見せる。」と額の汗を汚ない手拭いて居た。

老爺が僕を紹介しても、う、う、とばかりで耳にも入らない様子である。

「これだからな。」と椽側に腰かけて、懐の袱紗包を出して、何か知らぬ證書らしいのを老爺に見せて居た。他にも證文や裁判所用紙に書いたものがドッサリ入つて居た。

露西亞詩華

秋元蘆風

その一

〔プーシキン名篇、獨逸譯に據る。〕

一　うぐひす

くらく、しづけき眞夜中を、園にして
薔薇の色香をたゞへつゝ、鶯うたふ。
されども薔薇は、心ある鳥の歌には答せず。
うつらうつらと夢心地、たのしき歌を聞きつゝも、
〔たゞにまどろむ。
同じからずや、詩人よ、君が運命のうぐひすに、
みめよくあれど、心なき少女に歌を寄する時。
おもひの歌を彼女解かず、彼女觸れず、
花やぐ姿眼を引けど、——君がねがひに答せず。

二　秋の朝

しづかなる室をば充たす蘆笛の音や、
あらたに醒めし生の報知。
聲高の朝の時は忽ちに
破りぬ、うまし戀の夢。
み空には今消え果つる夜の闇、
昇る朝紅、白む日や、——
あゝ、いかに寂しき狀ぞ、身のめぐり……
戀人は今遠に！……小川の岸にわれゆきぬ。
わかれの際に行く者を日影照らせしその岸に——
眼はうかゞひぬ鋭くも。さはあれ、あらず
草の中、あらず砂に
戀人の形やさしき足の跡、やはらに踏める——
崖に沿うて、森の中われはあゆみぬ、
胸はなやみに漲りて、涙に閉ぢて眼もわかず、
われは戀しの名を呼びぬ、——かくて響をわれ聞きぬ
さながら耳に嘲弄と響きわたりし反響をば。
しづめかねたる憧憬は、泉の縁に身を逐ひぬ。
鏡の面と平らかに、氷の如も冷やかに水は流れぬ、
戀人の姿は水に宿らずに。

あゝ、今君は遠方に！　來ん春ならで、
わが戀の、焦心のなやみ果てざらん！
秋は暴手に取り去りぬ、
樺の繁葉や菩提樹の繁葉の冠、
嘆きつゝ、枯枝負へる樹々は鳴り、
はげしく渡る大風に落葉は轉び、
池また沼をうち越えて、おほふは狹霧、
怨むが如もシュー〳〵と暴風はわめく。
戀の平和を忠實やかに守る汝等、
いざさらば、あゝ、野よ、森よ、谿よ、山よ！
勝るものなきわが幸の、うけあひ人よ、汝等よ、
いざさらば、——またも遇はんか、來ん春に。

三　末咲

初咲の花の色香は深くとも、
われにゆかしの末咲や。
かねてのねがひ、はたのぞみ
始めて成りしおもひかな。
遇ふよりも、
わかれは深く身にぞ泌む。

四　花

書の中に挿まれて、小花よ、
香なく、褪せて、淋しく獨り・・・・
いひ知らぬ奇しのおもひに
搖ぎぬるわが心、わが情。

いかに久しく汝は榮えし？　何をか飾りし、
春の日に、やさしく、はしき汝が色香？
知るかわれ、心よくも汝を摘みしその手を？
何故に、藏められしぞ、汝は此處に？

たのしき遇ふ瀬を、汝はおもふか、
えも言ひがたき別離のなやみを、また？
谿間の底の夢をか、
はた、音立てぬ森のしづけさをか？

はた、なほ男世に在りや、女なほ生らふるや？
平和の門をば二人は達したりや？
うら若き時の幸福汝が如も、
滅び果てしか？　はやくも褪せし、あゝ、花よ！

五　三つの泉

人知らず、この生の野邊に巖間より
湧きこそいづれ、三つの泉のその流。
「青春の泉」は勢するどく迸りいで、
黄金の光、日の光にまばゆく照らす。
「カスタリアの泉」はきらゝ白銀の色なして、
力もて萎え凋みたる胸を勵ます。
「忘却の泉」は音なく、また暗く、
燃え盛る心のいたみ冷まし、また鎮め、かつ癒やす

六　くろがね、こがね

みなわがものぞと、くろがねいひぬ。
みなわがものぞと、こがねかたりぬ。
われみなとらんと、くろがねいひぬ。
われみなかはんと、こがねかたりぬ。

（以上對譯）

その二

無題

（アレキセイ、トルストイ）

ウォルガの流さかしまに、此處より注ぐ事あらば、！
あゝ、同胞よ、吾等若し、再び生るゝ事を得ば、！
花なき冬に春の花、再びにほふものならば、！
吾等が胸に燃ゆる戀、再び冷むる事なくば、！
深く隠るゝ渡津海の、底をば窺ひ見るを得ば、！
あゝ、同胞よ、美くしき少女に心まかす得ば、！
老いたる女殘りなく、若き少女にかへる得ば、！
酒に交れる水の氣の、若しも少なくあるならば、！
酒に充ちぬる盃の、絶えず口をば廻りなば、！
地獄の鬼のかたはらに、判決正しき神在さば、！
財布の中に白銀の、絶えず音よく鳴るあらば、！
あゝ、同胞よ、いつとなく、己が衣着て行くを得ば、！

貧しき者も常日頃、腹をば充たす事を得ば、！
あゝ、實に誰か人ありて、皇帝に眞理言ふならば、！

運命

（レルモントーフ）

風吹けば、
　朽葉はゆらぐ、枝にして。
運命思へば、
　心は震ふ、胸の中。
あゝ、いかに？——
　若木の枯葉を、風遠く
　吹き去る事のありもせば、
わかれをいたみ、
　枝は悲しく嘆くらむ。
草枕、ふる郷遠き旅にして、
徒にも死ぬる事あらば、
若人は、運命怨まむ。
　はしき少女は、
わかれを嘆き泣くらむか。

雲に寄する詠

（レルモントーフ）

み空をたどる永久の旅人——雲よ、汝等、
遠くみ空を横ぎりて、高く緑の野を越えて、
友に別れて行く雲よ……言へかし、汝等も我が如く、
國を逐はれて、
愛しき北の郷棄てゝ、遠く南へ旅立つか？
言へかし、われに！——運命の言葉汝等を逐ひぬる
か？ひそめる妬みを汝等逃ぐるか？　公の憎み汝等
を逐ひぬるか？
罪過の呪ひ赦免なく、汝等を逐ふか？
誹謗の、毒の、友の言、汝等を逐ふか？

あらず！　たゞ、結實はあらぬ國をしも逃げ去れ、
汝等！
汝等は免れん苦みを、汝等は得られん幸ひを。
悩みも受けじ、身を固く鎖につなぐ其なやみ、
ふる郷の幸もろともに、追放の悩は胸を離るべし。

バラ

（プーシキン。）

いづこぞ、バラは？
友よ、言へ、いざ！
――萎れぬ、バラは、
朝紅の子！

な言ひそ、「かく
褪せぬらし青春！」と。
な詫びそ、「かく
消えぬらし歡樂！」と。

言へ、バラに。
「汝が香は失せぬ――
然はあれ、
われをなだむる百合花！」と。

巖上吟

（アレキセイ、トルストイ）

一

波は騒立ち、暴れ、狂ひ、
辛き泡沫は眼にぞ飛ぶ。
身は巖の上――胸は今
力雄々しく、脈躍る。

潮の滿干に、波はまた
山と高まり、雲と散る……
誰を挑みて、今ぞわれ
得たる勇氣を試めすべき。

汝よ！　汝は、わが胸の
なやみを全く拭ひ去り、
ねぶれる心を醒ましぬ。——
暴れ狂ふ海にも似たるわが心。

二

しづかにも海は和ぎたり。
いさゝかの風だにあらず、
憂みぬる際涯なき海や、
面にはうつる物影。

身は今や巖のうへに——
み空ゆく雲もあらなく、
しづかにも憩ふわが胸。——
しづかなる海におなじきわが心。

祖國

（アレキセイ、トルストイ）

祖國よ、祖國！
疾風と急ぐ駒の足、
天より響くは鷲の叫び、
遠より哮ゆるは狼の聲。

壯なるかなや、あゝ、祖國！
快なるかなや、あゝ、汝等、森よ！
ほがらなる黄鳥の歌よ！
野よ、雲よ、風よ、（露西亜詩華）

途上

秋庭俊彦

けふもまた、海邊の街のはやり歌
仄かに暮れて古家並つづける宿を
しほしほと辿れば、沖の船の笛
潤む遠音にゆゑしらぬ涙をさそふ。

薔薇色の空褪せさりしかなたには
氣象をしめす檣頭に球燈の
青白き火は早やともり、やや暫し
咽び歎かふ風の音、帆のはためきよ。

いつしかに、かたことと通ふ荷車も、
造船場のどよめきも靜まりゆけば、
そそけ顏、あるは淫らの姿したる
人らゆきかふありさまも寂びしげなりや。

たまさかに、不安のかげか、灰濁みて
辻捲く砂にまみれつつ。——日の營みの
疲れゆゑ、ああ幻影の牢獄に
囚はれし世はおのづから顚らるゝ。

期かるおり、そはなにごとぞ、片側の
並木の下に人の群黑づみつどひ
たぢろぎて蠢めき騷ぐ。——われはふと
ものの恐怖にあやしくも心とられぬ。

やがてつと、むさくいきるる背後より
覗き見すれば、なかにあな、途上にひたと
醜げに倒れてはやも息絶えし
ひとつの骸あはれ見よ、凄慘たりや。

垢染みて破れし襤褸にくるまれる
五逆のはての肉身はいま冷えはてて、
ああ業の病か、あるは生活の
犧牲か、荒める幽暗のかげこそ纏へ。

焼けたる青き顏には火の酒の
毒のくるめき猶あるや、惡の死の華
爛れたる吐血のなやみ地に滲む。
面罩らせおづおづと人はふためく。

されどわれ、死のおもかげを眼のあたり

見しこの時よ、みづからもえ分ね鈍の
冷笑を胸におぼえね。なにとなく
命の謎のさびしさの解かるるここち。

げに暗き命の謎のさびしさは
その敗滅のさまに見よ、はての無言に
沈みたる骸に泌みて臭みゆく。
それをし思ひ、ああまたも重たき心

まつはれば、え堪えずそと面そむけ
群をうしろに、さてかかる灯點し頃の
静かさのなかに末後を貪りし
そのこしかたを其れとなく描き歩みね。

風はなほ空のうつろを吹きすぎつ、
湿らふ霧の港には潮のざわめき
おほどかに、ただ一面の夜の色
なにごともなく刻刻に凝りまよふ。

もろみ酒

加藤介春

老爺よ、牛はつながれし柱をめぐり
苦しげに
うなじをあるは脊の肉を
大夏の白に照されて。

老爺よ、牛はかどぐちの柱をめぐり
家内の
汝のかたをのぞき見ぬ、
ときをり、ふかく、ひとすぢに。

日にこそむせべ、睡た氣のこゑ懶くに
牛はいま
うめくとすなり、喉咽ひの
ながき涎を地に引いて。

老爺はされどひたぶるに、几に凭れ
大いなる
桝の隅より濁醪を、
泡立つ酒をくちびるへ。

たゆげに牛は、何しらず呟く如く
こゑ鈍に。
老爺は黒き皺ぐみの
かほうちいがめ、頰笑みぬ。
「あの牛賣らばいかほどの酒をすするも
こと足る。」と
指す指をふるはせて
とろとろ眼をぞ見すゑぬる。
「となりの村の某に、賣らまし牛を
高價に。」と
醉ひゆくままにこゑ高く
またいふ、「うたを歌はむか。」
老爺よ、牛は苦し氣にあぎとふけはひ、
しかはあれ
「われなほ醉はず、うま酒を
更に。」とこゑを荒げて。
老爺は歌をくちずさむ、醉ひたりこゑも
濁醪に、
息こそあへげ、「うま酒を
さらに。」とこゑを高らかに。

黒と白

吉井勇

豹のむれ

君が森出てむとすれど豹のむれ道を塞ぎてわ
れぞかへさず

ありがたく圓光かざす森林に入りなんと
してわが君に會ふ

そのゆふべはつたと睨む森の眼を恐れて
遂に入りもかねたる

火のごとく榛の木の葉はかゞやきぬ落日
を見るひとりの少女

ほの見ゆる森の奥なる修道院童貞すべて
わが君に似る

梟の館にいそぐひとむれの人過ぎゆきぬ
惡のはやしを

その面にわが名を見てはおどろきぬ森の
なかなる大理石の墓

慵うげに千年ねむれるパンの神その千年
をば森もねむれる

森に棲む人はけうとしもろもろの獸の皮
の裘を着る

はて知れぬ千里の森のただなかにただ一
點の鮮血を見る

かくてのち森消え去んぬ殘りたる二人の
うへに霧ぞただよふ

嚴かに神のしかばね横たはる森の奥まで
君まよひきぬ

鉛

われ讃ずほしいままにも樂欲の日を送り
たる男の最後

亂行の斧をふるひて丁丁と大木を伐るひ
とりの男

われ常にわれみづからを欺かず百萬年も
あらむとおもふ

ただひとりウォツカの酒の香をおもふ寒
ふる夜の屋根裏のひと

鎚かと安き日もなきわがこころ二十四時
の疲勞おぼゆる

かへりきぬ七日のあひだ精舍にて潔齋せ
しと云へる男は

その我と終の戀をとむらひし後の我との
ことなりしゆゑ

醉へる子に蜂ぞささやく『いざ歌へ素馨の
花の散らざるひまに』

われ父の子なりと云へるあかしありやか
かる思に今日も苦しむ

疾く往ねよなほみづからを疑はせ嘲みわ
らへる思のやから

ああ今は七つの庫に滿ちたりし君が寶も
盡きなんとする

大沙漠砂立ちまよふはてを見てわれのあ
げたる絶望のこゑ

和歌 紫舟選

○ 中野紫葉

花散りし夕ばかりは落日の悲しき色を身にあびしかな

あゝ小河草にかこまれ月浮べなど悲しみの音をばやめざる

かくしても今日と名づけむ昨日わが爲せることよりなほ愚かにて

いづこにてこの道はてむわれ遂に見しらぬ國へ迷ひ入らずや

いづかたへわれはのがれむ地も空も悲しき色にひた青みたり

雲やゝにわが方へ來ぬあゝまたも默してすぎてわれもだえしむ

若草の中にわれ臥すあたたかき春の光はわれをつゝめり

○ 淺野白汀

夢にげぬ嘴の木の實をあやまりて落としゝ鳥に似たる惜しさよ

胸の中に描けるものゝ一つをば捉へし時ぞよろこびは來る

あやまりてよればゆらめく木の幹の不安を君に知りてあるかな

夢といふほそき絲もて君とわがおもひをつなぐはかなからずや

わが言葉淋しきものゝ一片にあらずや君は笑みてあれども

胸はいまもの怖に居ぬいさゝかの音にも逃ぐる小鳥のさまに

悲しみの日はきたるらしこの日頃うれしきものゝ胸にみちぬる

あやまちぬこの世ゆくべく生れいでしあまりに夢の性（さが）多かりし

○ 大津照水

しろがねの高波いくつ灰色の空にならびぬ雪の夜の街

湯は冷えぬたぎりわきたる古をゆめみる如くとも靜に

母の乳にすがりていともうつくしき夢をか見つ
る小さき子は笑む

麥ふみの少女と森の鶯とうたひ居るなりうすか
すむ日を

春雨はいとしづやかにさら〳〵と小さき絃琴の
音にふるかな

木々はみな晝の疲れにいきつきて夕霧はきぬく
れんとする森

ほとほとと胸の室の戸たゝく人ありげなるかな
君かも來る

○　大澤峽村

橇ひきて「アイヌ」が中のめぐし子は唄ひぬ海に
日のぼる時

風吹けば冬の日來つと私語きて山の背をうつ木
の葉童よ

雪ふれば末黒のすゝきくだかけの白き尾に似て
地にしだれけり

ふるさとの火を噴く山を高原の冬木の上に見つ
ゝわが行く

（信濃を出づるとて）

○　川村潮花

忘れ得ず思ふにあらず若き身はかゝる境を喜び
て生く

うまれ得てもの珍らしう天地を眺むるひまにわ
が若さゆく

明日もまた同じ巷に同じ事くり返しつゝわれは
歩むや

○　玉野白夢

緋櫻は亂れてちりぬ美くしき神あり花の衣ぬる
らしも

うぐひすの濡羽のいろの若芽して柳ありけり春
雨の國

○　野々口精一

夜と日とは太古さながら天地の中をぞめぐるあ
ひしたひつゝ

○　庄崎溪石

影うすき人よと云ふに驚きてさすがに身をかへ
りみしかな

○　佐藤茂

春の潮玉の眞砂にふるゝときさらさらなりぬ喜
びのねに

○　渡邊湖畔

あたゝかき悩みをとはに泣かばやな熟えて落ちゆく果まなばず

谷の家暦日知らず星影の淡きに春の夜とは思ひぬ

○　　　　　　　　佐　藏　琢　瑱

目閉つれば我が虚をねらうさまにしも諸々のこと胸に逼り來

春の潮忍足して若き子がよりて來る如ひそめきて滿つ

○　　　　　　　　眞　々　田　柳　波

春の窓金の絲ひく白日の中に生れぬ緋牡丹の花

清淨の月の宮居の露こぼれ地に匂ひけむ白梅の花

大國の原に八乙女しろがねのたて琴とりて行くと雨ふる

○　　　　　　　　志　氣　風　美

鳥去にてはたゝ神くる六月にあふとし云ひて草はなるらし

○　　　　　　　　村　田　愛　美

南歐の牧の角笛海こえて磯にまろ寐の子にゆるゝかな

○　　　　　　　　菅　原　喜　代　藏

菜の花を何とはなしにみとれては乙女はにかむ蝶の二つに

花やかに路軌り行くあえかなる人の一人をのせて車は

（應募和歌は小石川區一二二尾上柴舟宛の事）



百日紅

蟲干の曼茶羅も見え百日紅　　へ　き

雨乞の壇を築きぬ百日紅　　同

番僧の眠むたき顔や百日紅　　同

百日紅こぼれて雲の峰白し

順禮の鐘見て居るや百日紅　　同

乾飯籠覗く雀や百日紅　　同

釣鐘に石投ぐる子や百日紅　　同

井戸を掘る在所の坊や百日紅　　同

百日紅六百年の伽藍かな　へき
古き鐘古き仁王や百日紅　同
百日紅昔知る寺古りにけり　同
朝日沿び夕日うくるや百日紅　大哲
芥箱に猫の晝寐や百日紅　鷺舟
寺椽はほこりに白し百日紅　出多良女
石につくへな／＼苔や百日紅　天馱朗
目を病みて庭にうとまし百日紅　刀川
椽先に梅干す寺や百日紅　渺々子
草の戸に夕日斜めや百日紅　海の人
繪日傘の妹過ぎ行くや百日紅　シゲ
奉納のかけ手拭や百日紅　蝶々子
しやつ掛けし干物竿や百日紅　櫻村
百日紅小いさき足の泥の跡　白雨
はね泥の乾きし儘や百日紅　八面台
酒庫の夕日に燃ゆれ百日紅　花雛
廢れ水百日紅をうつしけり　弱法師
鳶の糞百日紅にかゝりけり　瘦足
庭に干す繭に日強し百日紅　小蛙
索麺を干す女房や百日紅　江村
雨一過雛に乗す百日紅　綠水

鐵柵をめぐらす墓や百日紅　吼天
水を乞ふ家に人無し百日紅　木拍子
庭石に日のきらめきや百日紅　秋水
雨乞の幾日雨なし百日紅　頑石
境内や相撲の櫓百日紅　桃紅
御百度の石は倒れて百日紅　鯨舟
百日紅晝の妓樓に人あらず　ろく水
耳遠き僧住む寺や百日紅　藍川
欄に倚りて海見る庭や百日紅　伍平
日傘して百日紅にそむきけり　尺水
青桐の亭々たるに百日紅　牛午
幷べ干す土人形や百日紅　孝
百日紅見る目を移す門の札　木瓜
境内の名無し地藏や百日紅　柳子
百日紅百日飽かず眺めけり　魯斧
百日紅庭に風無く日午なり　泡石
百日紅散るや寶庫の片廂　青眉
枝にかゝる蛇の衣や百日紅　柳南
女物干し居る家や百日紅　黄葉村
掃きためし百日紅を流しけり　曉嵐
凪續續く暑さや百日紅　京杜

説教の札立つ寺や百日紅　南若
三尺の庭の日照や百日紅　禾水
暑き日の鐘が鳴るなり百日紅　華星
百日紅盡げの魚板鳴りにけり　百句拙
六地藏の赤き頭巾や百日紅　郷音
瓦燒く土の香や百日紅　嫦娥
布海苔干す庭の日南や百日紅　同
夏椿百日紅に敗けて落つ　草童
百日紅朝寐の雨戸そりかへる　同
廟荒れて百日紅の盛りかな　瓢骨
寺の井の淺きに散るや百日紅　同
晴れし日の鳴神遠し百日紅　抱虎兒
蝶蝶の黒きが來たり百日紅　同
簞簗に午睡覺むるや百日紅　野梅
駕宿の看板吊るや百日紅　同
公園の暑きベンチや百日紅　天風
百日紅岡は夕日の家つゞき　同
衰へし鷄あはれ百日紅　春洋
日に光る金砂銀砂や百日紅　同
飛石の小蛾の道や百日紅　是空
定齋の呼ばるゝ門や百日紅　同

神の井の注連繩古りて百日紅　滑南
籐椅子に日々の讀書や百日紅　同
汲まず井の斷食堂や百日紅　夜色
蛎の殻粉にひく小屋や百日紅　同
經藏の鐵の扉や百日紅　角人
崩れ井に張りある繩や百日紅　同
門入れば宏き玄關さるすべり　南北生
鬼瓦危き樓や百日紅　同
とりこぼつ土塀の塵や百日紅　同
石垣の十藥伸びて百日紅　梁村
百日紅庵主は古稀に衰へず　同
百日紅閻魔をまつる村の寺（禿山無動寺）　同
漢方のこの家古し百日紅　秋紅蓼
わたましの荷を積む門や百日紅　同
砂暑き漁村の晝や百日紅　同
百日紅蚊のわく溝の涸れにけり　濠雨
雨下駄の泥かく椽や百日紅　同
飲みたらぬ水の旨さや百日紅　同
筧ありて山めく寺や百日紅　偲舟
百日紅空洞叩けば羽蛾とぶ　同
山房の晝寢閑なり百日紅　同

金碧の剝けし御堂や百日紅　僊舟
草紙干す百日紅の小枝かな　六絲生
寺町の寺また寺や百日紅　同
藥書の棟塀白し百日紅　同
百日紅蟻の行列今日もかな　同
庭掃けば埃たつなり百日紅　栁村
山門に麥つむ寺や百日紅　同
唐臼に麥搗く庭や百日紅　同
百日紅疫病はやる噂かな　同
百日紅散つて一雨の涼しけれ　漁郎
明放つ家人稀に百日紅　同
火の神をまつる祠や百日紅　同
百日紅散るや日暑き銀沙壇　同
蜥蜴曳く腰細蟻や百日紅　水紫
良き水に去來の客や百日紅　同
日蝕の黄な風吹くや百日紅　同
疫病に流行る稲荷や百日紅　同
雨の蘇鐵涼し百日紅暑し　妖星
石灰の破れ俵や百日紅　同
鳩の糞繪馬に暑しや百日紅　同
塗かけの壁に梯子や百日紅　同

百日紅神の井を汲む旱かな　琴星
燒跡の畑となりて百日紅　同
井を掘りて水出ぬ庭や百日紅　同
百日紅夕日にをろす蔀かな　同
百日紅百合の夕となりにけり　總子
百日紅しよぼ〱瀧は涸れにけり　同
僧房の閑百日紅に詩もありぬ　同
百日紅不涸の泉をたのみかな　同
避暑の留守百日紅に鎖しけり　三錢子
張板の糊干るキレや百日紅　同
百日紅官舍の壁にひてりけり　同
かなくそを積みある背戸や百日紅　同
百日紅日がな蟬聞く油照り　同
百日紅暑しと見たる貸家かな　禹庵
孑々のわく御手洗や百日紅　同
干物の網結びけり百日紅　同
天井の低き宿屋や百日紅　同
百日紅人無き家の犬吠ゆる　同
古茣蓙に干す濡れ炭や百日紅　豊川
外風呂を圍む戸板や百日紅　同
倒れある碑に立つ雞や百日紅　同

庭石に干す馬の具や百日紅　同
土塊を蛇に打つ見や百日紅　同
町中の疱瘡稲荷や百日紅　青城
立てかけし蟬取棹や百日紅　同
野社の百日紅や狐雨　同
壺を焚く護摩の煙や百日紅　同
庭狹き百日紅も借屋住　同
芥燒く脊戸の空地や百日紅　靜帆
百日紅井戸の上なる一枝かな　同
塀長き長者が家や百日紅　同
庭に干す麥のいきれや百日紅　同
井戸を掘る人數憩ふや百日紅　同
溫泉の村へ日高に着くや百日紅　同
百日紅散る鑄掛師の鞴かな　連雀
百日紅忌中の簾風も無し　同
雨雲と見し晴れ雲や百日紅　同
百日紅散るや夏書の窓に風　同
茣蓙を織る女うつくし百日紅　同
百日紅旱りが岡の名ありけり　同
百日紅蟬あり〱と鳴く見ゆる　石鐘
門衛の小さき私宅や百日紅　同
桑刈れば村塾見ゆれ百日紅　同
燈籠の若干はがれて百日紅　同
大店の奧見通すや百日紅　同
百日紅繭の干場ある野寺哉　同
火渡の神事も了へつ百日紅　同
百日紅見る目に醉の發しけり　同

本號應募者九十八名、句數總て二千百二十二句、出句の多かりしは、燈足、梁村、漁郎、靜帆、禹莚、青眉、秋紅蓼、百句拙、總子、石鐘十君の五十句づゝ、濃雨君の四十九句、豐川君の四十八句、夜色君の四十六句、桃紅、連雀、帆天三君の四十五句づゝ、水棠君の四十二句、へき君の四十句なりき。

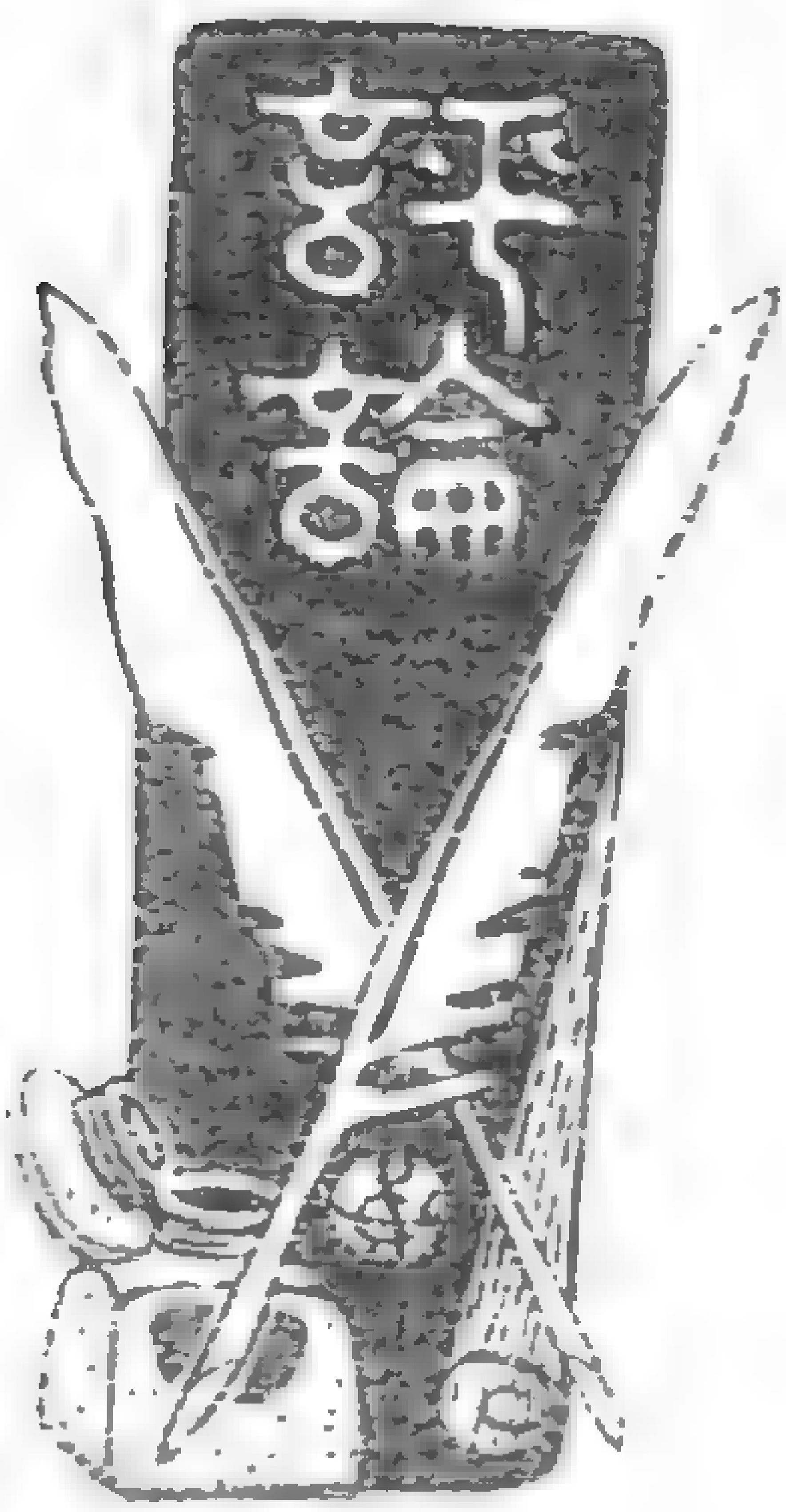
募集課題

雷　五月十五日締切

富士詣　六月十五日締切

左に揭ぐる締切後に到着せし君の句計百七十七句を遲れながら撰拔せるものなり

雨乞を見に行く村や百日紅　夜光
漉紙の乾く四日や百日紅　骨童
日にやけて死ぬ蝸牛や百日紅　同
落柳の反りかへりけり百日紅　小魚
祭見の汗ふく宿や百日紅　同
墓一基百日紅に日の暮るゝ　不言
蘭を煮る隣の庭や百日紅　方外
何に怒る七面鳥や百日紅　桂村



その曲孰れに在るぞ

観濤屋主人

世には常に一種の流行語あるが如し、曾て樗牛氏椽大の筆を揮ひ、竹風氏亦それに從つて放膽の文を草するや、擧世滔々皆その言を壯としその論を快とし、美的生活の四字忽ちにして都鄙青年の口に喧傳せられき、酒樓に雛妓と戯るれば、曰く美的生活なりと、公園に女學生の手を執れば曰く美的生活なりと、而かも逝く水の常に移りて止まざるが如く、美的生活の聲も長へにはその生命を保たず、昨今人々稍々倦怠を生ずるの觀あるに至つて、忽ち自然主義の聲之に代る、是れ流行語の流行語たる所以か、近時の新聞紙を把つて少しく注意するところあれ、事の稍々淫蕩に渉るものあらんか、その記事は直に自然主義の文字を題せらるゝか、左らぬ迄もそれ等の文中何處にか如上の四字の點綴せらるゝを見るべし、誰は自然主義を實行して他人の妻を姦したり、誰は自然主義を實行して糟糠の妻を追ひぬ、或は誰と誰とは手を携へて鹽原の奥に情死を圖れり、即ち自然主義の信者なり、或は又誰の愛孃の下に匿名の手束舞ひ込めり、自然主義流行の今日、こは的然左る信者よりなるべしとて開封し見れば云々と、一にも自然主義二にも自然主義、自然主義自然主義の呼聲恰も當年の美的生活の四字と流行の度を等うす、單に流行とのみ見ば已まん、されど斯る牽强附會なる用語の下には幾何か弊害伴はざるを得るぞ、美的生活の事は暫く措く、自然主義なるものは果して今日新聞紙上によりて爾く傳播せらるゝが如き主義なるべきか、勿論自然主義なるものは或るオーソリテーありて衆說の盡くそれに統一せらるゝにも非れば、大

體は同じとするも、其細密の點に於ては人毎に見を異にするあり或は無目的主義といひ、或は虚實主義といひ、或は現實主義といひ、甚きに至ては自然の二字を人事と相對せしめての意味にいふもあり、左れど予の考ふる限を以てすれば、蓋し人生の未解決に悶ふる當代人の自覺の叫が、忠實なる現實描寫の必要を



感じて、之を紙上に迫り出せりと見るを正解とすべし、若し之を然りとせば自然主義豈に淫蕩を說くものならんや、淫蕩を敎ふるものならんや、予を以て見れば自然主義は懐疑の聲なり、思想上に於ける數年來の懐疑が一角の逸路を發見して文藝上に現れたる聲なり、彼は性慾を描く、如何はしき部分の描寫を試むる

ごともあるべし、左れどそは彼の主張するが如く其處には常に現實暴露の悲哀の伴ふを許さゞる可からざるなり、彼等の創作壇に立つや猶ほ科學者の解剖臺に臨むが如きのみ、故にその描寫に上る性慾も如何はしき部分も、そは解剖臺上に横はる一個の死屍のみ、吾人は必ずしも今の作物が然りとなさず、又警視廳の處置が必ずしも暴なりとも言はざるべし、されどその所謂然らざるものは眞乎の自然主義者と見做すべきかを疑ふなり、風俗問題は扨て置いて、直にその懷疑的態度といふ事が非難の的となるも知れず、曰く世を擧つて悉くデカダンの渦中に誘はれ、國民の氣力をして頽墮萎靡ならしめん、斯くて國家をして遲疑不進の悲境に陥らしめんと、豈それ然らんや、吾人は多くは言はず、泰西詩人の一句能く其安を破せん、「眞理は眞面目なる懷疑の中に存す、決して半解の信仰の中にあらず」と、懷疑なるかな、而して眞面目なる懷疑なるかな、此眞面目の三字に刮目せよ、鈴鹿山浮世を餘所に振り捨てゝ唯メソメソと泣く西行の懷疑を排す、左れど學校にて教師の節度に從はず一向ら甲虫類を集めて樂みたりし腕白小僧が、後年その趣味より導かれてケンテッシユの村屋に遂に進化論を發見するに至りしダーウヰンの懷疑を愛す、眞面目なる懷疑は眞理の母なり、人智日に進みて生活は愈よ複雜となる、而して之に伴つて吾人の自己意識は次第に强烈となる、此細心なる自覺の眼を放つて有らゆる外界の事情に對す、懷疑豈起らざるを得んや、自然主義の包持する懷疑が若し人の子を驅つて華嚴の瀑頭或は淺間の坑口に身を投せしむるものならば、そは即西行の懷疑なり、然らずして遠からず此紛亂せる思想界に統一を與へ、社會を向上し發展せしむるに資するものならば、そは即ちダーウヰンの懷疑なり、前者は泣く懷疑なり、老人の懷疑なり、後者は勇む懷疑なり、青年の懷疑なり、吾人は自然主義の包持する懷疑を以てその後者ならんことを信じて疑はざらんと欲するものなり、吾人は勿論今の文藝を以て必ずしも自然主義ならざるべからずとは信ぜず、左れど自然主義なるもの丶性質上述の如しとせんには、

何ぞ世人の非難の的となり嘲笑の材とせらるゝを値せん、此意味を以て予は今の流行語を呪ふ、而して一面社會の害惡を筆誅するの徒が、他の一面に於て無雜作に無思慮に、我面白氣に斯ゝる孟浪なる流行語を弄ぶを呪ふ、否なそれを傳播するを呪ふ、彼等三面記者等は果して社會の害惡を筆誅するの誠意あるか、誠意ありて却て下らぬ非行に迄主義の名を與



ふること或は恐る却て害惡を皷吹するなきか、然らば猶ほ左手湯を注いで右手水を注ぐの愚のみ、或は商略上一面新聞種を殖して一面社會の木鐸たる名を得るの利あるも知れず、左れどそは操觚者の事にあらざるべし、操觚者の天職としてなさるべき當然の事にあらざるべし、眞乎の自然主義者には立派なる主張あり、而して立派なる擁護者あり、然るに新聞記

事によつて傳へらる丶似而非自然主義が、等しくその主張の下に潜みその擁護の下に隠れ、自己の非行に理を與へて得意なるものあらんを恐る、自然主義者と三面記者と、此の如くばその曲孰れにあるぞ。

社會的教育の必要

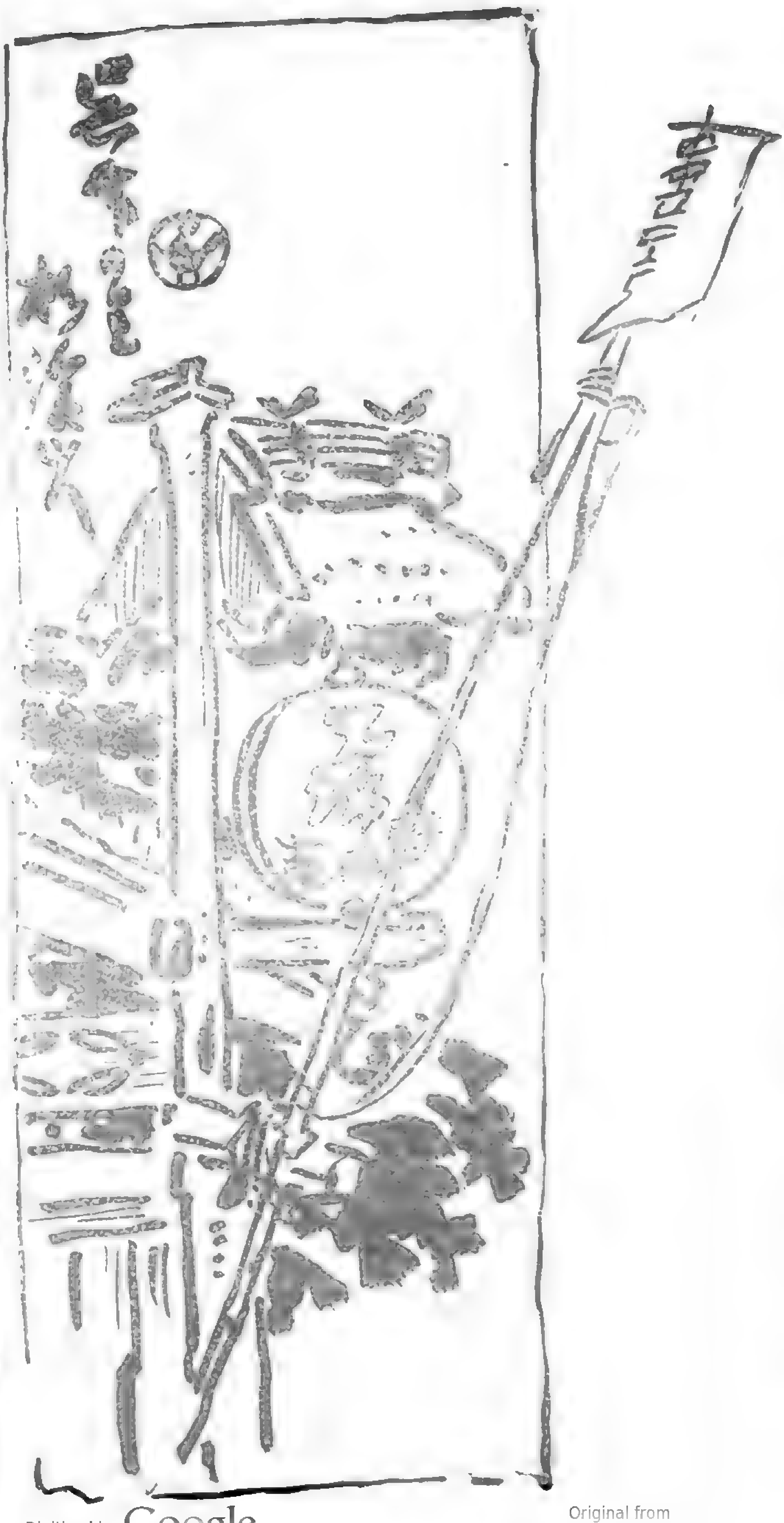
風籟逸人

先月の十日所謂櫻田門外事件以來の大雪があつて、東京市内及び東京から大船邊りに到る迄ての電線電話が非常なる損害を蒙つた、其の爲めに東京市民及び東京市民と交涉する必要のある東京以西の人は皆甚だしき迷惑を感じてこれが修復の一日も速かならんことを欲したのである、當局者もまたそれが爲めには可なり骨を折つたらしく見える。彼の大雪のあつてから二三日後に自分は或る用事の爲めに湘南地方に出掛けた、その日は朝からシホ〱と小雨の降つた日である、横濱の停車場に着くと五六十名以上或は百名近きかと思はるゝ工夫が皆鶴嘴やシャベルの如きものを携へて銘々違つた印半纏を着て汽車に乗込んだ。此等の人夫は彼の大雪で倒れた電柱を建て直し若しくは折れた電柱を新らたにする爲めに大船近く迄出掛けるものであることは其の話によつて知れた。自分は旅行するのであるからこの雨一時も早く霽れかしと祈つて居たが、この人夫共は各自に窓から頭を出して雨の漸く強くなつて來るを願ひつゝあつた、實に譯の分からぬ不思議の事と思つて居たが、好く〱其の理由を考へて見ると、雨が強くなると彼等は仕事をせなくても好い、仕事が休みになつて錢只た儲けるには、是非共雨が強くなつて呉れなければならぬのである、彼等は雨がばら〲と窓を打つ毎に喜びの聲を揚げた。大船に着いた頃ろには盛んに降つて、今日は仕事は駄目だと言はれて引つ返す途中から上天氣になつて呉れれば好いなどと好き勝手な註文をして居る。

私は彼等のこの行爲を見てつく〲と感じた事がある、仕事は何人に取つても餘りに喜ばしき者ではない、殊に鶴嘴やシャベルを持つて土くれや石ころを掘じくる仕事は最も面白くなき仕事の一つに相違ない。彼等がその仕事の休みになるのを喜ぶのも、人情の上には一應の理由のあることである。隨分高等の教育を受けた紳士と言はれる連中でも與寬化しも遁れば不德な事もする、そんな世の中に彼等の如き無教育のものゝみを責めるのは聊か酷に失すると言はねばならぬ。自分も固より毛頭彼等を憎む心はない、併しながらこの一事は大いに現今の教育者並に社會の趨勢に向て無關心なる能はざる凡ての人に向つて一考を促がすの價値かあると思ふ。

彼等人夫共の仕事を厭やがるのは人情上止むを得ざることとしても、社會生活と云ふものは一から十迄悉く人情に從つて營み得べきものではない、厭な事も嫌ひなことも或る點迄は我慢もし我慢もさせて生活して行かねはならねのは悲しむべき止むを得ざる社會の制約である、彼等は其の厭な仕事をなすお爲めに日給幾何と云ふ金を貰つて居る、此の金に對しては厭な仕事もせねはならぬと云ふのは、今言つた社會の制約上必然附き從ふ條件である、それを金は貰ふが仕事は厭だ、或は仕事をせないといふことになれは社會の生活は出來ないと云ふことになる、彼等の如き教

育のなきものに、人道とか倫理とか難つかしい理窟を言つて今幾萬の同胞が不便を感じて居るのを、諸君は何んとも感じて居らぬのかなど言つて責めるのは固より無理な事には違いないが、少なくとも職務と云ふ觀念を與へて、彼等も社會生活上に於て、一の缺くべからざる仕事を請合



ひ、其の仕事は社會の爲めに是非必要なもので彼等が生存して居るのもまたその仕事の爲めてある、彼等の社會生活と彼等の仕事と云ふものは二にして一のもので、其の仕事は彼等の唯一無上の尊貴なものであると云ふ様な考を理窟からでなくとも、少なくとも感情の上に起させるとが、

今日の國民教育の上に於て非常に必要なことてあらうと思ふ。

福澤翁は明治の大教育家てあつたに相違ない、一世の人が封建の夢未た醒めざる時に當つて自尊自活自營獨立獨行の福音を宣傳して、個人の尊貴を自覺せしめたと云ふことは非常なる識見てもあり、功蹟てもあつた、今日と雖とも福澤翁の教旨は何人も服膺せねばならぬことに相違ない、併しながら今日に於てはそれのみにては足らない、それを土臺にしてもう一つ他のものを其の上に置かれねばならぬ世の中になつて居る、個人生活を土臺にして更らに其の上に社會生活と云ふものを建てねばならぬ世の中になつて居る、個人生活と社會生活とは反對語(オッポジットターム)てあつて兩立せないものゝ如く思はるゝが、其實は自立し獨行し得るものてなければ眞の社會生活は出來なくなり、また社會生活をなし得るものてなければ眞の自立獨行が出來なくなるのが進歩し複雜となつた社會の當然てある、アミーバの如き下等動物は身體を幾つに切られても生きて居り條虫の如き其の一節〳〵が各其の生を保つて居るが、もつと高等の動物になれば體の一部若しくは一機關を失ふても其の生を失ふ樣に、社會も進歩せさる内は分裂があつても爭鬪があつても猶ほ他の部分に大した損害を及ぼすとしに存在し得る、併し鐵道があり電話があり電信があり其の他距離を短縮しまた時間を短縮するあらゆる文明の利器は社會と云ふ者を一の有機體となして其の内にある一細胞の損害も直ちに全體の損害となるが如き仕組となつて來る。今日に於ては自分一人好ければ他人は何うても好いなと考へるのは非常なる間違てある、舌さへ甘まければ好いと言つて、甘いものを澤山喰べると云ふと必ず胃の腑の苦情に苦しまなければならぬ如く他人は何うても好いと云ふ考は其の不親切冷淡の酬を巳れ自身に受けねばならぬ世の中となつた、かゝる世の中に於ては自立獨行の徳と共に、人と共に立ち、人と共に行くの道をも教えねばならぬ事は當り前である、然るに或る少數の先覺者の外は此の點に關する注意頗ぶる稀薄なる如きは吾々の不思議とする處てある。

帝國大學は國内に於ける最高の學府と唱へられて居る、然かも其の一分科たる法科大學に於ては、若し看守人さへなければ泥塗れの足駄を穿いてガダ々々と教室に這入る、單に這入のみならず机の上を其の足駄て渡つて行く、甚だしきは他人のノートや風呂敷や帽子に泥を塗たくるのを構はず机を渡つて行く者さへある。また講義中に這入つて來る人も他人の筆記に妨害になろうがなるまいが一向に無頓着である、戸を荒らく開けて跡をピッシャリ締めて其の締める音て筆記が出來なくなるのも平氣である、筆記して居る連中からシュー〳〵の聲を掛けられても顏も赤かめず、一段と反り返つて、大威張りに威張つて這入つて來る、其の顏を見れば乃公は君等の苦情位にてヘコム男てない、己れには君等が總掛りに掛かつても猶ほ且つ恐れざる男氣があると言つた風の色が歴々と讀まれる、かう云ふ男を見る毎に個人主義的教育の弊害が絶頂に達して、今や是非共社會的教育を以て協同生活の意義を教へねばならぬ必要に迫られて居る事をつく〳〵と感ぜざるを得ない。

鶴嘴や、シャベルを持つ人夫共と、角帽を被りノートを脇挾みインクスタンドを手に提げた大學生とを全じ引き合に出すのは如何だが。實際現代の社會は上下を通して協全生活の意義を悟らず。唯々誤解したる個人主義の惡弊に中毒して自他互に嫉視し嗟嘆して面白かるべき浮世をなく味氣な　不愉快に送つて居る、愚なことである、この愚を取り去るは今の教育家並びに社會の趨勢に無關心なる能はざる凡ての人の力にて現社　に　、　活の意義を深く切に吹き込まれんことを望まざるを得ない。

注目すべき

近刊小說六種

『花袋集』『平凡』『天才』『戀ざめ』『相』『廿八人集』を介す

樗陰生

何といつても小說は進步した。自然派の作物はどうのこうのと、惡口をいばれたり、攻擊をされたり、打たれたり、敲かれたりしたが、今日の文壇、自然派の作物以外見るに足るべきものは幾許もない。又自然派勃興以前の作物と自然派の作物とを比べて見れば、殆んど總ての點に於て發達進步の跡は著い。議論は兎に角、左に紹介せんとする六種の著作の如きは我小說界の漸々進步しつゝあることを事實の上に示して居る。事實は最も確實にして最も有力なる證明者である。如何なる議論も、如何なる曲解も事實を打消すことは出來ぬ。現在の文壇を悲觀する人、若しくは危懼の念を以て眺めつゝある人には、括目して此等の作物を熟讀せられんことを希望するのである。

『花袋集』は田山花袋氏の短篇集である。彼の有名なる『蒲團』を卷頭にして、都合十四篇、『土手の家』を除いては作者會心の近作殆んど此中に收めてある。然し忌憚なくいへば吾人は氏の作物に向て徹頭徹尾敬服するものではない。否な其作物には多くの慊らぬ點があるやうに思ふ。氏近來の名聲、及び「早稻田文學」の氏に與へたる「推賞の辭」の如きは少しく氏を持上げ過ぎた嫌があるやうに思ふ。勿論氏はいくら褒め立てられても其れに慢心を起す人でもなければ、自己の立場を動かす人でもないから、よいやうなものゝ、眞の批評眼なきものゝ過褒は必らず其後に過貶を伴うて來る。吾人は其れを恐れる。然し氏の態度には全く感服する。强いていへば、外國物の新らしきものを讀んで、已れも一つこんな行方をしやうといふやうな、少し新らしかぶれして居る所はないでもなからうが、全體の態度は極めて眞面目だ。自分の狙つた的は必らず射る。途中にどんなものが出て來ても決して傍眼をせぬ。足がふらふらせぬ。腰が据つて居る。眼ははつきりして居る。摑んだ材料は必らず摑んだなりに之を取扱ふといふ態度は實に感服せざるを得ない。此嚴肅なる態度と、氏の非凡なる努力とは氏をして着々として進步發展の道を辿らしめて居る。吾人は此集にある氏の作を以て大抵未製品と感ずる。又餘り面白くないと感ずる。然し其れと同時に將來の發達がまだまだあると感ずる。近來の「祖父母」でも「生」でも又此集にないよい所も出て居る。氏は決して天才の人ではない。努力の人だが、此努力は必らず何かエライもの大きいものを捉まずに居らぬと思ふ。氏は多くの作家に西洋文學の話をしたり、作の注意をしたり、我文壇には作以外非常の功勞の多い人である。其割りに作には餘りよいものがないといふので「あの人は文壇の新十郎です」と惡口をいうた人があつた。從來の氏は或はさうであつたかも知れぬ。然し將來の氏はどうして新十郎ではない。少くとも團蔵位にはなれる人である。此集中で纏まりのあるのは「家婦」悽愴なのは「隣室」、眞摯なのは「蒲團」、「一兵卒」は世間でいふ程深酷とは思はぬ。要する「花袋集」一卷、自然派の雄將、田山花袋氏の眞面目なる作品として、氏の作風、氏の態度、氏の力量を遺憾なく語り、氏の將來の大いに見るべきもののあるを感ぜしめる。

『平凡』は長谷川二葉亭氏の作。「東京朝日」に連載せられたものである。凡そ今の文壇に氏程文章の上手な人はあるまい。こなれた、味のある文句は、紅葉の生存中より紅葉を壓した程の人、紅葉の沒後は況して氏の敵はない。長い句を使ても決してだれず、澁い味、燻しのかけた光を

語一句にかけて行く手際は氏の獨擅場である。今の小說家で氏と對立すべき文章家は夏目漱石氏と小栗風葉氏である、夏目氏は成語成句を少し使ひ過ぎて自ら工夫した文字は割合に少いやうだのと、夏目調ともいふべき、拵へたやうな一種の癖が出て來るのとを外にして或は簡勁直截、或は輕妙洒脫、或は優婉倩麗、行く所として可ならざるなきの大手腕を有し、小栗氏には雄壯偉大などいふ分子はないが濃艷、豐縟、優麗は最も其得意で、清楚又は溫潤ともいふやうな文章も巧みに書ける。然し所謂こなれた味ひにかけては二葉亭氏は第一等である。其弊は少し上手過ぎて、輕過ぎるやうな、拵へ過ぎるやうな感を起させる所にある、此「平凡」一篇、氏の長短を最も明かに出したもので、部分〱の文句には何ともいはれぬよい處はあるが、全體としては輕過ぎて嫌な所もある。英國風のユーモーアやペーソスを狙つた所もあるやうだが、何だかそれ丈け作をするといふ態度になつて居て氣に入らぬ。例へば小犬の動作を描寫する邊りは精細を極めて居るが、あれが「拾犬」とは何の事か分らぬ小さな兒童の感想の敍述としてあるのは可笑しい。然し世故に慣れ、人情に通じた人の觀察や感想、なか〱若いものの眞似のならぬ所はいくらもある。何人にも一讀の價値あり、文章に興味を持つ人には熟讀玩味するの必要がある。

『天才』は一寸、先月の新刊批評でも推奬した通り、未完ではあるが近來の最も注目すべき作物の一つで、小栗風葉氏の多才多能なるを遺憾なく發揮して居る。前にもいつた通り、風葉氏の得意は寧ろ艷麗とか豐縟とかいふ處にあるが、此作はそれとは反對に沈鬱、哀愁に充ちた材料を取扱て居るので、文章も成るべく澤を消して燻しをかけて、シツトリと落附かすることに骨を折て居る。然しこういふ材料をかゝせては徳田秋聲氏の方は氏よりも一段上で、文章としては風葉氏の如き名文句を書けぬだらうが、感じの上では全體として之れよりも活きて來るだらうと思ふ。然し名文章は名文章だ、複雜した事を簡潔に書き行く手際など只々敬服の外はない。

之に反して『戀ざめ』は風葉氏得意の材料を得意の文章を以て書いたものである。『靑春』の如く無暗に技巧を用ひず、事柄と文章とシツクリ合つて何ともいはれぬ程よい。溫かで、澤があつて、潤があつて、匂があつて、人の情をそゝる作である。強いて疵をいへば餘り必要もない處に英語などを入れて少しハイカラがつた所はあるが、全體は溫かな中に幾らかの愁を利かせて、深酷なる悲哀はないが、一種の暗愁を起さす丈けの力はある。然しよい所は無論華やかな方、優しい方、美しい方にある。「中年の戀」といふ意味は知らぬが、對手が餘り眞面目でない戀愛を此位巧みに面白く書く作家は氏を措いて外にない。氏のみならず、文壇近時の傑作である。

『[illegible]』は佐藤紅綠氏の短篇集で、「あん火」「鴨」「死人」「人と犬」「地藏ッ子」「夢」「嘘」の七篇を收めてある。本誌の秋の附錄に出た「復讐」は發行禁止の命を受けたとかで、收めてない。發行禁止の話をすれば二葉亭氏の「平凡」も其厄を恐れて、六十回目の後半を抹殺してある。吾人は強ちに當局者の攻擊をするものではないが、其干涉餘りに甚しきに至れば、文藝の爲めには之に反抗せざるを得なくなる。紅綠氏の作物に對しては世間に非常なる誤解がある。作者の狙て居る所、又は描寫の手腕等は一向に見ずして、只其取材の一部を曲解して自然派の賊などゝ叫ぶ手合もある。之を論難するには少くも數頁を書かれねばならぬから、短き此紹介文のよくする所でない。兎に角、此立派なる藝術的作物を熟讀玩味して其誤解を悟られんことを世間多數の人に望むのである。

『廿八人集』は國木田獨步氏の病篤を慰むる爲めに友人廿八人の最も

自信ある作物一篇づゝを集めたものである。西園寺侯の題辭、德富蘇峯氏の序文があり、製本も甚だ美麗で、實に立派なる本である。殊に發行の主旨が最も美なので、一種の感動なしに此本を手に取ることは出來ぬ。風葉、花袋、秋聲、青果、白鳥、二葉亭、藤村、蘆花等を初め錚々たる作家の代表的作物が皆此一册に收まつて居るのだから、現代の文學を窺はんと欲する人にも極めて都合よき本である。吾人は其内容の爲め、殊に其の美擧の爲め、本書の江湖に噴傳し、江湖に歡迎せられんことを希望するものである。（完）

口繪の說明

圖の中央にある基督の彫像は南米、チリ、アルゼンチナ兩國の國境を確定し、兩國の永遠の平和を祝福すべく建てられたる紀念碑にしてアンデス山脈クンブレ峠の頂上にあり。海拔約一万三千尺、盛夏の候尙處々に殘雪を見る。此碑一度建てられて、結ぼれて解けぬ兩國國境問題の葛藤初めて鎭靜に歸したりと。尙此圖は新歸朝者梅上尊融氏の撮影寄贈に係る。玆に謹んで謝意を表す

新刊批評

▲良寬私歌集　大宮季貞著　警醒社發行

越の奇僧良寬は詩を能くし、書を能くし、兼て又歌にも堪能であるが歌は範を萬葉に取つて樸實なる形式の中に眞情を流露したものである、其人已に放曠自恣唯自然と同化して居た丈に、歌も亦超俗高邁、求めずして餘韻の永く消えぬものがある、今此書世に行はるゝこと少い良寬の歌集を活版に付し、原本には萬葉假名で書いてあるのを悉く讀み易い普通の平假名に直し、傍に副ふるに適當の漢字を以てしてある、尙ほ附錄として俗謠韻文、俳諧まで收めてあるが、之を讀めば奇僧は更に非凡の才僧であつたことが知れる、寫眞版の筆蹟八葉これ又珍重すべきものだ（定價四十錢）

▲人體美論　川崎安著　隆文館發兌

單に俗耳を迎する飜譯ものと事違ひ、著者が親しく邦人に就いて一々觀察し研究し、更に古代の繪畫もの等によつて人體美の歷史的穿鑿を試み、參するに泰西の學說を以てしてある、次第に人體美に付いて人々の注意の向けられてある今日、此種の著述は其益するところ鮮少ではない、特に精巧なる寫眞版三十葉を集めて說明を助けて居るのを推奬する（定價金壹圓貳十錢）

▲佛說無量壽經佛說阿彌陀經梵文和譯　南條文雄譯著　無我山房發行

無量壽經和譯には漢、吳、魏、唐、宋の五譯を對照し、阿彌陀經和

譯には秦、唐の二譯を對照したもので、譯著者の自序を見ると阿彌陀經の方の梵文は古來日本に傳つたもの丶外に何も校合すべきものがないから已むを得ぬが無量壽經の方は、龍動亞細亞學協會所藏の本、牛津大學圖書會所藏の本、劍橋大圖書雑所藏の本、佛國巴理亞細亞學會所藏の本、都合四種の梵文を校合し、一旦マックスミユラー博士と共に刊行し、その后マ博士の右の英譯を參考し印度カルカッタ亞細亞協會の藏本を校訂して自ら和譯を作り、その后又た河口慧海師のネパラ國より齎し歸れる梵文をも校合して、遂に此著を公にするに至つたとある、予は博士の忠實なる研究の余に成る此著を歡迎する(定價金一圓五十錢)

▲墨士哥殖民案内

鎌田三之助著
成功雑誌社發行

今日の氣運は最早邦人をして小桃源裡に籠居するを許さず、志を放大にして進んで致富の策を海外に迄試みしむべくなつて居る、此書新歸朝者鎌田氏が、最近の彼地の國情を紹介して細大洩らさず、遺利の大に拾ふべきもののあるを語つて居る、志あるもの丶好參考書と信ずる(定價金三十五錢)

▲雄辯法

加藤咄堂著
東亞堂書房發行

長廣舌の聞えある著者が如何にして長廣舌の結果を有効ならしめ得るかの研究をやつたもの項を分つて雄辯法の目的、雄辯法の基礎以下凡て八つとしてあるが、一々日常の經驗から出て居るだけに親しく感じられる、補遺としての雄辯雑話又一讀の價ある(定價並製金五十錢)

▲題言集

三宅雪嶺著
隆文館發行

雑誌『日本及日本人』に每號載めたる題言集に他の長短文とを集めて一册としたもの、悉く三宅博士の老實にして而も氣脈の甚だ洒脱な文に成

たもの、博士の博宏なる學問、透徹せる眼光、超邁なる識見とより溢れ出たもので容易に他人の摸し難きものがあるがそは定評の在ること今更贅するにも及ぶまい、常に讀み來つたものではあるが、集めて一册子として見れば、又別樣の感がある、(定價金五十錢)

▲眞生涯の礎

松村介石述
成効雑誌社發行

基督信者の中でもその意氣の豪宕なる點に於て一異色のある氏が、常に青年の爲に說き來れる修養談十二則を集めたものだ、救世的自任論、偉人論以下每篇、盡く細嚼すべき滋味に富んで居る、(定價三十五錢)

▲基督教大系

宮崎八百吉著
警醒社發行

序說の一項『著者の位置』に置て先づ自己の聖書主者なること、即ち宗派によつて異なる信條の一切を否認し、直に聖書によつて基督教なる見の態度を明確にし、此見地に立つて基督教を通俗に問答體に說述したものだ、

▲基督教通觀

星野光多著
警醒社發行

基督教の教條をば一々各問題に照して精細に解釋したもの、その大體の欄の區別を見ると、序論、概論篇、教理篇、基督篇。生活篇、教合篇、傳道篇七つてある、そして更に各篇の下に多くの項目を設けて詳述してある、求道者の好師友であろう、(定價金一圓)

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
●當會社の保險は凡べて嶄に新して且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
●當會社は掛金割增（年增契約）の代りに保險金控除（或ル年限內ニ死亡セバ）の新法を用ゆ
●當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

眞宗信徒生命保險株式會社

京都市下京區油小路御前通角（電話 七貳貳番）京都本店
東京市京橋區南槇町壹番地（電話本局五壹八番）東京支店
大阪市東區大川町御靈筋角（電話東壹貳五參番）大阪出張所
長崎市榎津町六十五番地（電話 七貳六番）長崎出張所
廣島市紙屋町（秦 忠兵衞方）（電話 六〇八番）廣島出張所

此廣告により御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

日本唯一 **青春男女合同** 文藝雜誌

（毎月一回）

新文林

（一日發行）

第壹卷第貳號　五月一日發行

定價一冊金拾錢郵税一錢六冊郵税共割引金六拾錢拾二冊同金壹圓二十錢

戀とは何ぞ！愛とは何ぞ！

此疑問を解決せんと欲せば請ふ速に來つて本誌に投ぜよ

◉口繪 肉躍り血沸けるの狀を寫したる**裸身像**外**二葉**

▲卷頭作品

◉"MEMORIAL!"（小說）……山岸荷葉

◉赤提灯（小說）……樋口二葉

◉嫁ぐ日（小說）……石丸梅外

◉ボナパアトの末路……文學士 篁州

◉驛路（美文）……峯村白影

◉京の一日（紀行）……遲塚麗水

等其重もなるものにして行く春◉一點紅◉花ごゝろ◉流浪者等數篇の小說亦皆青春男女の現代思潮を寫せるもの、此他秀才、才媛諸君の投寄に係る◉論評文◉叙事文◉抒情文◉小說◉消息文◉小品文◉新體詩◉短歌◉俳句◉川柳◉漢詩◉文友詩友等全誌三千餘章に及ぶ◉雲中語及び新文士評判記亦本誌の特色！

每號懸賞 文詩歌句募集

賞金參圓 最低卅錢

當賞者卅名

詳細規定本誌に有

發賣所 東京神田三河町一丁目十九番地（振替口座番號第三八一五番）**博報堂書店**

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋尾張町　東海堂
仝　日本橋呉服町　北隆館
仝　本郷本富士町　盛春堂
仝　京橋區鎗屋町　良明堂

關西大賣捌所

大阪備後町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

○壹冊定價金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外郵税八錢）但本號特價欄外にあり

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵税共		

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十一年四月廿七日印刷
明治四十一年五月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一
東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖

宮内省御用達

D.K.

東京市京橋區八官町九番地

小林時計店

電話新橋一〇〇三
電信略語コ(又ハ)コ八
振替口座七八〇七

營業品概目

時計附屬品、指環、簪、
帶留、ブローチ、手釦
紀念品一式

最新の流行品目錄郵劵
六錢封入御申越次第進呈す

紀念品
賞牌メタル
迅速廉價

